

靈界物語 第一六卷 如意寶珠 卯の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十六卷』愛善世界社

1996(平成8)年04月07日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

第一篇 しんぐんれいば  
神軍靈馬

第一章 あまのはしだて  
天橋立（五九一）

第二章 暗夜の邂逅やみよ かいこう（五九二）

第三章 門番の夢もんばん ゆめ（五九三）

第四章 夢か現かゆめ うつつ（五九四）

第五章 秋山館あきやまやかた（五九五）

第六章 石槍の雨いしやり あめ（五九六）

第七章 空籠からかご（五九七）

第八章 衣懸松きぬかけまつ（五九八）

第九章 法螺の貝ほら かひ（五九九）

第一〇章 白狐の出現びやくこ しゅつげん（六〇〇）

第二篇 深遠微妙しんゑんびめう

第一章 寶庫の鍵ほうこ かぎ（六〇一）

第一二章 搜索隊そつさくたい（六〇二）

跋ばつ

第一八章	遷宅婆 <small>せんたくばば</small> 〔六〇八〕
第一九章	文珠如來 <small>もんじゆにょらい</small> 〔六〇九〕
第二〇章	思はぬ歡 <small>おもよるこび</small> 〔六一〇〕
第二一章	御禮參詣 <small>おれいまゐり</small> 〔六一一〕

第三篇 眞ま奈な爲がヶ原はら

第一三章	神集 <small>かうづ</small> の玉 <small>たま</small> 〔六〇三〕
第一四章	鵜吞鷹 <small>うのみだか</small> 〔六〇四〕
第一五章	谷間 <small>たにま</small> の祈 <small>いのり</small> 〔六〇五〕
第一六章	神定 <small>しんてい</small> の地 <small>ち</small> 〔六〇六〕
第一七章	谷 <small>たに</small> の水 <small>みづ</small> 〔六〇七〕

靈たまの礎いしずゑ（一）  
靈たまの礎いしずゑ（二）

~~~~~

序文じよぶん

いよいよ本卷ほんくわんより、古稱こしやう自轉倒島おのころじますなはち現代げんだいの日本國內にほんこくないにおける、太古たいこの靈れいか界物語いものごととなりました。十五卷じふごくわんまでは天教山てんけうざんおよび大臺ヶ原山おほだいがはらさんを除く外ほかすべて海外かいぐわい

諸國しよこくの物語ものごとです。

本卷ほんくわんには、神素盞鳴大神かむすさのをおほかみの生うみませる八乙女やおとめの御一人おひとり、英子姫ひでこひめが、メソポタミヤの顯恩郷けんおんきやうより、邪神じゃしんのために老朽船らうきうせんに乗せられて海原うなばらに流ながされ、漸やうやくにして日にほ本海んかいを横斷よこぎり、丹後國たんごのくにの天の橋立はしだて附近ふきんの龍燈松りうとうまつの根元ねもとに安着あんちやくし、大江山おほえやまに割據かつぎよせるバラモン教けうの大棟梁だいてうりやう鬼雲彦おにくもひこの部下ぶかの惡黨わるものどもに出會であひ、種々しゆじゆ辛酸しんさんを嘗なめ、遂つひには由良ゆらの湊みなとの人子ひとこの司秋山彦つかさあきやまひこの館やかたに身みを遁のがれ、ゆくりなくも、父素盞鳴大神ちすさのをおほかみおよび

くにはるたちのみこと 國治立命の御分靈なる國武彦命に面會し、大江山に鎮まり給ふ鬼武彦一派の白狐に救はれ、或はウラナイ教の棟梁株、高姫、黒姫の死者狂の大活動より、劍尖山麓の谷川における御禊の修業、皇大神の貴の御舎の建設ならびに天の眞名井嶽に向つて、悦子姫は四五の従者と共に進み入り、豊國姫尊の御降臨地を探ぬる一條や、嚴の御魂、瑞の御魂の大神が、綾の高天原の蓮華臺上に、神祕的經綸の基礎を開き給ふ深遠なる經緯の大略を述べて置きました。猶引續き數卷に亘り内地の物語であります。

數十萬年前の神代の物語にも抱はらず、近代の言語又は出來事などを引證して有りますから、懷疑の念を以て迎へらるる讀者もありませんが、神々様の意思を表白する便宜上用ひられたのでありますから、惡しからず御諒解を願ひます。

大正十一年舊三月二十日

於瑞祥閣 王仁識

一、序文にもある通り、本巻より古稱自轉倒島すなはち現代の日本國を舞臺とせる物語に入つた譯で、一層讀者の興味を喚び起すことであらうと思ひます。

一、本巻の中に「大江山」といふ地名が出て來ますが、鬼武彦の鎮まれる方の「大江山」はタイカウザンと讀み、鬼雲彦の割據せる方の「大江山」は、オホエヤマと讀むのですから御注意下さい。

一、本巻より「靈の礎」と題して、瑞月先生の自ら執筆せらるる文章を掲載されることになりました。これは直接「物語」に關係ある譯ではありませんが、靈的研究熱の勃興せる今日、必ずや讀者の多大なる歡迎を受くべきものだらうと思ひます。これによつて、顯幽神三界の眞理、死後の生活、天國の狀況、根底の國の狀況等について、今日まで何人と雖も斷定し得ざる眞理が闡明されてゆくに相違ありません。

大正十一年十二月

編者識



總説歌

廿五年の時つ風 待ちに待つたる三月三日  
梅は散れども桃李の花 香も馥郁と天地の  
神の集まる園の内 物は言はねどおのづから  
小徑をなして集ひ来る 民は豊に豊國姫の  
貴の命の分靈 瑞の御魂の開け口  
深き恵は大八洲彦 神の司の遠近に  
輝き亘る三五の 月の教は五六七殿  
神代を明かす物語 清く傳へて末の世の  
鑑となさむ礎を 修理固成し瑞靈  
嚴の靈を經となし 緯機織りなす瑞月が  
過去と未來と現在に 亘りて述ぶる言の葉も

榮ゆる天の橋立や  
文珠の智慧の神心

身は虚空藏の空に置き  
妙音菩薩、最勝妙如来

三十三相の觀世音  
大日如来と現はれし

日の出神の御活動  
木の花四方に咲耶姫

松の神世の開くまで  
深き經綸は彌仙山

曲津の荒ぶ世の中に  
心を配り氣を配り

此世を渡す地藏尊  
神も惡魔も助け行く

大慈大悲の彌勒神  
現はれ出でて治す世は

龜の齡の瑞祥閣  
御空に高く舞鶴の

神代の幸を冠島  
畏き御代に大島や

人に踏まるる沓島の  
小島の果に至る迄

あら有難や荒波に  
漂ふ世人を助けむと

綾の高天原に現はれて  
教を流す和知の川

金龍銀龍舞ひ遊ぶ  
綾と錦の錦水亭

言靈閣は 大空に 雲を 壓して 聳ゆれど

暗に 迷へる 人の 目は 神の 光も 三重の 塔

梅さく 苑や 常磐木 の 小松 茂れる 龍宮 館

春の 嵐に 吹かれ つつ 教 御祖 を 祀り たる

珍の 御舎 ふしを がみ 身を 横たへて 神靈 の

厳しき 鞭に 打たれ つつ 横に 立てりて 述べて ゆく

神素 蓋鳴 の 大神 が 生ませ 給ひし 八柱 の

心優 しき 乙女子 が メソポタミヤ の 樂園 を

後に 眺めて 四方 の 國 父の 尊の 遭難 を

風の 便りに 聞きし より 豊葦原 の 八洲 國

西や 東や 北南 國の 八十 國 八十 の 島

隈なく 尋來て 大神 に 廻り 會はむ と 御跡 を

慕ふ 心の 矢も 楯も 堪り かねて ぞ 種々に

姿を やつし 出で 給ふ 悲しき 神代 の 經緯 を

三月三日に因みたる

瑞の御魂の和魂

畏き御代に大八洲彦

神の司の神實を

高天原に神集ふ

教司や信徒が

赤き心の花開く

神の都の五六七殿

齋き祀りて演藝の

守りの神と齋ひつつ

誠【一】つの教子は

神と君とに【二】心

吾あらめやと仕へ行く

【三】【四】の榮は【五】までも

【六】び榮えよ【七】の國

神徳かをる大【八】洲

【九】つ花の咲き出でて

常夜の闇を照らし行く

【十】曜の神紋きらきらと

輝く棟を眺めつつ

玉の御柱つき固め

榮ゆる御代を【松村】や (松村仙造)

御國の先祖【仙造】

と現れませる 國常立の大神の

教を開き【北村】や

【隆々】光る神の教 (北村隆光)

【外山】の霞かきわけて

【豊二】昇る朝日影 (外山豊二)

【山】の尾の【上】を照らしつつ  
百花千花は馥【郁】と  
(山上郁太郎)

輝き渡り澄みわたり  
薰るもゆかし教の花

遠つ(【藤津】)神代の昔より  
幾億年の末迄も  
(藤津久子)

見きはめ盡す【久】方の  
神の御言をいや【加藤】  
(加藤明月)

項に受けて説き【明】かす  
三五の【月】の数みちて

四四十六の菊の巻  
九月八日の神界の

錦の機の絲口を  
結ぶも嬉し道の友

榮五六七の末迄も  
堅磐常磐に宣り傳ふ

口の車や筆の梶  
果しもあらず進み行く

今日の生日ぞ芽出たけれ  
あゝ惟神々々

靈幸倍坐世よ。

(大正一一・四・五 舊三・九 松村眞澄録)

第一篇 神軍靈馬

第一章 天橋立（五九一）

葦原の瑞穂の國に名にしおふ  
メソポタミヤの顯恩郷

ノアの子孫と生れたる  
ハムの一族鬼雲彦は

バラモン教を楯となし  
靈主體從を標榜し

現の世をば輕んじて  
魂の行方の幽界を

堅磐常磐の住所ぞと  
教へ諭すはよけれども

名實共に叶はねば  
醜の曲事に月に

潮の如く擴がりて  
天の下なる神人は

苦み悶え村肝の  
心ねぢけて日に月に

世は常暗と曇り行く  
八岐大蛇や醜狐

醜神率ゐる曲鬼を  
言向和し豊なる

神の御國を樹てむとて  
恵も廣き瑞靈

神素盞鳴の大神は  
教を開く八乙女の

珍の御子をば遣はして  
鬼雲彦が身邊を

見守り給ひ曲神の  
醜の健びを鎮めむと

三五教の宣傳使  
肝太玉の命をば

遣はし給ひ八乙女と  
心を併せ力をば

一つになして顯恩郷  
治め給ひし折柄に

雲を霞と逃げ去りし  
バラモン教の大棟梁

鬼雲彦の類は  
フサの國をば打渡り

あちらこちらに教線を  
布きつつ進む魔の力

斯かる時しも天教山の  
高天原に大御神は

天の岩戸に隠るひて  
暗さは暗し烏羽玉の

闇に徨ふ世の中の

人の憂ひに附け入りて

時を得顔の曲神は

益々荒び初めにけり

神素盞鳴の大神は

千座の置戸を負はせつつ

何處を當と長の旅

姿隠して千萬の

悩みに遭はせ給ひつつ

八千八聲の時鳥

血を吐く思ひの旅の空

遠き近きの隔てなく

八洲の國を漂浪の

御身の果ぞ憐なる

勢猛き龍神も

時を得ざれば身を潜め

蝾螈蚯蚓と成り果てて

塵や芥に潜むごと

高天原に名も高き

皇大神の弟と

生れ出でたる大神も

いと淺猿しき罪神の

怪しき御名に包まれて

心も曇る五月空

空行く雲の果しなく

親に離れし雛鳥の

愛しき五人の姫御子は

心汚き曲神の



捕虜となりて痛はしく  
鹽の八百路の八潮路の

大海原に捨小船  
波のまにまに漂ひつ

海路も遠き龍宮の  
魔神の猛ぶ一つ島

自轉倒島や錫蘭の島  
常世の國や智利の國

波のまにまに流されて  
ここに姉妹五柱

詮術さへも浪の上  
涙の雨にうるほひつ

雨風霜に打たれつつ  
漂泊ひ給ふぞ苛しき

神素盞鳴の大神の  
靈に生れます八柱の

乙女の中にも秀でたる  
姿優しき英子姫

容も貌も悦子姫の  
待女を引つれ朽ち果てし

危き生命の捨小船  
何時の間にやら日敷を重ね

年も二八の若狭灣  
身の行先はどうなりと

成生の岬を後にして  
昨日や經ヶ岬をば

右手に眺めて宮津灣  
神伊奘諾の大神の

いねます間に倒れしと言ひ傳へたる波の上

長く浮かべる橋立の切り戸を越えて成相の

山の嵐に吹かれつつ漸く心地も與謝の海

波も柔く龍燈の松の根元に着きにける。

二人は舟を棄てて、龍燈松の根元に漸く上陸したり。折柄の烈風海面を撫で、

峰吹き渡る松風の音は、一層寂寥の感を與へたり。寒さ身に沁む夕暮の空、ねぐ

ら求めて立歸る鳥の群幾千羽、カワイカワイと啼き立て乍ら、大江山の方面指し

て翔り行く。雲の衣は破れて、處々より天書の光瞬き始めける。二人は路傍に腰

を下し、來し方行末の身を案じ煩ひつつ、ヒソビソ物語る。

悦子姫 英子姫様、メソポタミヤの顯恩郷を立出でましてより、情無き魔神の爲

に、朽ち果てたる舟に乗せられ、押流された時の事を思へば、夢の様で御座いま

すなア。それにしても、君子姫様始め、四人の姫様は、どうなられましたでせう、

貴女の御無事に此處へお着きになつたに就いて、四柱の姫君様の御身の上、

心にかかる冬の空、情無き凧に吹き捲くられ、冷たき人のさいなみに、心を碎かせ給ふやも計り難し。併し乍ら此處もやつぱり鬼雲彦が繩張の内、ウカウカすれば、又もや如何なる憂目にあはされむも計られませぬ。一時も早く森林に身を忍び、一夜を明かし、山越に聖地を指して参りませうか」

英子姫「アさうだな、長居は恐れ、何とかせなくてはなりません。それに就ても姉妹四人の身の上、今頃は何處の果に悩み煩ふならむか」  
と首を傾け、暫し涙に沈む。暫しあつて英子姫は頭をあげ、

「ア、思ふまい思ふまい、何事も刹那心、惟神に任すより途はない、サア悦子姫、急ぎませう」

と立上らむとする所へ、近付き来る四五人の男の聲、ハツと驚き逃げむとする時しも如何はしけむ、英子姫は其場にピタリと倒れたり。悦子姫は探り探りて磯端の水を手に掬ひ口に含み、英子姫の面部を目蒐けて伊吹の狭霧を吹きかけたるに、英子姫は漸くにして顔をあげ、

「ア、悦子姫どの、又もや吾身を襲ふ持病の癩、モウ斯うなつては一足も歩かれ

ませぬ、敵に捉はれては一大事、そなたは妾に構はず疾く此場を落ち延びなさい。  
サア早く早く」

と苦しき息の下より急き立つるを、悦子姫は涙を揮ひ乍ら、

「姫君様、何と仰せられます。大切な主人の危難を見棄てて、どうして是れが逃げられませうか、假令如何なる運命に陥る共、主従死生を共にし、未來は必ず蓮托生と詔らせ給ひしお詞は、妾が胸に深く刻み込まれ、一日片時も忘れた暇とては御座いませぬ。どうぞ妾に介抱させて下さいませ」

と泣き伏しにければ、英子姫は、

「工、聞分けのない悦子姫、妾は病身の體、假令此場を無事に遁るればとて、再び纖弱き女の身の、何時病に犯され、悪神の爲に捉はるるやも計り難し、汝は一刻も早く此場を立去り、聖地をさして進み行かれよ」

悦子姫は首を振り、

「イエイエ、何と仰せられても、此場を去ることは忍ばれませぬ」

「工、聞分けのない、主人の言葉を汝は背くか。妾は今より主従の縁を切るぞ」

「姫君様、縁を切るとはお情無い其お言葉……」

と云ふより早く、暗に閃く兩刃の短刀、英子姫は、病に苦む身を打忘れ、手早く

悦子姫の腕を、力限りに握り締め、涙聲、

「逸まるな悦子姫、其方は壯健なる身の上、一日も永く生き長らへて、吾父に巡

り會ひ、妾姉妹が消息を傳へて呉ねばならぬ。サアどうぞ氣を取直し、一刻も

早く此場を立つて下さい、……アレあの通り間近く聞える人々の聲、見付けら

れては一大事、早く早く……」

と急き立て玉へば、

「ぢやと申して此れが、どうして見逃せませう。假令主従の縁は切られても、是

れが見棄てて行けませうか」

「主人が一生の頼みぢや、どうぞ此場を立去つて下さい。斯う云ふ間にも人の足

音サア早く早く」

と小聲に急き立てる。悦子姫は後髪引かる心地して、此場を見棄てかね、心二

つに身は一つ、胸を碎く時こそあれ、四五人の荒男進み來り、稍酒氣を帯びたる

銅羅聲にて、

「ナナ何だ、早く此場を立去れとは、それや誰に吐かすのだい、立去るも、立去らぬ、もあつたものかい、俺は今大江山の御大將の命令を受けて、此處へ漂着して来る筈の、二人の女「つちよ」を捉まへようと思つて、立現はれた所だ。立去れも糞も有つたものかい、………ヘン、人を馬鹿にするない、石熊の野郎め、貴様は何時も暗がりになると怪つ體の悪い、女の泣聲を出しよつて………チツト男らしうせないかい」

と云ひつつ拳骨を固めて、一人の男の横つ面をポカンと打つたり。  
石熊は、

「アイタタ、コラ鬼虎の奴、馬鹿にしやがるない」  
と又もや、石熊は、

「サア返禮だ」

と云ふより早く、鬼虎の横つ面を續け打に、腕の折れるほど擲り付ける。其機に鬼虎はヨロヨロとヨロめいて、二人の娘の上にドサンと倒れ、鬼虎は、

「ワアー、恐ろしい、……ヤイヤイ出やがった、毛の長い……色の青い、冷たい奴  
ぢや。コラ皆の奴、俺を伴れて逃げぬかい」

石熊は、暗がりより、

「アハ、ハ、ハ、態ア見やがれ、臆病者奴が……オイオイ皆の連中、彼奴ア、酒に  
喰ひ酔つて、あんな夢を見やがったのだ、ウツカリ傍へ行かうものなら、暗がり  
に握拳を振り廻されて、目玉が飛んで出るような目に遇はされるぞ。……行くな  
行くな、まあジツと酔ひの醒める迄、容子を見て居らうぢやないか……アア俺  
も大分に酔がまはった、どうやら足が隠居した様だワイ」

一人の男大聲で、

「一體汝等、何の爲に澤山の手當を貰つて偵察に歩いて居るのだい……其足は何  
だ、肝腎要の正念場になつて、足を取られると云ふ事があるものかい、チツと確  
りせないか」

石熊「有るとも有るとも、俺やアル中だ」

男「アルチウと云つても、歩いて居らぬぢやないか」

「アルコール中毒だ、邪魔臭いから、アル中と云つたのだい、……アア、もう一足もアル中事が出来ぬ様になつたワイ……。コラ熊鷹の野郎、貴様は何だ、他人にばつかり偉相に云ひよつて……貴様も足が變テコぢやないか」

熊鷹「チチツツと、なんだ、何して……居るものだから、いまこそは、千鳥にあらめノチハ、ナトリニアラムヲ、イノチハ、ナシセタマヘソ、イシトウヤ、アマハセヅカイ、アマノハシダテ、二人の女を見失ひ、鬼雲彦様に、コトノカタリゴトモコウバだ、アハ、。アヤマニ、ヒガカクラバ、又バタマノヨハイデナン、アサヒノ、エミサカヘキテ、タクツヌノ、シロキタダムキ、アウユキノ、ワカヤルムネヲ、ソダタキ、タタキマナガリ、マタマデタマデ、サシマキ、モモナガニ、イヲシナセ、トヨミキタテマツラセ……てな事を宅の山の神様奴が仰有りまして、ついトヨミキをアカニノホに飲し召したのだ。神酒は甕瓶高しり、甕のはら満て竝べて、海河山野種々の珍物を横山の如く、うまらに、つばらに飲食し、大海原に船充ち續けて、陸より行く路を、荷の緒結かため、駒の蹄の至り止まる限り、……熊鷹の爪は、随分長いぞ。愚圖々々吐かすと、石熊の菊石面を抓つ



てやらう、イヤサ掻きむしらうかい、ウーンウン アハ、、、  
石熊「何を吐すのだい、お役目大切に致さぬかい、コンナ處へ、暗まぎれに、二人の娘が遣つて来よつたら、貴様どうする積りだ。彼奴ア、中々女に似合はぬ腕利きと云ふ事だ、經ヶ岬の虎彦が急報に依つて、鬼雲彦より火急の御命令、しつかり致さぬと、反對にやられて了ふぞ。アーツ、エーツ、ガ、ガア、ガラガラガラガラ」

熊鷹は、

「アア臭いワイ、酒や飯の混合した瀧を、人の顔の上へ流しよつて、……胸の悪い……エエ、アどうやら俺もへへへ、へどが出さうな。オイコラ、おとら……ヲヲ桶を持って来い、……背を叩け、ガア、、、、ガラガラガラ」

鬼虎は震ひ聲で、

「オオオイ、貴様は何を愚圖々々して居るのだ、早く来ぬかい、俺をかたげて逃げてくれ、何だか怪體な、ババ化州が出やがったゾ」

石熊は、

「エー喧し吐すない、……俺の口から大洪水が出て、人家殆ど流失、死傷算なしと云ふ惨状だ、貴様を助ける所かい、非常組でも繰出して救援に向はぬかい、ガラガラガラガラ」

熊鷹「エー怪つ體の悪い、合點の往かぬ夜さだナア、此處まで来たと思へば、俄にピタリと足が止まり、まるで地から生えた木の様になつて了つた。……ヤイ何とかして俺の足を動く様にせぬかい」

暗がりより、

「動く様にせいと云つたつて、俄に、鋸の持合せがないから、根から伐つてやる譯にも行かず、マア冬が来て、木の葉が散り、枯木になる迄辛抱したが宜からう。さうすりや又、三五教ぢやないが、枯木に冷たい花が咲かうも知れぬぞ、ワ

ハ、ハ、ハ、」

熊鷹「エ、エ、どいつも此奴も、腰の弱い奴許りだナア」

鬼虎「ヤイ、皆の奴、どうやら此奴ア、目的の二人の奴らしいぞ、しつかりして生捕にせうぢやないか」

石熊「ナ、ナ、何ぢやア、貴様、最前から腰が抜けたと吐かしよつて、綺麗な女の二人の上に、ムツクリと寝て居よつたのか、抜目のない奴だのう」

鬼虎「まだ目は抜けぬが、サツパリ腰が抜けたのだ。……誰か腰の抜けぬ奴、出て来て此奴を縛らないか。どうやら癩を起こして居るらしい、今フン縛るのなら、

容易なものだ……コラ石熊、熊鷹、早く来て捕縛せよ」

熊鷹「何だか今日は日和が悪いので、キ、キ、氣に喰はぬので……ヲ、叔母の命日だから殺生は廢めとこかい、……コラ、ヤイヤイ石熊、今日は貴様の番だ、貴様に手柄を譲つてやらう」

石熊「俺も何だか今日は氣が進まぬワイ、女房の命日だから、殺生はやめとこかい」

熊鷹「アハ、ハ、ハ、貴様、女房も持った事のないのに、命日が何處にあるか、馬鹿にするない」

石熊「俺の女房は貴様知らぬのか、ザツと十八人だ、其中に一番大事のお春が今日死んだ日ぢや、彼女が俺の靈の女房だ。アア思へば可哀相な事をしたワイ、

オンオンだ」

鬼虎「何を吐かしやがる、ソラ隣の八兵衛の女房だらう、間違へると云つても、

嬪を取違へる奴がどこにあるかい」

石熊「俺は勝手に俺の心で女房にして居つたのだ。アンアン、思へば可憐ら

しい事をしたワイの、オンオンだい」

英子姫は、

「ヤア悦子姫殿、妾も其方の親切なる介抱で快くなりました。サアサア二人揃う

て行きませう」

「ハア夫れは夫れは嬉しい事で御座います、是れと申すも全く御父神素盞鳴の

…」

英子姫は小聲で、

「シツ」

と制しながら、口に手を當てたまへば、悦子姫は早速の頓智、

「是れと申すも全くお酒の爛が荒びましたので、皆様があの通り、妾達に餘興を

して見せて下さいませすのですなア。ここへお月様でも上つて下さいましたら、さぞ面白い事おもしろでせうに、………お聲許りこゑばかで見榮みばえが御座ございませぬ、耳みみで見みて、目めで聞きけとの神様かみさまの御教おをしへ、ホ、ホ、

熊鷹くまたか「ヤイヤイヤ、貴様きさまは素盞鳴尊すさのをのみことの娘むすめであらう、何を吐ぬかすのだい、耳みみで見みるの目めで聞きくのと、まるでババ化物ばけものの様な事ことを吐ぬかす奴やつだ。コリヤ女をんな、そこ動うごくなッ」  
悦子姫よしこひめは、

「オホ、ホ、皆みなさま、動うごくなと仰有おつしやつても、何なんだか體からだが獨ひとり自由自在じいうじざいに動うごいて仕しか方たがありませぬワ、皆みなさまは動うごきたいと思おもつても動うごけますまい、妾わらわが一寸靈縛ちよつとれいばくをかけて置おきましたからネー、マアマア御寛ごゆるりと管くだでも巻まいて夜徹よあかしをなさいませ、………左様さやうならば皆みなさま、お氣きの毒様どくさま乍なら、お先失禮さきしつれいを致いたします………あの、もし姫君様ひめぎみさま、サア斯こうお出いでなさいませ」

英子姫ひでこひめは、

「ホ、ホ、皆みなさま、御寛ごゆるりと、何なにも御座ございませぬが、ヘドなつと搔かき集あつめて、ネー  
おあがり遊あそばせ。あなたのお身みの内うちから出でた物もの、あなたの又またお身みの内うちへお入いれ遊あそ

ばすのだ。人を呪はば穴二つ、おのれに出でて己れに歸るとかや、あな有難や神様のお守り」

と行かむとするを、鬼虎は一生懸命に英子姫の裾を握った儘放さぬ。

英子姫「ヤア厭なこと、此男、妾の裾を握つてチツとも放して呉れないワ」

悦子姫「どうしませう……ア、さうさう、此男が姫君様のお裾を握つた儘靈縛

をかけられたものですから、其儘凝つて了つたのでせう。ホ、ホ、是れは偉い

不調法致しました。……コリヤコリヤ此鬼の様な片腕、靈縛を解いて遣る、サア

放せ」

「ウン」と一聲、鬼虎の握り拳はパラリと解けたりける。

英子姫「ア、有難う、是れで放れました」

石熊「ヤイヤイ鬼虎の奴、案に違はず、女の裾をひっぱつて居やがったな、ナマ

クラな奴だ。よしよし貴様の嬢に、明朝早々告發だ、さう覺悟致せ」

熊鷹「ナニ心配するな、俺が特別辨護人になつて喋々と辨論をまくし立ててやる

から、キット石熊の敗訴だ、無罪放免になつた上、損害賠償を此方から提起して

やらうか、アハ、ハ、ハ、

英子姫、悦子姫は暗に紛れてスタスタと、何處ともなく姿を没したりける。後には海面を吹く風の音、天鼓の如くドンドンと鳴り響きぬ。五人の男は暗がりより、破れ太鼓の様な聲を張上げて、

「オーイオーイ、二人の女、暫く待てい。オーイオーイ、かやせ、戻せい……」と熊谷もどきに叫び居たりけり。

(大正一一・四・五 舊三・九 松村眞澄録)

## 第二章 暗夜の邂逅 (五九二)

大江嵐の凧に 吹かれて進む英子姫

神に任せた身魂には 如何になるとも悦子姫

爪先上りの山道を  
轉つ「まる」びつ四邊に心を配りつつ

鬼や大蛇や曲津神  
二人の乙女に怖れてや

谷の彼方にコンコンと  
響く狐の叫び聲

人も出て來ん鬼も來ん  
【こん】輪奈落の底迄も

探し索めて父上に  
逢はずに此儘置くべきか

運ぶ足竝ゆらゆらと  
由良の港の手前迄

辿り來れる折柄に  
闇を通して鳴り響く

聲も涼しき宣傳歌  
道の傍の物影に

二人は立ち寄り身を忍び  
何人ならむと窺へば

夜目には確と分らねど  
顯恩郷にて別れたる

印象深き宣傳使  
萬代祝ふ龜彦が

神素蓋鳴の行衛をば  
尋ねて來たる益良夫の

凜々しき姿の面影に  
飛び立つ許り英子姫

折も悦子の姫二人  
闇の中より淑やかに



かくる言葉も震ひ聲。

英子姫「モシモシ旅の御方、突然乍ら物を御尋ねいたします。妾は女の二人連、様子あつて遠き國より、此自轉倒島の中心地にやうやう渡り着いたる、孱弱き女で御座います。貴方は三五教の宣傳使では御座いませぬか」

暗がりより突然聞ゆる女の聲に龜彦は、不審の眉を顰め乍らツト立ち止り、暫らく無言の儘、坂道に雙手を組んで首を左に傾けながら、絲の纏れをとく心地して、古き記憶をたぐつてゐる。たぐれどたぐれど容易にとけぬ胸の纏れ、百條千條八千條の辻に佇み行手に迷ふが如くなり。

暗がりより二人の女の聲として、

「モシ旅の御方、御返事なきは妾が知人に在さざりしか、但は女盜賊の出現と御思召しての御見違ひか、妾は決して怪しき女には候はず、少し以前、龍燈松の麓に於て怪しき人影に出會ひ、漸く此處に遁れ來りし者で御座います。御差支無くば御名を名告せ給へ」

龜彦かめひこ「何なんとなく聞き覚えおぼのある御聲おこゑなれど、少すこしく心こころの沈しづむ事こと有これあり之候さぶらへば、容易よういに記憶きおくの浮うかび出いで申まをさず、願ねがはくは御二人おふたりのネームを名告なをらせ給たまへ」

暗くらがりの中なかより頓狂とんきやうな聲こゑ、

金州きんしゅう「やア何なんぢや、道みちの眞中まんなかに立たちはだかりやがつて、ネームぢやの、【ねる】  
だのと怪體けつたいな代物しろものだ。オイ源州げんしゅう、一寸ちよつと起おきぬかい。怪體けつたいな奴やつが來居きをつたぢやない

か」

源州げんしゅう「ウウ、ムニヤムニヤムニヤムニヤ」

金州きんしゅう「オイ源州げんしゅう、大變たいへんだぞ」

源州げんしゅう「ウ、ウ、ウン何なんだ、喧やかましい哩わい。金州きんしゅうの奴やつ、葬禮さうれんの家いへへ出會でくはして澤山どつさりと御馳ごちそ走うを頂いたき掛かつた最中さいちゆうに揺り起ゆすこしやがつて、さア罰金ばつぎんだ、御馳走ごちそうの損害賠償そんがいばいしやうを請せい

求きつするぞ。ア、眠ねむい眠ねむい」

金州きんしゅう「あちらにも眠ねむい、こちらにも眠ねむい、やア一向譯いっかうわけが分わからぬ様やうになつて來きた哩わい。如何いかに夢ゆめの浮世うきよだと云いつても、大江山おほえやまに鬼雲彦おにくもひこと云いふ變へんな奴やつが現あらはれた世よの中なかだから、夜中やちゆうは化物ばけものが現あらはれて、天てんを枕まくらに縦たてに寝ねる奴やつが出でて來きたのかな。オイ源州げんしゅう、

起ぬかい、幸ひ夜半の事であり、對方は只一人、片一方は壁の様な絶壁だ。片一方は断崖、おまけに荒波猛る海と來てるのだから、斯う云う時に一つ追剥の練習でもやらねば、やる時が無いぞ。サア起きた起きた。コラコラ、ネーム、貴様の持物を綺麗薩張と此場で脱いて金さまに呉れないか」

龜彦「生憎長の道中で懐中缺乏、金サンに縁が薄い哩。アハ、、、、、」

二人の女「オホ、、、、オホ、、、、」

源州は、又ツと起き上り乍ら、

「そら薩張源助だ、何だ、男の聲かと思へば忽ち變じて女の聲、曲神の奴、味好うやり居る哩」

龜彦「源、金は持つて居らぬ。其代りに拳骨を呉れてやらうかい」

(拳骨といへば此地方では、固い握り飯の代名詞である)

源州「ヤアそりや氣がきいて居る。有難い、いくらでも遠慮は致さぬ。一體いくら持つて居るか、ヤイ金州、貴様も金の代りに拳骨でも澤山と頂戴したらどうだ」

金州「よう、そりや有難いな、モシモシ旅の御方、本當に下さいますか。貰ふの

は私<sup>わたくし</sup>は結構<sup>けつこう</sup>だが、貴方<sup>あなた</sup>のお腹<sup>なか</sup>が空<sup>す</sup>きませう。二<sup>ふた</sup>つ三<sup>みつ</sup>つ残<sup>のこ</sup>して、残<sup>あと</sup>は下<sup>くだ</sup>さいませ<sup>」</sup>」  
龜彦<sup>かめひこ</sup>「やア俺<sup>おれ</sup>の拳骨<sup>げんこ</sup>は無<sup>む</sup>盡<sup>じん</sup>藏<sup>ざう</sup>だ。望<sup>のぞ</sup>みとあらば百<sup>ひやく</sup>でも千<sup>せん</sup>でも一<sup>いち</sup>萬<sup>まん</sup>でも呉<sup>く</sup>れてやらう。さア顔<sup>かほ</sup>を出<sup>だ</sup>せ、頬<sup>ほほ</sup>ぺたを向<sup>む</sup>け、近<sup>ちか</sup>く寄<sup>よ</sup>れ、何<sup>なん</sup>だか薄<sup>うす</sup>暗<sup>くら</sup>くて見<sup>けん</sup>當<sup>たう</sup>がとれない様<sup>やう</sup>だ<sup>」</sup>」

（この地方<sup>ちほう</sup>にては間食<sup>かんじよく</sup>を、「けんとう」といふ）

源州<sup>げんしゅう</sup>「見<sup>けん</sup>當<sup>たう</sup>が之<sup>これ</sup>でやつと取<sup>と</sup>れました。成<sup>な</sup>るべくは手<sup>て</sup>に下<sup>くだ</sup>さいな。頬<sup>ほほ</sup>ぺたに貰<sup>もら</sup>ふのは、口<sup>くち</sup>に近<sup>ちか</sup>うて好<sup>よ</sup>い様<sup>やう</sup>なもの、若<sup>も</sup>しも轉<sup>ころ</sup>げて落<sup>お</sup>ちたら勿<sup>もつ</sup>體<sup>たい</sup>ないからな<sup>」</sup>」

龜彦<sup>かめひこ</sup>は、聲<sup>こゑ</sup>する方<sup>ほう</sup>に向<sup>むか</sup>つて拳骨<sup>げんこつ</sup>を固<sup>かた</sup>め、

龜彦<sup>かめひこ</sup>「サア盜賊<sup>どろばつ</sup>奴<sup>め</sup>、これ<sup>を</sup>喰<sup>くら</sup>へ<sup>」</sup>」

と滅<sup>めつ</sup>多<sup>た</sup>矢鱈<sup>やたら</sup>に亂打<sup>らんた</sup>すれば、

源州<sup>げんしゅう</sup>「アイタ、タ、タ、之<sup>これ</sup>は又<sup>また</sup>大變<sup>たいへん</sup>な固<sup>かた</sup>い拳骨<sup>げんこ</sup>で御座<sup>ござ</sup>いますナ。暗<sup>くら</sup>がり<sup>で</sup>何處<sup>どこ</sup>へ落<sup>お</sup>ちよつたか薩張<sup>さつぱり</sup>分<sup>わか</sup>らぬ様<sup>やう</sup>になつて了<sup>しま</sup>つた。同<sup>おな</sup>じ貰<sup>もら</sup>ふのならソツと手<sup>て</sup>に乗<sup>の</sup>せて下<sup>くだ</sup>さ

ると宜<sup>よ</sup>いになア<sup>」</sup>」

龜彦<sup>かめひこ</sup>「不屆<sup>ふとどき</sup>な泥坊<sup>どろぼう</sup>奴<sup>め</sup>、グツグツ吐<sup>ぬか</sup>すと踏<sup>ふ</sup>み蹂<sup>にじ</sup>り握<sup>にぎ</sup>り潰<sup>つぶ</sup>してやらうか<sup>」</sup>」

源州げんしゅう「ア、勿體もつたいない、目めが潰つぶれますぜ。結構けつこうな握にぎり飯めしを踏ふみ蹂じつたり、握にぎり潰つぶしたりすると、百姓ひやくしやうが汗あせ水みづ垂たらして、やつと作つくつた其その米こめを、そう粗そ末まつにするものぢやありませんで」

英子ひでこ姫ひめ「ホ、、、、、」

悦子よしこ姫ひめ「ホ、、、、、」

金州きんしゅう「イヤ何なにだ、此こいつ奴ばけもの化物なだ。聲こゑを三みつつにも使つか分ひけしやがつて、男をとこになつたり

女をんなになつたり、莫ば迦かにするない。大おほ方かた團だん子ご石いしを、握にぎり飯めしだナンテ吐ぬかして、俺おれに打ぶつ

付つけよつたのだな、道だうり理りで痛いたいと思おもつた」

龜彦かめひこ「アハ、、、、」

二女にぢよ「ホ、、、、」

金州きんしゅう「ヤア此こいつ奴ばけものは愈よ【バ】の字じに【ケ】の字じだ。オイ源州げんしゅう、命いのちあつての物種ものだねだ、

逃にげる逃にげる」

と暗くらがりの中なかを横よこになつて、團だんご子こを轉ころがした様やうに轉ころげ逃にげ行ゆく。

龜彦かめひこ「アハ、、、、、妙めうな乞こ食じきが居をつたものだ、イヤ併しかし乍ながら是これから先さきは危き險けん區く域みき

だ、氣を付けねばなるまい。モシモシお女中さま、貴女は何れの方で御座るかナ

英子姫「是非に及ばぬ、申上げませう。妾は素盞鳴尊の娘英子姫で御座います。」

一人は召使の悦子姫で御座います

龜彦「如何にも紛ふ方なき其御聲、これはこれは暗夜の事とて失禮を致しました。」

私は御存じの龜彦で御座います

英子姫「ソナナラ貴方は、妹菊子姫の夫、思はぬ處でお目に掛り大いに力を得ま

した。して又こちらへ御出でになつたのは、如何いふお考へで」

龜彦「申上げ難い事乍ら、御父上様は高天原の事變より、千座の置戸を負はせ給

ひ、世界漂泊の旅にお出ましになりました。私は齋苑の山の頂に於て、御父上の

御消息を知り、自轉倒島にお下り遊ばしたと聞いた故、はるばると荒海を渡り、

漸く由良の港に着いて御所在を尋ねむものと此處迄参りました途中で御座います。

噂に聞けば、父大神様は大江山の魔神の捕手に御捕はれの御身の上、併し乍ら龜

彦が参りました以上は必ず御心配なさいますな。屹度救ひ出して御覽に入れます

此時傍の木の茂みの中より、二三十人の男が三人の前に立ち現はれ、

「ヤア其方は素盞鳴尊の一味の奴ばら、最前からの汝等三人が囁き話、木蔭に忍び残らず聞いた。さア此上は搦め取つて大江山の砦に連れ歸らむ、覺悟を致せ」と闇に閃く氷の刃、四方八方より突き掛る。三人は兩刃の短刀をヒラリと抜き放ち、

「何猪口才な、木ツ端武者」

と獅子奮迅の勢にて防ぎ戦ふ。數十人の捕手はドツと寄せては、又もやドツと逃げ、寄せては返す磯の波、四邊に響く劍戟の音。

龜彦「斯かる惡逆無道の魔神に對しては、善言美詞の言靈を以て打ち向ふは勿體なし、懲しめの爲、斬つて斬つて斬り捨てむ」

と阿修羅王の如く暴れ狂ふ。敵は二つに別れて、雲を霞と逃げて行く。

龜彦は坂を下つて西へ西へと走り行く。一方英子姫、悦子姫は攻め來る敵に向つて華々しく戦へば流石の魔神も敵しかね、東を指して驅け出したり。二人は一生懸命後を追ひ行きぬ。ア、此結果はどうなるであらう。

(大正一一・四・五 舊三・九 藤津久子録)

第三章 門番の夢（五九三）

夜は深々と更け渡る 水さへ音なき丑の刻

波を照して一塊の 巨大な光嚙々と

呻りを立てて龍燈の 松を目蒐けて走り來る。

火光は一旦松の周圍を廻轉し、梢に光皎々と留まり輝きぬ。樹下に倒れた五人の男は、吃驚仰天目を覺まし、アフンと許り空を眺め鰐口開けて、天から降つた牡丹餅を頂く様な爲體なり。棚からさへも牡丹餅は容易に落ちて來ないのに、木から落ちたる猿の如く、老木の下に腰を抜かし、夜の明け行くを松の下、可笑しかりける次第なり。

東の方より數十人の消魂ましき足音するに眼を轉じて眺むれば、東雲近き薄明り、鬼雲彦の手下の者共、一人の男に追はれつつ、生命から逃が來る。腰を



抜かした五人連に、先に立ちたる四五人は、足引つかけて顛倒し、次から次へ出て来る奴は折り重なつて、相互怨みの無い様に、交際の良い社會主義、民衆運動の花咲きて、轉んで土食ふ奴ばかりなり。

龜彦「ヤア其の方等は大江山に本據を構ふる鬼雲彦の乾兒の奴輩、片つ端から撫で切りに致し呉れむ、覺悟をせよ」

と兩刃の劍を逆手に持ち眞向上段に振り翳したり。

石熊「ヤイ、其方は肝腎の二人の娘を如何致した、コンナ處へ踏ん迷うて来る處

ぢやあるまいぞ、二人の女を早く助けてやらぬか、そしたら吾々もお蔭で助かる

哩、アハ、ハ、ハ、

龜彦「オー、さうじや、餘り勢に乗じて英子姫様を念頭より遺失して仕舞つた、

此奴堪らぬ。愚圖々々して居れば磨滅の厄に遭ひ給ふやも圖り難い、オイ敵の奴

輩、木端武者能く注意して呉れた、汝の手柄に免じて今日は之にて許してやらう」

と云ふより早く踵を返し、矢を射る如くもと來し道に引き返す。

石熊「オイ、鬼虎、熊鷹の阿兄、何うだ、此方の文珠の智慧、貴様の様な天の橋

立たない智慧の持主では仕方がない、斯んな時に、ちつとも間に合はぬ。當意即妙、智謀絶倫、文珠菩薩も石熊親分の無量智には尻はし居つてスタコラ、ヨイヤサと御遁走、持つべきものは知識なりけりだ、アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ、エヘ、ハ、ハ、ハ、不思議なる哉、此樹下に來たものは一人も残らず一蓮托生、腰が薩張り抜けて仕舞つた。一同の魔神は叶はぬときの神頼み、悪にも三分の理屈がある、神の救ひを求めむと十能の様な大きい手を合し、

阿耨多羅三藐三菩提、南無與佛有縁與佛、有縁佛法僧、縁常樂我長、朝念觀世音、暮念觀世音、念々從信起、念々不離心」

と手と口とは自由權を許されて、甲乙の區別もなく平等に言靈を連續發射して居る。

話變つて英子姫は器量も愛想も悦子姫、由良の港の國司秋山彦の門前に佇み乍ら夜の明け行くを待ち居たりしが、忽ちガラリと開いた表門、門番は二人の姿を見るより顔色を變へて一散走り、彼方を指して隠れ行く。忽ち四五の荒男、十手打ち振り打ち振りつ、二人の前に塞がりて有無を言はせず手とり足とり、口には

嵌はます猿轡ざるくつわ、何なにと應答いらいへもなくばかり、身みを藻掻もがけども容赦ようしやなく、竈かまどの下したの灰猫はひねこが、  
小鼠こねずみを喰くはへて行くゆく様やうに、二人ふたりを奥おくへ擔かつぎ入いる。

又またもや續つづいて一人ひとりの男をとこ、此門前このもんぜんに現あらはれて、割わるる許ばかりに戸とを敲たたき、  
「開ひらけ開ひらけ」と呶鳴どなり居をる。門番もんばんは不性ふしよう不性ふしように、

「ア、ア今日けふは怪けつ體たいな日ひぢや、朝あさつぱらから門もんを開あけるなり、辨才べんざいてんの樣やうな別べつ嬪びんが來きよつて、ヤレしてやつたりと喜よろこぶ間まもなく館やかたの御大將おんたいしやう、有無うむを言いはせず奥おくへ連つれて行いつて仕舞しまつた。ア、之これを思おもへば大將たいしやうになりたたいいものだな。何處どこの唐變たうへん木ぼくか知しらぬが怪けつ體たいな聲こゑを出だしよつて、腹はらが立たつ程ほど門もんを敲たたきよる、エー仕方しかたがな  
い、之これも門番もんばんの職務しよくむだ。朝あさつぱらから酒さけに喰くらひ酔ようて呶鳴どなつて居ゐるが、まだちつと位くらゐ瓢箪ひょうたんに残のこして居ゐるかも知しれぬ、それでも奪ひつたくつて埋うづめ合せあはせをやらうかい。  
オイ加米公かめこう、何なにを愚圖ぐづ々々ぐづして居をるのだ、貴樣きさまも可いい加減かげんに起おきぬかい、それだ  
から夜遊よあそびをするいふのだ。夜遊よあそびするのなら人ひとに起おこされぬやうに、起おきる  
時分じぶんには起おきて勤ととめるのだぞ」

門を敲く聲、益々猛烈になつて來た。

銀公「オイ、加米公、早う起きて貴様開けてやれ」

龜彦、門前にて、

「ヤア、何だ、此奴は怪しいぞ、コンナ遠國に吾々の名を知つてる奴は無い筈だが、何は免もあれ、一つ掛合うて見よう………龜公は門外に待つて居

るのだ、勝手に開けと言つた所で、其方から開けて呉れなくちや這入れないワイ」

銀公「これや加米の奴、上役に向つて何と言ふ無禮な事を申す、俺は命令權を有つて居るのだ、貴様は開ける役だ、開けて呉れとは何だ、何の爲めに結構な扶持

を頂いて居るのだい」

加米公「アーン、アーン、さう叱つて呉れないやい。俺は何もまだ一言も

言つては居ないワ」

銀公「それでも今、加米だと言つたぢやないか、俺の耳はまだ隠居はして居らぬ

ぞ」

加米公は、門の門の前に進み寄り、

「ア、ア、銀公の大將、無茶ばかり云ひよる、もの言へば唇寒し秋の風、ものも言はぬのに言うたと云うて因縁をつけられ、本當に馬鹿らしい哩、俺の心の中を開いて見せてやり度い「もん」だな」

外より龜彦、

「すつた、「もん」だ吐さず、龜公さまの御出でだ、早く開けぬか」

銀公「貴様はまだ此銀公に命令をするのか、「開けて見たい「もん」だな」ナ  
ンテ當然だ、早く門を開けてやらぬかい」

と拳骨を固めて頭を三つ四つポカポカと喰はしたり。

「アイタ、アイタ アイタ アイタ、「あかんもん」だ。コンナ奴に三つ四つ殴られて、でけ「もん」が出来るとは餘つ程、引き合はぬ「もん」だな」

銀公「あいたあいたと吐すがまだ門は開いて居らぬぢやないか、弱い「もん」だとは、それや何を吐す、御主人様が心魂を鍊つて選りに選つて立派な材木で拵へになつた、コンナ綺麗な表門が何で弱いのだい」

と酒の酔ひに舌も廻らずぐぜつて居る。加米公は泣き泣き門を外し、

「さア、何處のお方が存じませぬが、愚圖々々致さずとトツトと這入りやがれ」

龜彦「アハ、々々、之は之は門番どの、朝早くからお邪魔を致しました、貴方は

初めは非常に御丁寧で後ほどお言葉が荒くなりますなア」

「きまつた事だい、先の半分は加米の本守護神だ、後から言うた奴は副守護神が

言つたのだ、門「もん」の「かん」懸りだよ」

龜彦「アハ、々々、お前も矢張カメサンと言ふのだな、同じ名が門の内と外とに

あつて大變に面倒臭いワ」

「お前は龜さまだから千年も萬年も門の外で長立ちをさして上げやうと思つたが、

此頃は世界中不景氣風が吹き廻つて、物價下落で俺も投賣をする考へで安く開い

てやつたのだ、世の中は能くも行き詰つた「もん」ぢやなア」

龜彦「アハ、々々、貴様は餘つ程、能く洒落る「もん」だなア。問答も、もう之

位で廢めて置かう、此處へ二人の女は出て來なかつたか」

「ヤアお前はあの女の「これ」だなア」

と親指をニユツと出して見せる。

「それや何だ、指ぢやないか」

加米「何だか【ゆび】ありげな汝の顔付、【ゆび】にも忘れぬ【れこ】の後を何

しようと思つて來たのだらう。二人の女は、とつくの昔に何々が何々して今頃は

何々の何々ぢや、俺達も何々し度いと思つて居つたのに何々が來よつて何々して

何々しよつたもんだから薩張駄目だよ」

「貴様の言ふ事は何が何ぢややら薩張り譯が分らぬぢやないか、も少し、はつき

りと打明けて言はないか」

銀公「やい、カメカメの兩人、何々が聞きたければ何々を出せ、さうしたら俺が

何々に何々して何々の何々を何々してやらう。ナント言つても銀行いや銀公が肝

心だ」

龜彦「益々分らぬ奴だナ、エー無理もない、門番位に尋ね様とするのが此方の不

覺だ」

と奥へ進まむとする。

銀公「何、【深く】、さう深く進んでは無禮だぞ。暫時待つて、俺が何々に會う

て何々の様子を何々して来てやらう、地獄の沙汰も何々次第だからノウ  
と手を重ねて前に突き出す。

龜彦「ハ、ハ、ハ、ハ、何處迄も物質主義だな、黄金萬能主義の惡風は神聖なる自轉  
倒島まで吹き荒むで居るか、吁、世も終りじや、尾張大根だ。形ばつかり立派で  
も味も〔しゃ〕しゃりもない、水臭い世の中になつたものだ哩」

龜彦は委細構はず奥へ進み行かむとする。二人は龜彦の兩足にグツと喰ひ付き、  
「何々する迄通す事罷りならぬ」  
と噛み付く。龜彦は二人の男に足を捉へられ乍ら、ノソリノソリと二人を小付け  
にして奥を目蒐けて進み行く。

(大正一一・四・五 舊三・九 北村隆光録)

#### 第四章 夢か現か〔五九四〕



龜彦は二人の門番を、靴に穿いたやうな心持で、本宅の入口迄やつて来た。門口の騒がしさに中より戸を引き開けて現はれし二人の女、

「ヤア貴方は龜彦さま」

龜彦「ヨウ、お二人様、不思議な處でお目に掛りました」

英子姫「龜彦さま、貴方何を足に引っかけてゐらつしやるの」

龜彦「ヤア、何でも御座らぬ、糞から生いた銀蠅が一匹と糞龜が一匹、足に喰ひ

つきました、鱈の生でもあつたら一つやつて下さいナ、アハ、ハ、ハ、ハ」

二女「ホ、ハ、ハ、ハ」

銀、加米「チエツ、人を馬鹿にして居やがる、此銀公司を捉へて銀蠅だの、加米を糞龜だのと蟲の好い事を云やがるワイ。これや龜の奴、今に、一寸の蟲でも五分の魂だ、【むしかへ】しをやつてやるから、其覺悟で居たらよからうぞ」

龜彦は、右の足を中天に向つてピンと跳る途端に、銀公は七八間プリンプリンと中天に舞ひ上り、表門の自分の室の前に行儀よく落ちたまま、チヨコナと坐つて居る。龜彦は又も左の足をピンと跳ると、加米公は中空を毬の如く舞

ひながら再び自分の門番小屋にチヨコナンと坐つて居る。

銀公「ア、、、淋しい事だ、偉い奴が来よつて、俺を中天に蹴り上げよつたと  
思つたら、何んだ夢を見て居たのか、それにしても怪體な夢を見たもんだワイ」  
加米公「ヤヤ銀公、貴様も夢を見たのか、俺も其通りだ。龜と云ふ奴が来よつて、  
俺を足の先で中天に蹴りよつたと思つたら、俺も矢張り夢だつた。ア、コンナ夢  
を見るやうでは、碌な事はない哩、獾に喰はせ獾に喰はせ、茫茫漠々として夢の  
如しだアハ、、」

此時門前に聲あつて、

「モシモシ門番様、妾は漂泊の旅の女、何卒お慈悲に此門開いて下さいませ。惡  
神に取巻かれ、命からがら此處迄逃げて参りました」

「ヤア聞き慣れぬ女の聲」

と云ひながら門をサラリと開けば、二人は丁寧に目禮しながら、奥を目蒐けて足  
早に進み往く。

銀公「オイ加米公、夢に見た通りの二人の美人がやつて来よつた。夢と云ふもの

は馬鹿にならぬなア」

加米公「ヨ一其夢なら俺も見たのだ。夢に見た美人と些とも違はぬ瓜二つだ、併しなから、斯う夢が當るとすれば、今度目に出て来る龜彦と云ふ強い奴は、それこそ大變だぞ、柔なく下に出て無事に門を通すに限るぞ」

銀公「オ、さうだ、相手にならぬやうに柔しく開けてやらうかい」

斯かる所へ門前に聞ゆる男の聲、門をポンポンと叩いて、

「モシモシ、私は旅の男龜彦と申します、お邪魔で有りませうが、此門を何うか

開けて下さいますまいか」

加米公「それぞれ夢が本當になつて來たぞ、加米さんがよい相方だ」

と又もや門をサラリと開き、

加米公「これはこれはようこそお出で下さいました。サアずつと奥へお通り下さい、どうぞ中天へ放り上げる事だけは、オット、ドッコイこれは夢で御座いました、早く柔しく暴れずにお入りなさいませ」

龜彦「私は決して亂暴な事は致しませぬ、御安心下さいませ」

と奥を目蒐けて悠々と進み入る。

由良の港の人の子の司

秋山彦の門前を

サツと開かせ入り来る

暗夜もはれて英子姫

四方の景色も悦子姫

小春の朝日を身にうけて

冬の初と云ひながら

まだ温かき破風口に

猫の眠て居る長閑さよ

夜晝不寝身の門番も

主には盡す忠勤振

中門サラリと引き開けて

何の躊躇も荒男

門番役に送られて

玄關口にさしかり

頼も頼もと訪へば

あいと應へて二人の女

襖押しあけ出で来る

アツと見合す顔と顔

オ、龜彦か姫様か

思はぬ所で遇ひました

魔神の様子は如何にぞと

問はむとせしが待て暫し

心許せぬ此館

如何なる魔神の潛むやら  
隙行く駒のいつしかに

漏れてはならぬ壁に耳  
父の便りを菊月の

九月八日の今朝の秋  
目と目に物を云はせつつ

二人の女は静々と  
奥の間さして入りにける

後にしよんぼり龜彦は  
両手を組みて思案顔

あゝ訝かしや訝かしや  
様子ありげの此館

英子の姫の御眼つき  
只事ならぬ氣配なり

戸を押し明けて踏み込もか  
待て待て暫し待て暫し

大事の前の一小事  
もしも仕損じた其時は

長の苦勞も水の泡  
遇はぬは遇ふに彌まさる

例も數多ある月日  
暫しは此處に佇みて

家の内外の様子をば  
事細やかに探らむと

直日に見直し聞直し  
思ひ直すぞ雄々しけれ。

玄關に佇みし龜彦は、さし上る朝日に向つて合掌し、何事か沁々と暗祈黙禱を續けて居る。此時玄關の襖を颯と開いて現はれ出でたる二人の娘は、龜彦に向つて丁寧ていねいに會釋あしやくし、

「これはこれは遠方のお客様、奥へ案内致しませう、サアこうお出でなさいませ」と廊下を指して、ニコニコしながら先に立つて進み入る。

龜彦は、

「ヤア有難い有難い、一つ違へば門前拂ひの憂目に遇ふ所だつた。ア、世間に鬼はない、此處には廣いお庭がある。鬼は外々福は内、家の様子は何處となく物床しげに、一弦の琴の音さへも聞えて居る。あの聲は確に英子姫の御手すさび、此家は自と平和な風も福の神、上下揃うて睦まじく月日を送る其様子、もしや此家に、吾が慕ふ神素盞鳴の大神の隠れ在すには非ざるか、神ならぬ身の心にも、物穩かな内外の空氣」

と獨り言ちつつ娘の後に従ひて、長き廊下を傳ひ行く。

此家の主人と見えて、人品骨柄卑しからぬ、五十前後の男、服装正しく衣紋繕

ひいで迎へ、

「これはこれは噂に聞き及ぶ三五教の宣傳使龜彦様、よくも入らせられました。

私は此郷の人の司、秋山彦と申すもの、サアサア遠慮なくズツと大奥へお通り

下さいませ、御案内致しませう」

と先に立つて進み行く。龜彦は不審の首を傾けながら、前後左右に目を配り、心

を注ぎ、

「ヤア、嫌らしき程の鄭重なもてなしだ。愚圖々々して居ると抱き落しにかけら

れて、醜の窟のやうに陥穽にでも落されるのではあるまいか。否々人を疑ふは罪

の最も大なるもの、心に曇りあれば人を疑ふとやら、ア、恥かしい、未だ副守護

神の奴、身體の一部に割據して猜疑心の矢を放ち猛威を逞しうせむと計畫して居

るらしい、恐るべきは心の内の敵だ」

と思はず大聲を出した。

秋山彦は此聲を聞いて後振り返り、

「これはこれは龜彦様、貴方は今敵だと仰せられましたが、決して敵では御座い

ませぬ、御心配なくお通り下さい」

「イヤ誠に済みませぬ、吾々の心中に潜む副守の奴が囁いたのです、心の鬼が身を責るとやら、いやもう神ならぬ身の吾々人間は、宣傳使と云ふ立派なレツテルは貼つて居りますが、實にお恥かしい代物です」

「サアこれが大奥の間で御座います、貴方にお會はせ申度き御方も御座いますれば、何卒お入り下さいませ」

と腰を屈め、淑やかに襖を押しあげ案内する。龜彦は不審の雲に包まれながら進み入り、上座を見れば、こは如何に、正面の高座には、神素盞鳴の大神、嚴然として控へさせたまひ、少しく下がつて國武彦、右側には英子姫、ズツと下がつて悦子姫、此家の妻と見えて四十歳許りの麗しき女、行儀よく控へ居る。龜彦は一目見るより打ち驚き、

「ヤア貴神は尊様」

と一言云つたきり後は涙にかき曇り、袖に顔をば覆ひつつ暫しが間は平伏沈黙を



持續し居たりける。四十許りの女は龜彦の頭を上ぐるを待ちかねたやうな調子で、  
「これはこれは龜彦様とやら、よく来て下さいました。妾は秋山彦の妻紅葉姫と  
申す者、御存じの通り不便の土地、お構ひも出来ませぬが、どうぞ、ゆるりと御  
逗留下さいませ」

龜彦「これはこれは痛み入つたる御挨拶、何分宜敷くお願い致します。ヤア貴神  
は尊様で御座いましたか、好うまア無事で居て下さいました。嬉しう存じます」  
素尊「其方は龜彦なりしか、無事で先づ目出度い。英子姫が途中に於て【いかい】  
お世話になつたさうだナア」

龜彦「どう致しまして」

英子姫「龜彦さま貴方も無事でお目出度う、妾は今の今迄お案じ申て居りました、  
安心安心」

と喜ぶ折しも、門外俄に騒がしく數多の人聲、秋山彦は慌しく入り來り、  
「ア、皆様、お静かにして下さいませ、表は私が引受けます、一寸した事が起つ  
て來ました」

素尊すそん「アハ、ハ、ハ、其方そのほう好きよに取計とりはからへ」

龜彦かめひこ「秋山彦殿あきやまひこどの、事が起おこつたとは鬼雲彦おにくもひこの襲來しふらいしたのでせう、何卒どうぞ私も連つれて行い

つて下ください、ヤア面白い面白おもしろい、日頃鍛ひごろきたへし言靈ことたまの力ちからを試ためすは今いま此時このとき」

と先さきに立たつて行ゆかむとす。國武彦くにたけひこは初はじめて口くちを開ひらき、

「ヤア龜彦かめひこ暫しばく待またれよ、尊みことの御許おゆるしあるまでは、一寸いっすんも此場このばを動うごく事こと罷まりなり

ませぬぞ」

龜彦かめひこ右みぎの手てにて頭あたまを搔かきながら、

「へエへエへ、ハ、ハ、ハ、ヘイ、シシ仕方しかたがありませぬ、ハイ、鳴なるは鳴なるは此腕このうでが、

ウンウンと云いつて仕方しかたが無いなワイ」

一同いちどう「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

(大正一・四・五 舊三・九 加藤明子録)

第五章 秋山館あきやまやかた〔五九五〕

高天原を追はれて

千座の置戸を負はせつつ

八洲の國を漂浪の

旅に出立ち給ひたる

神素盞鳴の大神の

行衛如何と案じつつ

東の空を打眺め

心にかかる村肝の

雲の渦卷サラサラと

晴れて嬉しき今日の朝

君の便りを菊月の

上九日の菊の宴

親子主従めぐり會ひ

胸の岩戸も秋山彦の

神の司の眞心に

綾と錦の機を織る

赤き心は紅葉姫

萬代祝ふ龜彦が

暗を照らして英子姫

心地もわけて悦子姫

廻り會うたる折柄に

表に聞ゆる鬨の聲

忽ち開く表門

秋山彦は立出でて

寄せ來る魔軍に打向ひ

天の數歌勇ましく

力限りに宣りつれば

敵の人數も大江山

鬼雲彦が部下共

大地にドツと打倒れ

苦み悶ゆる状態は

實に面白き限りなり

顔色赤く目は青く

棕櫚の赤髪を振紊し

六尺計りも踏張つて

ノソリノソリと遣つて來る

鬼雲彦が懐の

刀と頼む鬼彦は

虎皮の褌締め乍ら

牛の様なる角目立て

大口開けて高笑ひ。

鬼彦「アハ、ハ、ハ、猪口才千萬な、秋山彦が言靈の防戦、左様な事であつた様

な鬼彦と申して居るか。此方には雲霞の如きジャンジャヒエールが、數限りもな

く控へて居るぞ。假令汝獅子王の勢あるとも、此鬼彦が片腕を揮ふや否や、汝の

身體は木つ端微塵、今日は九月九日、大江山の本城に於ては、鬼雲彦の御大將、

バラモンの大祭典を御執行の贄として、神前に暖かき人肉を供へ、血の酒を獻ら

ねばならぬ。それに就ては、バラモン教を目的の敵と狙ふ三五教の張本人、素盞鳴

尊一族の者、汝が館に隠れ忍ぶと聞く、四の五の吐さず、速に主人を吾面前に引ずり出せ。ゴテゴテ吐さば、それがし自ら踏み込みて、片つ端から腕を捻ぢ、脚を折り、量を低く致して此網代籠に詰め込み、汝諸共神の神饌に供してくれむ」と言ふより早く、秋山彦の襟首をグツと握り、締め附けたり。秋山彦は豪力無雙の鬼彦に捻ぢ伏せられ乍ら、委細構はず言霊を奏上せむとするや、手頃の石を拾つて秋山彦の口に捻ぢ込み、其上に猿轡を啣ませ、鬼彦「アツハ、ハ、ハ、最早大丈夫だ、サア秋山彦、汝が唯一の武器と頼む言霊も、モウ斯うなつては叶ふまい。オイ言霊はどうだい……ヤアヤア皆の者共、最早心配は要らぬ。速に立上れ」

と云ふ間もなく、言霊に打たれて苦悶し居たる部下の魔神共は、やうやう立上がり、眞つ青な顔に、空元氣を付け、ガタガタ震ひの空威張り聲、

「ウワア ウワア」

と鬨を作つて、盛に示威運動を開始するこそ可笑かりける。

奥には絲竹管絃の響、長閑な歌の聲、此場の光景を知らず顔に響き渡りける。

魔軍は力限りに鬨の聲を揚げ唼鳴り立て居たり。此方の奥殿には、此聲を峰の嵐の音と聞き流し酒宴の眞最中、慌ただしく駆けつけ来る門番の銀公、加米公はピタリと両手をつき、頭を疊に摺り附け乍ら、

「申上げます、表門は夕夕大變で御座います」

紅葉姫「ヤア汝は加米、銀の兩人、大變とは何事なるぞ。委曲に物語れ」

加米公「ハイハイ申上げます、あのモシ……あの……何で御座います。夫れは夫

れは申上げ難い事……マアマア大變な事が出来ました……斯う言へば、申上げ

ずとも大抵、御判断が附きませう」

紅葉姫「早くしつかり申しなさい」

加米公「オイ銀公、お前は上役だ。詳しい事は、お前が知つとる筈だ。御主人の

御容子を……」

銀公「ヤア此方は折悪く雪隠に往つて居つたのだから、實状は承知して居らぬ。

加米、貴様は實地目撃して居つたのだ。直に申上げぬか」

加米公「上役の分際として、御主人様が危急存亡の場合、雪隠へ隠れよつて、慄

うて居つたぢやないか。俺は何分大勢の寄せ手に、肝を潰し、目は眩み、實地目撃不充分、貴様は安全地帯に身を隠し、雪隠の窓から覗いて居よつたのだ。早く申さぬと、御主人様の口に石を捻ぢ込み、猿轡を箝め、高手小手に縛しめて、網代籠に、手足をもぎとり量を低うして、今日の祭典に大江山の本城に連れ歸り、犠牲にするかも知れぬぞや、早く實地を申さぬかい」

銀公「ハア申上げます。加米公の申した通り、寸分違は御座いませぬ。早く何々をなさらぬと、鬼彦が御主人様を何々して、何々へ何々するかも知れませぬ。どうぞ一時も早く表門に立向ひ、御主人様をお助け下さいませ」

素尊「ハ、ハ、ハ、」

國武彦「ヤア面白い事が出来ました。鬼彦とやらの軍勢を、當館を開放し奥深く侵入させて、彼等が手振り足振りを眺め乍ら、悠くりと菊見の宴を張りませう」

龜彦「これはこれは國武彦の御言葉とも覺えぬ。今承はれば、秋山彦は敵の爲に囚はれの身となり、危機一髪の場合、チツトは紅葉姫の御心中も察し上げねばなりませんまい。それだから此龜彦が、寄せ來る敵に向つて進まむと致せし時、横合

から吾が行動を止めさせられたは、其意を得ぬ。冷淡至極の貴下が振舞、秋山彦を見殺しになさる所存か返答聞かう

と目を怒らし、腕を張つて詰め寄せたれば、國武彦は二ツコリしながら、

秋山彦の一人や二人犠牲にした處で、何騒ぐ事があるか。一人を殺して吾々數

人が助かると云ふものだ。一人を損するか、吾等一同を損するか、利害得失を能

く胸に手を當て、算段をして見よ。情を棄つるか、理智を棄つるか、二つに一つ

の性念場だ。情に惹かされ、大事を謬る天下の癡呆者、假令秋山彦の三人、五人

殺されようとも、神素盞鳴尊様さへ御無事ならば、吾等は是れにて満足致す。マ

アマアゆつくりと、酒でも飲みて、今日の酒宴を賑やかに致せ。喜悅の座席に血

腥い話を持ち込まれては、サツパリお座が醒める

龜彦 汝國武彦とは眞赤な詐り、大江山に現はれたる、鬼雲彦が鬼の片腕、國武

彦と名を偽り、三五教に忍び込み來たり、内外相應じ、神素盞鳴尊を損はむとす

る者ならむ、首途の血祭り、龜彦が一刀の下に斬りつけ、蹴散らかして呉れむ

と短劍ヒラリと引抜いて、切つて掛かるを、國武彦は少しも騒がず、體を左右に



躰し、あしらひ乍ら、

「アハ、ハ、ハ、ハ、龜の踊は格別面白う御座る、ヤア素盞鳴の大神殿、御愉快では御座らぬか」

「ワハ、ハ、ハ、面白面白」

龜彦「是れは怪しからぬ、利己主義の中心、個人主義の行方……高天原を神退ひに退はれたは、寧ろ當然の成行、此龜彦は今迄貴神が惡逆無道の心中を知らず、至善至美至仁至愛の大神と信じて居たは残念だ。モウ斯うなる上は、天下の爲に汝を滅し、吾れも生命を棄てて、宇宙の惡魔を除かむ」

と切つて掛るを、英子姫、悦子姫は其前に立塞がり、  
「オホ、ハ、ハ、あの龜彦の元氣な事、さぞお草臥でせう。妾が代つて一芝居致しますせう。マアマアお休み遊ばせ」

紅葉姫は聲を擧げて泣伏しける。

龜彦「是れは是れは紅葉姫様、お歎き御尤も、主人の災難を聞き乍ら、女房として此れがどう忍ばれませう。あかの他人の龜彦さへも、残念で残念で堪りませぬ

ワイ。斯う云ふ時に助けて貰はうと思つて、秋山彦が日頃の親切、イヤモウ氣樂  
千萬な素盞鳴の御大將呆れ蛙の面の水と申さうか、馬耳東風と言はうか、味方の  
危難を對岸の火災視し、一臂の力も添へざるのみか、愉快氣に酒を飲むで戲むれ  
むとするは、人情輕薄紙の如く、イヤモウ實に呆れ果てて御座る。サア紅葉姫殿、  
斯かる連中に斟酌なく、龜彦と共に表へ驅け出し、秋山彦が弔戰、此細腕の續か  
む限り、劍の目釘の續く丈、縱横無盡に斬り立て、薙ぎ立て、敵の奴輩一人も殘  
さず、秋の紅葉を散らせし如く、大地を血汐に染めなし、血河屍山の大活動を仕  
らう、紅葉姫、サア龜彦に續かせ給へ

と表を指して行かむとす。英子姫は腰の紐帶を取るより早く、龜彦が首にヒラリ  
と打かけ、グイと引戻せば、龜彦は細紐に喉笛を締められ、脆くも仰向に其場に  
パタリと倒れたり。表に聞ゆる人聲は、刻々に館の奥を目蒐けて近づき來る。

紅葉姫は、

心も魂も捧げたる

神素盞鳴の大神に

力ちからの限かぎり身みの限かぎり 仕つかへまつるか但ただし又また  
此この場ばを棄すてて吾わが夫つまの 秋あき山やま彦ひこを救すくはむか。

神しん命めいは重おもし又また夫をつとの身みの上うへは、妻つまの身みとして坐ざ視しするに忍しのびず、千せん思し萬ばん慮りとつお  
いつ、心こころの中うちを紅葉もみぢ姫ひめ、顔かほに散ちらした唐から紅くれなゐの血ち汐ほ漲みなぎる鬨ときの聲こゑ、胸むねはドキドキ、刻こく々こく  
に、近ちか付づき來きたる敵てきの勢せい、姫ひめが心こころぞ憐あはれなる。

此この場ばに近ちか付づき來きたるかと聞きこえし聲こゑは、何い時つしか消きえて跡あとなき小こ春はる空ぞら、秋あき山やま彦ひこは悠い悠う  
然ぜんと騒さわがず、遽あせらず、奥おくの間ま指さして歸かへり來くる。龜かめ彦ひこ、紅葉もみぢ姫ひめの兩りやう人にんは、餘あまりの嬉うれ  
しさに、ハツと胸むね逼せまり、ものをも言いはず、其その場ばに打うち倒たふれ、夢ゆめか現うつか幻まぼろかと、吾われと  
吾わが心こころを疑うたがひ、思し案あんに時ときを移うつすのみ。國くに武たけ彦ひこは立たちあがり、  
龜かめ彦ひこ、紅葉もみぢ姫ひめ、心しん配ぱい致いたすな。吾われ等らが着けん族ぞく鬼おに武たけ彦ひこをして、鬼おに雲くも彦ひこの惡あく逆ぎやく無む道だうを懲こら  
す爲ため神しん變べん不ふ思し議ぎの神かむ術わざを用もちひ、敵てきの本ほん城じやうに忍しのばせられたれば、少すこしも案あんずる事こと勿なれ  
と始はじめて事じ情じやうを打うち明あけたるにぞ、龜かめ彦ひこ、紅葉もみぢ姫ひめは、

「ハ、ア、ハツ」

と計りに嬉し泣き、暫しは顔を得上げざりしが、素盞鳴尊は龜彦に向ひ、

「ヤア龜彦、汝が心の中の美はしさ、吾れは満足致したぞよ、イザ是れより賑々しく酒宴を催し、大江山の本城は彼等着族に打任せ、吾々一行は由良の湊より船に乗り綾の高天原に進まむ」

と宣示し給へば、龜彦は勇み立ち、

龜彦「ア、ハツハ、ハツハ、芽出たし芽出たし、愈是れより大神の御伴致し、聖地を指して逸早く進み上り、神政成就の基を開かむ、ヤア秋山彦、紅葉姫、お喜びあれ。貴下が誠忠、至誠、至愛の眞心天地に通じたり。併し乍ら吾々一同當家を去らば、再び大江山より鬼雲彦の部下の者、又もや押し寄せ來るも計り難し、隨分心を附け召されよ」

秋山彦夫婦は涙を揮ひ、

「何から何まで、貴下の御親切、骨身に徹して辱なう存じます。併し乍ら吾等は神素盞鳴大神の御守りあれば、必ず御心配下さいますな、一時も早く聖地を指して御上り下され。神政成就の基礎を樹立する爲、御奮勵の程偏に希ひ上げ奉る」

と慇懃に謝辭を述べける。

素尊「ヤア秋山彦夫婦、多大いお世話になりしよ。我れは是より一先づ聖地に立

向ひ、天下の悪神を掃蕩すべき準備をなさむ、船の用意を致せ」

秋山彦「八八ア委細承知仕りました。……銀公、加米公、汝は一時も早く湊に出

で、御船の用意にかかれ」

銀公「八、ア委細承知仕りました。併し乍ら船は敵軍の爲に殆ど占領せられたる

やも計られませぬ。萬々一船なき時は、如何取計らひませうや」

秋山彦雙手を組み頭を傾け思案にくるるを、國武彦は、

「ナニ心配に及ばぬ、御船は残らず國武彦が眷屬を以て守らせあれば大丈夫なり。

安心致せ。且又當邸の周圍には、最早敵の片影だもなし、勇み出船の用意をせよ」

銀公、加米公は、

「ハイ」

と答へて此場を立去りぬ。又もや絲竹管絃の響は屋外に洩るる陽氣と一變したり

けり。

神素盞鳴尊は突立上り、聲も涼しく歌はせ給ひぬ。

高天原を立出でて 四方の國々島々を

世人を助け守らむと 彼方こちらと漂浪の

旅を重ねて西藏や フサの荒野を打渡り

ウブスナ山に立籠り イソ山峠の絶頂に

假の館を構へつつ 熊野樟毘命をば

留守居の神と定めおき 我れは悲しき隠れ身の

愛しき娘は四方八方に 四鳥の別れ釣魚の涙

憂を重ねてやうやうに 渡りて来る和田の原

醜の曲津も大江山 鬼雲彦を言向けて

世人の悩みを救はむと 船に揺られて由良湊

心も赤き秋山彦の 館に暫し身を休め

四方の國形伺へば 十里四方は宮の内

内と外との境なる  
大江の山にバラモンの

神の司の鬼雲彦が  
又もや砦を築きつつ

醜の荒びの最中に  
訪ねて来る良の

神の命の分靈  
國武彦と現はれて

我れに附添ひ右左  
前や後を構ひつつ

鬼武彦の伊猛るの  
神に従ふ白狐共

暗夜を照らす朝日子や  
月日明神神徳も

高倉稻荷の活動に  
悩ませられて悪神は

愈今日は運の盡  
月に村雲花に風

心の錦秋山彦の  
神の司の眞心は

紅葉の姫の如くなり  
光眩ゆき英子姫

すべての用意も悦子姫  
萬代固むる龜彦が

忠義の刃研ぎすまし  
さしもに猛き曲神を

言向和すは目前  
吁、面白し面白し

さはさりながら神心かみこころ

凡ての敵を救はむとすべ てき すく

善をば助け曲神をぜん たす まがかみ

懲して救ふ神の道こら すく かみ みち

青垣山を繞らせるあをがきやま めぐ

天津神籬磐境とあまつひもろぎ いはさか

現はれませる世繼王山あら よつわうざん

深き仕組を暫くはふか しぐみ しばら

雲に包みて彌仙山くも つつ みせんざん

本宮山に現はれてほんぐうやま あら

はちすの山の蓮華臺やま れんげだい

三五教の御教をあななひけう みをしへ

常磐堅磐に搗固めときは かきは つきかた

鬼も大蛇も丸山のおに をろち まるやま

神の稜威に桶伏やかみ みいづ をけふせ

汚れを流す由良の川けが なが ゆら かは

言靈響く五十鈴川ことたまひび いすずがは

曲の健びは音無瀬のまが たけ おとなせ

水に流して清め行くみづ なが きよ ゆく

科戸の風の福知山しなど かぜ ふくちやま

めぐりて此處に鬼城山めぐりて ここ きじやうざん

鬼も悪魔も無き世ぞとおにあくま なよ

治むる御代こそ樂しけれをさ みよ たの

治むる御代こそ樂しけれをさ みよ たの

國武彦は立ちあがり歌ひけり。その歌、くにたけひこ たた うちあがり うた ひけり。 そのうた、



宇宙を造り固めたる  
大國治立神の裔

國治立の大神と  
綾の高天原に現はれて

天地の律法制定し  
天地を淨め照さむと

思ひし事も水の泡  
天足の彦や胞場姫の

邪氣より成れる鬼大蛇  
醜の狐や惡神の

荒びの息は四方の國  
充塞がりて月も日も

光失ひ山河や  
木草の果てに至るまで

所得ずしてサワサワに  
騒ぎ烈しき醜の風

誠嵐の吹き荒び  
日の稚宮に坐しませる

日の大神の思召し  
根底の國に退はれて

百千萬の苦しみを  
嘗め盡したる身の果ては

野立彦の神と現はれて  
天教山を胞衣となし

猛火の中を出入し  
此世を守る我が身魂

世を良の神國と  
鳴り響きたる中津國

自轉倒島の中央に

姿隠して今は早

國武彦となり下り

五六七の御代の來る迄

心を盡し守らむと

神素盞鳴の大神の

瑞の御靈と諸共に

愈此處に嚴御靈

三と五との組合せ

八洲の國を三五の

教の則に治めむと

心盡しの益良夫が

花咲く春を松の世の

松の縁に花が咲き

一度に開く白梅の

花の香を天地に

揚ぐる時こそ待たれける

我は是より世繼王の

山の麓に身を忍び

彌勒の御代の魁を

勤むる良金の神

神素盞鳴の大神は

一旦聖地に現はれて

三五教の礎を

築固めたる其上に

又もや海原打渡り

大地隈なく言向けて

五六七の御代の魁を

開く神業に眞心を  
注がせ給ふ瑞御靈  
三五の月のキラキラと  
明き神代を望の夜の  
月より丸く治めませ  
治まる御代は日の本の  
誠一つの光なり  
誠一つの光なり

英子姫は立上り、

父大神の御言もて

妾姉妹八乙女は

豊葦原の中津國

メソポタミヤの顯恩の

郷に籠れる曲神の

鬼雲彦を平げて

三五教の神の道

八洲の國に照さむと

思ふ折しも曲神が

醜の企みの捨小船

波のまにまに流されて

流す涙も海の上

荒き汐路を踏み分けて

やうやう此處に揺られつつ

由良の湊に來て見れば

秋山彦が眞心に

妾等二人は照されて

心の暗も晴れわたる

斯る浮世に鬼無しと

世人は言へど大江山

鬼の棲家のいと近く

人の生血を絞り喰ふ

此有様を聞き乍ら

どうして此場を去られうか

父大神や國武彦の

神の命の出立は

是非に及ばず然り乍ら

妾は後に残り居て

鬼雲彦の類を

言向和し世の中の

醜の災禍根を絶ちて

聖地に進むも遅からじ

許させ給へ父の神

國武彦の大神よ

偏に願ひ奉る

偏に拜み奉る

と兩手を合せ、二神に向つて拜禮し、涙と共に頼み入る。

國武彦 英子姫の願、一應尤もなれども、多寡が知れたる鬼雲彦が一派、何の恐

るる事ことかあらむ。神力しんりきむげん無限むげんの鬼武彦おにたけひこをして、彼れか惡神わるがみが征討せいたうに向むかはせたれば安心あんしん  
あれ、サアサア一時いちじも早くはや聖地せいちを指さして進すすみ行ゆかむ。躊躇ちうちよに及およばば、鬼雲彦おにくもひこが一いつ  
派鬼ばおにつかみ摑けんぞくどもの眷屬けんぞくども共、我等われらが到着たうちやくに先立さきだち、聖地せいちを穢けがすの虞おそれあり、イザ早くはや……  
と急せき立たつれば、神素かむすさの蓋を鳴おほかみの大おほかみ神は、装束しやうぞく整とこのへ、一行いっかうと共ともに悠然いうぜんとして此家このやを立たち  
出いで、由良ゆらの湊みなとの渡船場とせんば、世繼よつわうまる王丸に身みを任まかせ、折をりから吹ふき來くる北風きたかぜに眞帆まほを孕はら  
ませ、悠々いういうと河瀬かはせを溯さかのぼり給たまふこそ尊たふとけれ。

(大正一一・四・一四 舊三・一八 於瑞祥閣 松村眞澄録)

## 第六章 石槍いしやりの雨あめ (五九六)

大空おほぞら碧あをく澄すみ渡わたり 山河やまかは清きよくさやかにて  
静しづかに流ながるる和知わちの川かは 枝えだも鳴ならさぬ音無おとな瀬せの

川の流ながれは緩ゆるやかに

幾いくせんぢやう千丈の青絹あをぎぬを

流ながすが如ごとくゆらゆらと

水瀬みなせも深ふかき由良ゆらの川かは

神代かみよも廻めぐり北きたの風かぜ

真帆まほを膨ふくらせ登のぼり來くる

深ふかき恵めぐみを河守かうもり驛えきや

河かはの中央なかばに立たち岩いはの

關所せきしよを越こえて漸やうやうに

足許あしもとはや早はやき長谷はせの川かは

水みづの落合おちあひ右左みぎひだり

左手ゆんでに向むかひ舵かぢをとり

上のぼる河路かはぢも長砂ながすなや

幾多いくたの村むらの瀬せを越こえて

此處ここは聖地せいぢと白瀬橋しらせばし

下したを潛くぐつて上のぼり來くる

臥龍ぐわりりよつの松まつの川水かはみづに

枝えだを浸ひたして魚躍うををどり

月つきは梢こつゑに澄すみ渡わたる

向方むかうに見みゆるは稻山いねやまか

丹波たんばの富士ふじと聞きこえたる

彌仙みせんの山やまは雲表うんべうに

聳そびえて立たてる雄々ををしさよ

敵てきも無なければ味方郷みかたがう

味方平みかただひらに船留ふねとめて

四方よもの國形くにがた眺ながむれば

青垣山あをがきやまを繞めぐらせる

下津岩根したついはねの龍宮館りうぐうやかた

此處は名におふ小亞細亞 地上の高天と聞えたる  
昔の聖地エルサレム 橄欖山や由良の  
景色に勝る聖地なり。

神素盞鳴大神、國武彦命其他三人は、桶伏山の蓮華臺上に登らせ給ひ、天神地  
祇八百萬の神を神集へに集へ給へば、命の清き言靈に先を争ひ寄り來る百の神等、  
處狭きまで集まりて、皇大神の出でましを、祝ひ壽ぐ有様は、蓮花の一時に、開  
き初めたる如くなり。

神素盞鳴大神は、國武彦命に何事か、密に依さし給ひ、ミロク神政の曉迄三十  
五萬年の其後に再會を約し、忽ち來る丹頂の鶴にヒラリと跨り、中空高く東を指  
して飛び去り給ふ。國武彦命は龜彦を始め、英子姫、悦子姫に何事か囁き乍ら萬  
司に向ひ嚴格なる神示を與へ、茲に別れて只一柱、四王の峰の彼方に雄々しき姿  
を隠したまひける。

後に殘されし一男二女の宣傳使は二神の依さしの神言を心の底に秘め置きて、

又もや此處を立ち出でて、大江の山を目蒐けて、いそいそ進み行く。嗟此の山上の五柱は、如何なる神策を提議されしぞ。神界の秘密容易に窺知すべからず、月は盈つとも虧くるとも、假令大地は沈むとも誠の力は世を救ふ、誠の神が出現し再びミロクの御代となり、世界悉く其堵に安むじて、天地の神の恵みを壽ぎ、喜び、勇む尊き神代の來るまで、云うてはならぬ神の道、言ふに言はれぬ此仕組、坊子頭か、禿頭、頭かくして尻尾の先を些し許り述べて置く。もとより物語する王仁も、筆執る人も聞く人も、何だか拍子の抜けたやうな心いぶせき物語、今は包みてかく言ふになむ。

秋山彦の門前に數多の魔人を引連れて、現はれ出でたる鬼彦は、第一着に秋山彦の口に石を捻込み、猿轡を箝ませ、高手小手に縛め置き、尚も進みて奥殿深く、神素盞鳴の大神を始め、國武彦、紅葉姫、英子姫、龜彦諸共、高手小手に踏ん縛り、勝鬨あげて悠々と大江山の本城を指して勇み歸り行く。

千歳の老松生茂れる山道を、網代の駕籠を昇つぎながら、川を飛び越え岩間を傳ひ、やつと出て來た魔窟ヶ原、一同網代の駕籠を下ろし周圍の岩に腰打ち掛け、



息を休めながら雑談に耽る。

甲「オイ鬼虎、貴様は龍燈松の根本に於て、さしも強敵なる二人の女に「ちやつちやつ」、「もちやく」にせられ、鬼雲彦の御大將に目から火の出るやうなお目玉を頂戴致して眞青になり、縮上つて居よつたが、何うだい、今日は大きな顔をして歸れるだらう、歸つたら一つ奢らにやなるまいぞ」

鬼虎「オ、さうだ、熊鷹、貴様らも同じ事だ、あの時の態つたら見られたものぢやなかつたよ。何分此方様の御命令通り服従せないものだから、ハーモニイ的行動を缺いだ爲めに思はぬ失敗を演じたのだ。それにしても愼むべきは酒ではないか、あの時に吾々は酒さへ飲み居なかつたら、アンナ失敗は演じなかつたのだよ」

熊鷹「ナニ、決して失敗でもない、二人の女を取り逃がした爲に却て素盞鳴尊の所在が分り、禍轉じて幸となつたやうなものだ。何事も世の中は人間萬事塞翁が馬の糞だ、併し今日は鬼彦の指揮宜しきを得たる爲に、かういう効果を齎したのだ、何事も戦ひは上下一致ノーマルの活動でなくては駄目だワイ、何程ジャン

ジヤヒエールが澤山揃つて居たとこで總ての行動に統一を缺いだならば失敗は  
目前だ。總て何事も大將の注意周到なる指揮命令と、吾々が大將に對する忠實至  
誠のベストを盡すにあるのだ、サテ鬼彦の御大將、今日の御成功お祝ひ申す、之  
で鬼雲彦の御大將も御安心貴方も安心皆の者も安心、共に吾々も御安心だ、ア  
ハ、ハ、ハ、ハ、

此時頭上の松の茂みよりポトリポトリと石の團子が雨の如く降り來り、鬼彦始  
め、鬼虎、熊鷹其他一同の體に向つて叩きつけるやうに落ち來たり。一同はアイ  
タ、コイタ、イ、イタイと逃げようとすれども、石雨の槍襖に隔てられ、些  
しも身動きならず頭部面部に團瘤を幾つとなく拵へけり。石熊は頭上を仰ぐ途端  
に鼻柱にパチツと當つた拳骨大の石に鼻をへしやがれ、血をたらたらと流し、目  
をしかめ、ウンと其場に倒れたり。網代駕籠の中に囚はれたる神々は、金城鐵壁  
極めて安全無事、此光景を眺めて思はず一度に高笑ひ、アハ、ハ、ハ、オ、  
ホ、ハ、ハ、ハ、

石の雨はピタリとやみぬ。神素盞鳴尊を始め、一同七人は又ツと此場に現はれ

たりと見れば猿轡も縛の繩も何時の間にか解かれ居たりける。

悦子姫「オー皆様氣の毒な事が出来ましたナア。此峻嶮の難路を吾々を駕籠に乗せて、命辛々汗水垂らして送つて来て呉れました博愛無限な人足を、頭部面部の嫌ひなく、支店を開業して團子販賣營業を盛に獎勵致して居ります。何うか皆さま腹も減いたでせう、あの出店の團瘤を一つ宛買つてやつて下さい、アハ、アハ、アハ、龜彦「吾々も大變腹が減きました。支店の賣品では面白くない、一層の事本店の背から上の目鼻の附いた團瘤を搥【ちぎ】つて頂戴致しませうか。アハ、アハ、アハ、一同「ホ、ホ、ホ、ホ、」

鬼虎は顔を顰めながら、

「ヤイヤイ皆の奴確りせぬかい、石の雨が降つたつてさう屁古垂れるものぢやない。俺は除外例だが、貴様達は早く元氣をつけて此奴を踏ん縛つて仕舞はねば、ドンナ事が出来致すも分らぬぞ。エイ、何奴も此奴も腰抜けばかりだナア、鬼搦の奴、敵と味方と感違ひを仕よつて、味方の頭上に石弾を降らしよつたのだ。敵の石弾に打たれたと云ふのならまだしもだが、味方の石弾に打たれてこの谷川の

露と消えるかと思へば、俺ア死んでも死なれぬ哩。ア、何うやら息が切れさうだ、オイ貴様達、俺の女房を呼んで来て呉れ、最後の際に唯一目會うて死にたい顔見たい、そればつかりが黄泉の迷ひだ。アンアンアン

熊鷹「ヤイヤイ何奴も此奴も確りせぬかい、何ぢや、地獄から火を取りに来たやうな眞青な顔をしよつて、ソナ弱い事でこの役目が勤まらうか、確りせぬかい、

アイタ、矢張り俺も苦しい哩、苦しい時の鬼頼みだ、南無鬼雲彦大明神様、

吾等が精忠無比の眞心を憐れみ給ひ、一時も早く痛みを止め、其反對に素盞鳴一派の奴の頭の上に鋼鉾の雨でも降らして滅ぼし給へ。それも矢張貴方の爲ぢや、

一擧兩得自分が助かりや家來も助かる、コンナ好い事が何處にあるものか、エ、ナンボ頼みても聞き分けのないバラモン教の大神様だワイ

此時又もや鋭利なる切尖の付いた矢は雨の如く降り來り、鬼彦以下の魔神の身體に遠慮會釋もなく突き立ちにける。

「ア、またか、大神様は感違をなされたか、敵はあの通り無事、味方には激しき征矢の集注、好く間違へば間違ふものだなア、アイタ、耐らぬ眞實に此度は

息が切れるぞ、仕方が無い死んだら最後地獄の鬼となつて此奴共の來るのを待ち受け、返報がへしをしてこます、ヤイ素盞鳴尊、其他の奴等覺えて居れ、貴様が死んだら目が潰れるやうに、口が利けぬやうに、びくとも動けぬやうにしてやるぞや」

龜彦「アハ、ハ、ハ、ハ、吐くな吐くな、目が潰れる口が利けぬ、體が動かぬやうにしてやらうとは好くも言へたものだワイ、天下一品の珍言妙語だ、モシモシ英子姫さま、悦子姫さま、舞でも舞うたらどうでせう、コンナ面白い光景は滅多に、大江山でなくては見られませぬよ」

「ホ、ハ、ハ、ハ、」

秋山彦は兩手を組み、聲も涼しく一二三四と天の數歌を唱ふるや、一同の魔神の創所は忽ち拭ふが如くに癒え來たり、彼方にも此方にも喜びの聲、充ち充ちにける。

「ア、助かつた」

「妙だ」

不思議だ

怪體の事があるものだワイ

と囁き始めたり。秋山彦は一同に向ひ聲も涼しく宣傳歌を謡ふ。

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

鬼雲彦は強くとも 大江の山は深くとも

數多の部下はあるとても 蝨の如き弱蟲の

人の生血を朝夕に 漁りて喰ふ奴ばかり

澤山絞つて蓄へた 身體の中の生血をば

吐き出すための神の業 頭を碎く石の雨

血を絞り出す征矢の先 潮の如く流れ出でぬ

吾は此世を救ふてふ 人子の司三五の

神の教のまめ人ぞ 鬼や惡魔となり果てし

汝が身魂を谷川の 清き流れに楔して

天津御神のたまひたる  
もとの身魂に立て直し

今迄犯せし罪咎を  
直日に見直し聞き直し

百千萬の過ちを  
直日の御靈に宣り直す

神素盞鳴の大神の  
恵も深き御教

膽に銘じて忘れなよ  
石熊、熊鷹、鬼熊よ

心猛しき鬼彦も  
此處で心を取り直せ

如何なる敵も敵とせず  
救ひ助くる神の道

誠の力は身を救ふ  
救ひの神に従ふか

曲津の神に心服ふか  
善と悪との國境

榮え久しき天國の  
神の御魂となり變はり

誠一つの三五の  
教にかへれ百人よ

元は天地の分靈  
善もなければ悪もない

善惡邪正を超越し  
生れ赤子の氣になりて

天地の法則に従へば  
鬼や大蛇の荒ぶなる

魔窟ヶ原も忽ちに  
メソポタミヤの顯恩郷

榮えの花は永久に  
木の實は熟し味もよく

心を碎いて世の人を  
苦しめ惱め吾身亦

苦しむ事は要らぬもの  
サア諸人よ諸人よ

心の底より改めて  
眞の道に歸るなら

神は救の御手を延べ  
榮に充てる永久の

高天に救ひ玉ふべし  
應は如何にサア如何に

心を定めて返り言  
聲も涼しく宣れよかし

神は汝の身に添ひて  
厚く守らせ給ふらむ

あゝ惟神々々  
靈幸倍坐世よ

と謠ひ終れば、鬼彦始め一同は大地に「はた」と身を伏せて、感謝の涙に咽びつ

つ山嶽も揺ぐばかりに聲を放つて泣き叫びける。

(大正一一・四・一四 舊三・一八 加藤明子録)



第七章 空籠（五九七）

秋山彦が心籠めたる宣傳歌に鬼彦、鬼虎、石熊、熊鷹其他の面々は心の底より前非を悔い、一行の前に鱗伏して兩手を合せ、覺束なき言靈の息を固めて秋山彦の後につき天津祝詞を奏上し、宣傳歌を唱へ歸順の意を表したりけり。

鬼彦「素盞鳴尊様を始め御一同の方々に御禮申し上げます、吾々の如き惡魔の容器赦し難き罪人の危難をお救ひ下され、其上にも大慈大悲の大神の大御心を以て身體不自由の吾々をお助け下されし御志何と御禮を申し上げて宜しいやら、今後は心の底より悔い改めます、サアサ何卒一刻も早く此場を御立退き下さいませ、此魔窟ヶ原をズツト奥へ進みますれば愈鬼雲彦の岩窟の棲家、又立派なる本城が御座いまする、其處へ參れば數多の邪人共手具脛引いて待ち構へ居れば、如何に勇猛なる貴神様も多少御苦みの事と存じますれば、吾々の言葉をお用ひ下さいまして、何卒此場より御逃れ下さいますよう」

と眞心を面に表はして忠告する。龜彦は擲揄半分、

「ホー鬼彦の大將、随分智慧が能く廻るぢやないか、親切ごかしに吾々の勇將を撃退し暫時の猶豫を貪らむとする猾い計略、今此處に於て吾ら一行を苦めむとせし處、天罰立所に致り過つて味方の石彈、征矢に中り零敗の大見當違ひを演じ懲り懲りしたと見えるワイ。然し乍ら吾々は決して婆羅門教の如く、否鬼雲彦の如く善の假面を被り天下を攪亂せむとするものに非ず、之より鬼雲彦に面會し彼をして汝等の如く心の底より悔い改めしめねばならぬ、今よりは吾々一行を舊の如くに高手小手に縛め、御苦勞乍ら、此網代籠に乗せて擔いで行つて呉れよ」

鬼彦「イヤ滅相な、貴神等の如きお方を本城へ迎へ入れるが最後、天地轉動の大騷動、大江山の城内は亂離骨灰、落花微塵の慘状を演出するは明鏡の物を照して餘蘊なきが如しであります、何卒々々此場をお引き取り下さいませ」

龜彦「貴様は矢つ張り鬼雲彦の鼻肩を致して居るな、ヤア感心々々、一旦大將と恃みた者に對してそれ丈けの心遣ひを致すは人間の眞心の發露である。併し乍ら此處迄思ひ立つたる吾々の心中、中途に駒の頭を立て直す事は男子として忍び難き處だ、如何しても聞かねば吾々は之より強行的行脚を續け大江山の本城に立向

ふであらう」

とそろそろ歩み初めれば、鬼彦は泣聲を出し、

「モシモシ、夕々、大變で御座います、如何に貴神方が英雄なればとて多勢に

對する無勢、御苦戦の程お察し申す」

と眞心より止める。部下の一同は驚異の面相を陳列して鬼彦の顔をうち衛り居る。

龜彦「何だ、女々しい事を言ふな、貴様も鬼雲彦の左守と迄言はれた男じやない

か、それに何ぞや、亡國の哀音を立て絶望的悲調の涙を湛へて吾々を止めむとす

るは其意を得ない、之には何か深き謀計のある事ならむ、吾等一行は自由自在に

山中徒歩の權利を有す、サアサ御一同様、進みて参りませう。假令鬼雲彦百萬の

大軍を擁し防ぎ戦うとも此龜彦が只一人あれば澤山なり。強風の砂塵を捲き上ぐ

る如く、吾一言の息吹によつて根底より悔い改めしめ、惡魔の巢窟をして天國樂

園と化せしめむ。ヤア面白し、勇ましし」

と獨語ちつつ肩を怒らし氣焰萬丈當るべからず、足踏み鳴らし雄猛びする。

鬼彦「龜彦様、大變な勢でメートルをお上げになつて居られますな」

龜彦 『オウさうだ、敵の敗亡目前にメートルだ、某の前進を妨げむとしてメートル

ルの事致すと量見ならぬぞ、ジャンジャ、ヒエールの某を何と心得てるか』

鬼彦 『ジャンジャ、ヒエールか、ジャンジャ馬が存じませぬが能う貴下はジャン

ジャを捏ねるお方ですな』

龜彦 『エーエ、ジャンジャマ臭い、愚圖々々して居ると折角上つたメートルがヒ

エールだ、サアサ行かう』

と又もや行かむとする。

鬼彦 『ア、ア、行つて下さるなと親切に申し上げても貴下は何處までも行かむと

する御氣色、モウ斯うなつては「ゆかん」乍ら「ゆかん」ともする事が出来ませ

ぬ哩』

龜彦 『エ、洒落どころかい、愚圖々々吐さずと此方を縛り上げて本城へ擔ぎ込ま

ぬか』

鬼彦 『ソ、ソ、それが大變で御座います、今迄の私なれば貴下等が何程行かむと

仰しやつても連れて行つて手柄に致しまするが、最早天地の因果を悟り惡を悔い

改めた上は、如何して之が黙つて居られませう、人の性は善で御座います、決して悪い事は申しませぬ」

龜彦「ヤア仕方のない弱蟲ばかりだナア、鬼雲彦もコンナ連中を養つて居れば竝大抵の事でもあるまい、思へば思へば鬼雲彦の御心中お可憐相である哩」

斯かる處へ二本の角をニユツと生した鬘を被つた五人の男、ノソリノソリと手槍を掲げ、此場に現はれ來り、

男「ヤア、鬼彦の大將、お手柄お手柄、サア之から吾々が御案内申さう、鬼雲彦の御大將様子如何にと首を長うしてお待ちかね、嘸お骨折で御座つたらう」

と言ひ乍ら駕籠の中を一々覗きこみ、  
男「ヤア何だ、空籠じゃないか、素盞鳴尊其他は如何なされた、首尾克う生擒つ

たとの御注進ではなかつたか」

鬼虎、熊鷹、石熊、鬼彦は四邊を見れば此は如何に、今迄盛にメートルを上げて居た龜彦の姿も素盞鳴尊、國武彦其他一行の影も形もなくなつて居る。

鬼彦「ヤア、此奴は不思議だ、今迄此網代籠に乗せて來た一同の神人、ではない

囚人何處へ姿を隠しよつたか、合點の往かぬ事である哩」

熊鷹「サア此處は名に負ふ魔窟ヶ原、目に見えない惡魔が出て來よつて吾々が知らぬ間に喰つて仕舞つたのか、但は鬼雲彦の大將の威勢に恐れて自然消滅致したか、何に付けても合點の往かぬ事である哩。ヤア五人の方々、一時も早く本城へ立ち歸り此由早く注進致すな」

五人の中の一人、目を圓くし、

男「ヤア何と仰せられます、一時も早く注進致すなどは合點が承知仕らぬ」

熊鷹「俺は昨日迄の熊鷹ではない、今日は立派な三五教の信者であるぞ、之より本城へ逆襲なし鬼雲彦が素首捻切り引き「ちぎ」り八岐大蛇の身魂を片つ端より言向和し、勝鬨あげるは瞬く間だ、汝は一刻も早く此場を立ち去り吾々が寄せ手の軍勢に向つて防戦の用意オサオサ怠るな」

五人は一度にいぶかり乍ら、

「ソ、ソ、それは眞實で御座るか」

熊鷹「眞偽は今に分るであらう、汝は早く此場を立ち去れ」

この權幕に五人は互に顔見合せて、

何だ、鬼彦の大將と言ひ、熊鷹の阿兄と言ひ、其他一同の顔の紐は薩張解けて仕舞ひ、今迄の鬼面は忽ち變じて光眩き女神の様な顔色に墮落して仕舞ひよつた、ハテ困つた事だワイ、善の道へ墮落するとコンナ腰抜けに成つて仕舞ふものかな

ア

五人は踵を返し一目散に彼方を指して逃げ歸る。鬼彦は衝立ち上り三五教の宣傳歌を謠ひ終り、

「サア一同の方々、如何で御座る、何だか拍子抜けがした様には御座らぬか」  
一同「左様で御座る、折角張り詰めた今迄の悪心は水の中で屁を放つた様にブルブルと泡となつて消え失せました、誰も彼もアルコールの脱けた甘酒の様になつて仕舞つた、龜彦が意見をして呉れたが之も餘り據り所が無い、甘い様な辛い様な、厳しい様な寛かな様な譯の分らぬ言葉であつた。丁度甘酒に、生姜の汁を入れて飲む様なものだ、親爺の強意見を聞き乍らソツとお金を貰ふ様な心持だつた、サアサ之から入信の記念として大江山の本城に駆け向ひ鬼雲彦の素首、オツト、

ドツコイ悪神の魂を抜いて助けてやらねばなるまい」

一同拍手して賛成の意を表し、鬼彦を先頭に宣傳歌を謠ひつつ、  
「や谷川を右に左に跳び越え進む折しも、忽然として叢の中より現はれ出でたる男  
女の二人、鬼彦一行の姿を目蒐けて冷やかに笑ひ乍ら、

「ヤア貴方は大江山の英雄豪傑と聞えたる御方、然るに今日のお姿は如何で御座  
る。薩張臺なしでは御座らぬか、玉の落ちたらムネの様な判然致さぬ其顔付、狐  
にでも欺されなかつたか、イヤ、エ、素盞鳴尊の悪神の口車に乗せられて膽をと  
られ腰を抜かしたのであるまいか、何れにしても合點の往かぬ耄碌姿、耄碌魂、  
脆くも敵に翻弄されてノソノソと歸り來るとは言ひ甲斐なき鬼彦一同の面々、鬼  
雲彦の大將に於かせられても嘸々お喜び遊ばす事であらう、持つべきものは家來  
なりけりと團栗の様な涙を流してお喜びになるであらう、アハ、ハ、ハ、ハ、オ  
ホ、ハ、ハ、ハ」

と笑ひ轉ける。鬼彦はムツト顔にて、  
「エー、何處の何奴か知らぬが吾々は吾々としての自由の権利を實行したのだ、



汝等の如きものの容喙すべき處でない、愚圖々々吐すと言靈の發射を致してやらうか。蝶螺の如き鐵拳、否牡丹餅で貴様の頬邊を殴つてやらうか」

「アハ、、、、オホ、、、、、ヤア皆の方々、此方へ御座れ、サアサ早く」と岩をクレツと剥れば、中には階段がついて居る。

鬼彦「ヤア何時も吾々のお通り路だがコンナ處に穴があるとは今迄知らなかつた。こいつは妙だ、ヤイ鬼虎、熊鷹、石熊其他の面々一同、見學の爲めに岩窟の探險と出掛ようではないか」

鬼虎は、

「面白からう」

と先に立つて下り行く。數百人の荒男は残らず好奇心に驅られて岩窟の中にガラツと田螺の殻を山の上から打ちあけた様な勢で一人も残らず轉げ込むだ。忽然として現はれたる鬼武彦は岩石の蓋をピタリと閉め其上に千引の岩をドスンと載せ、

「アハ、、、、、マア之で暫くは安心だワイ」

第八章 衣懸松 (五九八)

大江山の本城に間近くなつた童子ヶ淵の傍に現はれ出でたる二人の男女、又もや地中より這ひ出でて、岩戸の入口を打眺め、

青彦「ヤア高姫さま、何時の間にか、吾等が入口を、斯くの如き千引の岩を以て塞ぎよつたと見えます。幸ひ脱け穴より斯うして出て来たものの、萬一此穴がなかつたならば吾々は三五教に魂を抜かれた鬼彦一派の奴と共に、徳利詰に遭つて滅びねばならない所であつたのです。何とかして、此岩を取り除きたいものですな」

高姫「オホ、是れ全くウライ教の神様の御守護で御座いませう。何れ又時節到来せば、此岩は春の日に氷の解けるが如く消滅するであらう。瑞の御魂の變

性女子が惡戯を致しよつたに相違なからふ。必ず心配に及びますまい」

青彦「さうだと言つて、此巨大なる岩石が、どうして解けませうか。押したつて、

曳いたつて、百人や千人の力では、ビクとも致しますまい」

高姫「あのマア青彦さまの青ざめた顔ワイなあ、これ位な事に心配致す様では、

神政成就は出来すまい。あなたも聖地エルサレムに現はれた行成彦命と化けた

以上は、モウ少し肝玉を大きうして下さいや」

青彦「ぢやと申して、此岩を取り除けなくては、再び吾等は地底の巖窟に出入す

る事は出来申さぬ。出る事はヤツトの事で、胸の薄皮を摺剥き乍ら出て來ました

が、這入るのは到底困難です。早速の間に合ぢやありませんか。鬼雲彦の大勢力

を以て、今にも此場に現はれ來るとあらば、吾々は如何致すで御座らう、吁、心

許ない今の有様」

と悄氣返る。高姫はカラカラと打笑ひ、

「ホ、ホ、マア阿呆正直な青彦さま、顔から首まで眞青にして、慄うて居るの

か、夫れだから、世間からお前は青首だと言はれても仕方があるまい。チト確乎

なさらぬか、鬼雲彦が何恐ろしい」

青彦「それでも鬼雲彦はバラモン教の大棟梁、彼奴が恐さに、萬一の時の用意と、

此處に巖窟を掘つておいたのではなかつたのですか」

高姫「一旦はさう考へたが、最早今日となつては、何事も此高姫が胸中の策略を

以て、鬼雲彦も大半此方の者、あまり心配するものでない。お前もチツトは改心

を致して、鬼心になつたが宜からう」

青彦「イヤ、其様な悪魔に與するならば、吾々は眞つ平御免だ、今日限りお暇を

頂きませう」

高姫「オホ、モウ斯うなつては、逃げようと云つたつて、金輪奈落、逃がす

ものか、チャンと、湯巻の紐でお前の知らぬ間に、體も魂も縛つて置いた。逃げ

ようと云つたつて、どうも出来まい、逃げるなら、勝手に逃げて御覽うじ、妾の

掛けた細紐は、鐵の鎖よりもまだ強い、女の髪の毛一筋で大象でも繫ぐと云ふで

はないか。夫れさへあるに下紐を以て結び付けた以上は、ジタバタしてもあきま

せぬ。ホ、ホ、」

青彦「わたしは今迄、あなたの教は、三五教以上だ、變性女子の御靈をトコトン懲しめ、部下の奴等を一人も残らず、ウラナイ教の擒に致し、善に導き助けてやらうと思つて居たのに、これや又大變な當違ひ、善か悪か、あなたの本心が聞きたい」

高姫「善に見せて惡を働く神もあれば、惡に見せて善を働く神もある。善惡邪正の分らぬ様な事で、能う今迄妾に隨いて來た、………愛想が盡きた身魂ぢやなア、ホ、ホ、ホ」

青彦「さうすると、ウラナイ教は、善に見せて惡を働くのか、惡に見せて善を働くのか、どちらが本當で御座る」

高姫「エー、悟りの悪い、惡と言へば何事に係はらずキチリキチリと埒の明く人間の事だ。善と云へば、他人の苦勞で得を取る、畢竟御膳を据ゑさして、苦勞なしに箸を取ることだ」

青彦「益々合點が往かぬ、あなたの仰せ………」

高姫「善に強ければ惡にも強い、此方は假令善であらうと、ソナ事に頓着はな

い、盗人の群に捕手が来たら、其捕手は盗人からは大悪人ぢや、コツソリと博奕を打つて居る其場へポリスが踏み込んで来た時は、博奕打から見たら、其ポリスは大悪人だ。お前と妾と暗の夜に橋の袂でヒソヒソ話をして居る所へ、三五の月が雲の戸開けて覗いた時は、其月こそ吾等の爲には大の悪魔だ。これ位の事が分らないで、ウラナイ教がどうして開けるか。全然是れから數十萬年未來の十七八世紀の人間の様な事を思つて居らつしやる。せめて十九世紀末か、二十世紀初頭の、善悪不可解の人間に改善しなさい。エーエー悟りの悪い。……一人の神柱を拵へるのにも骨のをれた事だ。若い時から男性女と云はれたる此高姫が、心に潛む一厘の仕組、言うてやりたいは山々なれど、まだまだお前にや明かされぬ、エーエー困つた事になつたワイ」

青彦雙手を組み、暫し思案にくれて居る。

高姫「ア、仕方がない、コンナ分らぬ神柱を相手にして居ると、肩が凝る。エー仕方がない。サアサア衣懸松の麓の妾が隠れ家に引返して、酒でも飲みて機嫌を直し、ヒソヒソ話の序に、誠の事を知らして遣らう。さうしたら、チツとはお前

も改悪かいあくして胸むねが落着おちつくであらう。改心かいしんと云いふ事は、神素盞鳴尊かむすさのみことの誠まことの教をしへを、嘘うそだと云いつて、其教そのをしへ子を蝨殺しらみころしに喰くひ殺ころし、そつと舌したを出だして、會心くわいしんの笑ゑみを漏もらすと云いふ謎なぞだよ。お前まへもまだ悪あくが足たらぬ、飽あくまで改心かいしん……ドツコイ……慢心まんしんするが宜よい。慢心まんしんの裏うらは改心かいしんだ、改心かいしんの裏うらは慢心まんしんだ、表教おもてけうの裏うらはウラル教けう、表おもてと裏うらと一つひとつになつて、天地てんちの經綸けいりんが行おこなはれるのだよ」

青彦あをひこ「エー益々ますます譯わけが分わからなくなつた。さうすると貴女あなたは迷信教めいしんけうを開ひらくのだな」

高姫たかひめ「さうだ、迷信めいしんとは米こめの字じに、走しんにうをかけたのだ。米こめの字じは大八洲おほやししまの形かたちだよ、

大八洲彦おほやししまひこの命みことの砦とりでに侵入しんにふして、信者しんじやをボツタクから、所謂いはゆる迷信教めいしんけうだ。オ

ホ、ホ、迷まようたと云いふ言葉ことばは、惡魔あくまの魔まを呼よぶと云いふ事ことだ。それに三五教あななひけうの奴やつ

は馬鹿ばかだから、迷まようたと云いふのは、誠まことのマに酔よふのだなどと、譯わけの分わからぬ事ことを言い

つてゐよる、嗚呼あ迷信めいしんなる哉かな、迷信めいしんなるかなだ」

青彦あをひこ「ますます迷宮めいきうに入いつて來きた」

高姫たかひめ「定きまつた事ことだ。米こめの字じに因縁いんねんのある所ところに建たてたお宮みやに立たてこもつた吾々われわれは、

迷宮めいきうに居あるのは當然あたりまへだ。三五教あななひけうの素盞鳴尊すさのみことは、よつぽど、馬鹿正直ばかしやうぢきな奴やつだ、世界せかい

の爲に千座の置戸を負ひよつて、善を盡し、美を盡し、世界から惡魔だ、外道だと言はれて、十字架を負ふのは自分の天職だと甘んじて居る、コンナ馬鹿が世界に又と一人あるものか、世界の中で馬鹿の鑑と云へば、調子に乗つて木登りする奴と、自ら千座の置戸を負ふ奴と、廣い街道を人の軒下を歩いて、看板で頭を打つて瘤を拵へて吠える奴位が大關だ。……鬼雲彦も餘つ程馬鹿だ。初から惡を標榜して惡を働かうと思つたつて、ナニそれが成功するものか、智慧の無い奴のする事は、大抵皆頓珍漢ばかりだよ。善惡不二、正邪同根と云ふ眞理を知らぬ馬鹿者の世の中だ。青彦、お前も大分素盞鳴尊に被れたな、世の中は何事も裏表のあるものだよ、ゴンベレル丈權兵衛り、ボロレル丈ボロつて、其後は、白蓮の賢い行方だ。お前も餘つ程能い青瓢箪だなア

と、ビシヤリと額を叩く。

青彦「ヤアどうも意味深長なる御説明恐れ入つて御座います。モウ斯うなる上は、どうならうとも、あなたにお任せ致しますワ」

高姫「ア、さうぢや さうぢや、さうなくては信仰は出来ない。信仰は戀慕の心



と同じ事だ、男女間の戀愛を極度に擴大し、宇宙大に擴めたのが信仰だ。戀に上  
下美醜善惡の隔ては無い、宜いか、分かりましたか」

青彦「ハイ、根っから……能く分りました」

高姫「エー怪體な、齒切れのせぬ、古綿を噛む様な、齒脱けが蛸でもシヤブル様  
な返辭だなア、オホ、何は免もあれ、衣懸松の隠れ家へ行きませう」

と先に立つてスタスタとコンパスの廻轉を初める。青彦は不性不性に隨いて行く。

最前現はれた鬼雲彦の使の魔神、五人の男は先に立ち、數多の魔軍を引連れて、  
此方を指して進み来る。忽ち聞ゆる叫び聲、右か左か後か前か、何方ならむと窺  
へど、姿は見えず聲ばかり、足の下より響き来る。鬼雲彦は栗毛の馬にチリンチ  
リンのチヨコチヨコ走り、馬を止めて大音聲、

「ヤアヤア者共、此岩石を取除け。……此地底には宏大なる岩窟がある、ウラナイ  
教の宣傳使高姫、青彦の二人、數多の人々と共に隠れ忍ぶと見えたり。早く此岩  
石を取除けよ」

と嘯鳴り立つれば、數多の魔神は此巨岩に向つて、牡丹餅に蟻が集つた様に、四

方八方より武者振り付く。然れども幾千萬貫とも知れぬ、小山の如き岩石に對して、如何ともする事が出来ざりけり。鬼雲彦は氣を焦ち、自ら駒を飛び下りて、人の頭髪を以て緋へる太き毛綱を持出し來り、巖に引っかけ、一度に聲を揃へて、エーヤエーヤと曳きつける。曳けども、引けども、動かばこそ、蟻の飛脚が通る程も、岩は腰を上げぬ。中より聞ゆる數多の人聲刻々に迫り來る。斯かる所へ天地も揺るぐ許りの大聲を張上げ乍ら、宣傳歌を歌ひ、十曜の手旗を打振り打振り進み來る一男二女の宣傳使ありき。

龜彦「ヤアヤア鬼雲彦の一派の奴輩、最早汝が運の盡き、吾れこそは三五教の宣傳使、萬代祝ふ龜彦、暗夜を照らす英子姫、悦子姫の三人なるぞ。一言天地を震動し、一聲風雨雷霆を叱咤するてふ三五教獨特の清き言靈を食つて見よ」

と云ふより早く、天の數歌を謠ひ上げつつ、三人一度に右手を差出し食指の先より五色の靈光を發射して、一同にサーチライトの如く射照せば、流石の鬼雲彦も馬を乗り棄て、轉けつ、輾びつ一生懸命、大江山の本城指して雲を霞と逃げて行く。

龜彦「アハ、ハ、ハ、ハ」

二女「ホ、ハ、ハ、ハ」

龜彦「ヤア面白い面白い、彼れが鬼雲彦の大將、我言靈に畏縮して逃散つたる時

の可笑しさ、イヤもう話にも杭にも掛つたもので御座らぬ。是れと申すも全く、

神素盞鳴大神の尊き御守り、國武彦の御守護の力の致す所、先づ先づ此處で一服

仕り、天津祝詞を奏上し、神界に對し御禮を奏上し、ボツボツと参りませう。今

日は九月九日菊の紋日、是が非でも、今日の内に惡神を言向け和さねばなりません

まい。六日の菖蒲十日の菊となつては、最早手遅れ、後の祭り、ゆるゆると急ぎ

ませう」

茲に三人は巨岩の傍に端坐し、天津祝詞を奏上したりしが、祝詞の聲は九天に

響き、百千の天人天女下り來つて、音樂を奏づるかと思はる許りなり。祝詞の

聲は山又山、谷と谷との木靈に響き、惡魔の影は刻々と煙となつて消ゆるが如き

思に充たされける。

龜彦「サアサア御二方、ゆつくりと休息を致しませう」

英子姫ひでこひめ「大變たいへんに足あしも疲勞ひらうを感じかんました。休息きうそくも宜よろしからう」

悦子姫よしこひめ「ゆつくり英氣えいきを養やしなつて、又またもや華々はなばなしく言靈戰ことたませんを開始かいしませう」

茲ここに三人さんにんは手足てあしを延のばし、芝生しばふの上うへに遠慮會釋えんりよあしやくもなく、ゴロリと横よこたはりぬ。

後うしろの方ほうより震ふるひを帶おびた疝聲かんごゑを張はりあげ乍ながら、

「オーイオーイ」

と呼よばはりつつ、此方こなたを指さしてスタスタと息いきをはづませ遣やつて來くるのは男女だんぢよの二ふた

人り、

龜彦かめひこ「ヤア何なんだか氣分きぶんの悪わるい、亡國ばうこく的悲調てきひてうを帶おびた聲こゑがする。あの言靈ことたまより觀察くわんさつ

すれば、どうで碌ろくな神かみではあるまい。ウラル教けうてき的聲調せいてうを帶おびて居ゐる。……モシ英ひで

子姫こひめ様さま、一寸ちよつと起きて御覽ごらんなさいませ」

英子姫ひでこひめはムツクと立上たちあがり、後うしろを振返ふりかへり眺ながむれば、顔かほを眞白まつしろに塗ぬり立たて、天上てんじや

眉毛うまゆげの角隱つのかくし、焦茶色こげちやいろの着物きものを着流きながした男女だんぢよの二人ふたり、忽たちまち此場このばに現あらはれて、

女をんな「これはこれは旅たびの御方様おかたさま、斯様かやうな所ところで御休息ごきうそくなされては、嘸さぞやお背せなが痛いたう御ご

座ざいませう、少すこし道寄みちよりになります、妾わたしの宅うちへお越こし下くださいませすれば、澁茶しぶちやな

りと差上げませう。あの衣懸松の麓に出張致す者、どうぞ御遠慮なくお出で下  
いませ。あなたのお姿を眺むれば、どうやら三五教の宣傳使とお見受け申す。妾  
等も三五教には切つても切れぬ、淺からぬ因縁を持つて居る、實地誠の事は、常  
世姫の靈の憑つた此肉體、日の出神の生宮にお聞きなさらねば、後で後悔して、  
地團駄踏みても戻らぬ事が出来ます。あなたは三五教の教をお開きなさるのは、  
天下國家の爲、誠に結構で御座いまするが、併し乍ら三五教の教は國武彦命が表  
であつて、素盞鳴尊は緯役、邪さの道ばかり教へる。天の岩戸を閉める、惡の  
鑑で御座いまする。根本のトコトンの一厘の仕組は、此高姫が扇の要を握つて居  
りますれば、ママア一寸立寄つて下さい。本當の因縁聞かして上げませう。他  
人の苦勞で徳を取らうと致す素盞鳴尊の教は駄目ですよ。三五教の教は國武彦の  
神がお開き遊ばしたのだ。本當の事は系統に聞かねば分りませぬ。サアサア永  
暇は取りませぬ。どうぞお出で下さりませ」  
龜彦「私はお察しの通り三五教の宣傳使、併し乍ら、あなたとは反對で、國武彦  
の教は嫌です、緯役の素盞鳴尊の教が飯より好、お生憎様乍ら、どうしても、あ

なたと私は意向が合はぬ。眞つ平御免蒙りませう、ナア英子姫さま、悦子姫さま  
英子姫「ホ、ホ、ホ、龜彦さま、物は試した、一服がてらに聞いてやつたらどうで  
せう」

高姫眉を逆立て、口をへの字に結び、グツと睨み、暫くあつて齒の脱けた大口  
を開き、

「サア夫れだから、瑞の御靈の教は不可ぬと云ふのだよ。女の分際として、今の  
言葉遣ひは何の態、……ホンニホンニ立派な三五教ぢや、ホ、ホ、ホ。コレコレ青  
彦さま、お前もチツト言はぬかいな、唾か人形のように、知らぬ顔の半兵衛では、  
三五教崩壊の大望は………ドッコイ………三五教改良の大望は成就致しませぬ  
ぞや」

青彦「何れの方かは存じませぬが、吾々も元は素盞鳴尊の教を信じ、三五教に迷  
うて居ました。併し乍らどうしても變性女子の言行が腑に落ちぬので、五里霧中  
に彷徨ふ折から、變性男子のお肉體より現はれ給うた日の出神の生宮、誠生粹の  
日本魂の高姫さまのお話を聞いて、スッキリと改心致しました。あなたも今は變

性女子に一生懸命と見えませんが、マア一寸聞いて見なさい、如何な金太郎のあなたでも、譯を聞いたら變性女子に愛想が盡きて、嘔吐でも吐き掛けたい様になります。物は試しだ、一つ行きなさらしたら如何ですか」

龜彦「ソナラ一つ聞いてやらうか」

高姫「聽いて要りませぬ、誠の道を教へて、助けて上げようと、親切に言つて居るのに、聽いてやらうとは、何たる暴言ぞや。どうぞお聽かせ下され………と何故手を合はしてお頼みなさらぬか」

龜彦「アハ、お前の方から聽いて呉れいと頼みただやないか、夫れだから、研究の爲に聽いてやらうと言つたのが、何が誤りだ。エーもう煩雜くなつた。ご免蒙らうかい」

高姫「妾が是れと見込みた以上は、どうしても、斯うしても、ウラナイ教を、腹を破つてでも、叩き込まねば承知がならぬ、厭でも、應でも、改心させる。早く我を折りなされ、素直にするのが、各自のお得だ。あいた口が塞まらぬ、キリキリ舞を致さなならぬ様な事が出来て来ては可哀相だから、……サアサア早う、日の

出神でのかみの生宮いきみやの申まをす事ことを、耳みみを浚さらへて聽きいたが能よからう」

龜彦かめひこ「アハ、、、、、」

英子ひでこ姫ひめ「オホ、、、、」

悦子よしこ姫ひめ「ホ、、、、」

高姫たかひめ「何なんぢや、お前まへさま等は、此この日ひの出神でのかみの生宮いきみやを馬鹿ばかにするのかい」

龜彦かめひこ「イエイエ、どうしてどうして、あまり勿體もつたいなくて、見當けんたうが取とれなくなつて、

面白おもしろ笑わらひに笑わらひました。笑わらふ門かどには福ふく來きたる。副守ふくしゆごじん護神ごじんか、伏魔ふくまか知らぬが、米々こめこめ

と能よく囀さへつつて人ひとの虚きよに侵しん入にふせむとする、天晴あつぱれの手腕しゅわん、天てんの星ほしを「ガラツ」様やうな御ごせ

説教つけう、旅たびの憂うさを散さんずる爲ため聽きかして貰もらひませう」

高姫たかひめ「サアサア神政しんせい成就じやうじゆ、日本やまと魂たましひの根本こつぽんの一厘いちりんの仕組しくみを聽きかして上げよう………

エヘン……オホン……」

と女をんなに似合にあはぬ、肩かたを怒いからし、拳こぶしを握にぎり、大手おほてを振ふり、外輪そとわに歩あるいて、ツシンツ

シンと、衣懸きぬかけ松まつの麓ふもとを指さして跨またげて行く。三人さんにんは微笑びせうを泛うかべ乍ながら、青彦あをひこを後うしろに従したが

へ伴ついて行く。



衣懸松の麓に近寄見れば、些やかなる草屋根の破風口より黒煙、猛炎々と立ち昇る。高姫は此態を見てビツクリ仰天、

高姫「ヤア火事だ火事だ、サアサア皆さま、火を消して下さい」

龜彦「煙は猛炎々と立上れ共、家はヤツパリ燃えると見える。お前さまの腹の中も此通り紅蓮の舌を吐いて燃えて居るであらう、靈肉一致、本當に眼から火の出神の生宮だ、アハ、ハ、ハ、」

高姫「ソナ事は後で聞いたら宜しい。危急存亡の場合、早く助けて下さい、水を掛けなされ」

龜彦「ヤア大分前から問答もして来た。水掛論は良い加減に止めて貰はうかい、舌端火を吐いた報いに、家まで火を吐いた。人を煙に巻いた天罰で、家まで煙に巻かれよつた。天罰と云ふものは恐ろしいものだ。マアゆつくり高姫さまの活動振を見せて貰ひませう。雪隠小屋の様な家が焼けた所で、別に騒ぐ必要もなからう。人の飛出した空の家が焼けるのだ。高姫さまは雪隠の火事で糞【やけ】になつて居らうが、此方は高見の見物で、對岸の火災視するとは此事だ。一切の執着

心を取る爲には、火の洗禮が一番だ、是れで火の出神の神徳が完全に發揮されたのだ。ナア高姫さま、あなたの……此れで御守護神が證明されると云ふものだ。お喜びなさい」

高姫「エー喧しいワイ、何どここの騒ぎぢやない、グツグツして居ると、皆焼けて仕舞わア、中へ這入つて、爛徳利なと引つ張り出して呉れい。コレコレ青彦、何して居る、火事と云ふのは家が焼けるのだ、水が流れるのは川だ、目は鼻の上にある」

と狼狽へ騒いで半氣違になり、摺鉢抱へて右往左往に狂ひ廻る可笑しさ。瞬く間に火は棟を貫き、バサリと焼け落ちた。高姫、青彦は着衣の袖を猛火に嘗められ、頭髪をチリチリと熏べ乍ら、一生懸命に走りゆく。火は風に煽られて益々燃え擴がる。警鐘亂打の聲、速大鼓の音頻りに聞え來る、二人は進退谷まり、丸木橋の上より青淵目蒐けて、井戸に西瓜を投げた様に、ドブンと落込みしが、此音に驚いて目を覺せば、宮垣内の賤の伏屋に、王仁の身は横たはり居たり。堅法華のお睦婆アが、豆太鼓を叩き鐘を鳴らして、法華經のお題目を唱へる音かしまし。

(大正一一・四・一四 舊三・一八 松村眞澄録)

第九章 法螺の貝〔五九九〕

三あななひけう五せん教でんしのし宣よろづよ傳いは使は 萬かめひこ代が祝がふかめひこ龜彦彦が

言ことたま靈いのいき息ににあふられて 雲くもをかすみ霞と逃にげち散りし

鬼おにくもひこ雲い彦いのちはから命が辛ら々ほんじやう本へ城へ 韋あだてん駄ばし天に走りにか驅もけ戻り

赤あかしろあを白おにども青をのを鬼おにども共を 一ひとま間に集あつめておにひこ鬼彦彦や

鬼おにとら虎いしくま、石くまたか熊が、熊くまたか鷹が 行ゆくへ方を探さがすだいへつぎやう大評定定

バなラなモなンな教けうのさいだん祭壇をを 半なかばまつ祭つつた其その儘ままに

厭いやなたよ便きくづきりのをの菊きくづき月のの 苦くるしみも藻が搔く九くぐわつ月この九この日か

何なにをゆふべ夕ののすべもなく 半はん圓えんのつき月は御み空そらにかが輝けど

心の空は掻き曇る

鬼に責められ村雲に

包まれきつた鬼雲が

心の中ぞ哀れなる。

鬼雲彦は奥の一閒を開放し、上段に胡坐をかき、象牙のやうな角をニユウと立て、鰐口を開いて一同に向ひ、

「今日は實に目出度き菊見の宴、バラモン教が祭典日に犠牲を奉らむと、神饌の蒐集に遣はしたる鬼彦以下は何處へ姿を隠せしぞ。今に及びて歸り來らざるは何か非常事の出来せしならむ。斯くなる上は油斷は大敵なるぞ、一々武装を整へ如何なる敵の來るとも怯めず屈せず克く戦ひ克く防ぎ、敵を千里に追ひ散らし、バラモン教が神力を天下に現はせよ」

と下知したるに、満座の中より現はれ出でたる一寸坊子、福助のやうな不恰好な頭をぐらつかせながら、危なき足許ひよろひよると鬼雲彦が前に現はれ來り、一寸坊子「申上げます、鬼彦其他の勇將は心機一轉して三五教に寢返りを打ち、綾の高天に馳上り、日ならず大軍を率ゐて當山を十重二十重に取り巻き、鬼雲彦

の大將を初め一人も残さず木端微塵に攻めつけ、大江山を三五教の牙城とせむとの敵の計略、一日も早くこの場を立ち去るか、但しは味方の全軍を率ゐて聖地向つて進軍するか、時遅れては一大事、先んずれば人を制す、一刻も早く進退を定めさせられよ」

と述べ立つるにぞ、鬼雲彦は両手を組み青息吐息の連續的發射に餘念なかりき。時しもあれや、表門にガヤガヤとさざめく人聲、鬼雲彦は自ら立つて表門に立ち現はれ、屹と目をすゑ眺むれば、こは抑如何に、鬼彦、鬼虎、熊鷹、石熊の四天王は數多の從卒に網代の駕籠を昇つがせながら意氣揚々と歸り來る。鬼雲彦はハツと胸を撫で下ろし、

「ヤア天晴れ天晴れ、汝は鬼彦、鬼虎、熊鷹、石熊、よくも無事で歸りしぞ。獲物は何うぢや」

鬼彦は肩を怒らし、鼻を蠢かしながら、  
「鬼雲彦の御大將に申上げる、抑々吾等從卒を引率し、由良の港の秋山彦が館に立ち向ひ、さしもに固き大門も右手を延ばしてウンと一聲向うへ押せばガラガラ

ガラ、力餘つて鬼彦は押した途端に門の中へ四五間ばかりドツと飛び込みし時の  
危さ否面白さ、續いて入り来る數多の從卒、四方八方に手分を致して玄關、納戸、  
水門、物置、柴部屋より鬨を作つて亂れ入る、さしもに豪傑無雙の素盞鳴尊も國  
武彦其他從ふ奴輩も肝を潰して右往左往に逃げ惑うと見えしが忽ち勢力を盛返し、  
千引の岩を手玉に取つて大地も割れむ許りドスン、ドスンと岩石の雨、忽ち秋山  
彦の門前は直徑一里もあらむと云ふ岩の山を築いたり、されども少しも怯まぬ味  
方の勇士鬼彦は眞先に立ち、さしもに固き岩山を片足揚げてポンと蹴ればガラガ  
ラガラ、又もや左の足を揚げてポンと蹴つた途端に秋山彦の館は中天にクルクル  
と舞ひ上る。吾は之にも飽き足らず、數萬貫の大岩石を手毬の如くヒン握り、海  
原目蒐けて雨や霰と投げつくれば、さしもに深き千尋の海も、ドボンドボンと音  
立てて水量まさり、遂には大なる一つ島が現はれたり。ヤア開闢以來斯る勇士が  
天にも地にもあるものか、斯く迄強き豪傑が、何として鬼雲彦如き大將に盲従す  
るや、吾と吾身を顧みればいやもう馬鹿らしくなりにけり。さはさりながら今日  
はバラモン教の祭典日、如何に豪傑なればとて神様には叶はぬ、一度禮を申上げ

むと唯今立ち歸りし處で御座る

熊鷹は又もや大手を振り大地に四股踏み鳴らしながら、

某は鬼彦の絶對無限の神力に驚きもせず、神素盞鳴尊と渡り合ひ、千引の岩を

もつて互に挑み戦へば、尊は吾の猛威に辟易し、二三歩よるめきわたる隙を窺ひ、

飛鳥の如くつけ入つて有無を云はさず鐵より固き兩腕を後に廻し踏縛り、網代の

駕籠に押し込みて番卒に固く守護させ置き、強力無雙の國武彦の所在は何處と尋

ねる中、現はれ出でたる大の男、之こそ確に國武彦、熊鷹が力を見せて呉れむと

云ふより早く拳固を固めて、縦横無盡に打ち振り打ち振り、國武彦の横面目蒐け

てポカんと一つ擲るや否や、首は中天に舞ひ上り、日本海の彼方にザンブと許り

音を立てて水煙、姿も水となりにけり

鬼虎は又もや四股踏み鳴らし、

某は秋山彦の館に向ひ、様子如何にと眺むれば、四天王の一人鬼彦竝に熊鷹の

兩人は神素盞鳴の大神や、國武彦を向うに廻し、獅子奮迅の勢凄じく、丁々發止

と祕術を盡す上段下段、下を拂へば中天に飛び上り、上を拂へば根底の國に身を

潛め、天地四方を自由自在に飛び廻る、電光石火の大活動目覺しかりける次第なり。吾も四天王の其一人、目に物見せむと云ふより早く、臀部を捲つてポンと一發發射すれば雲煙濛々として四邊を包み、黑白も分らぬ眞の闇、自繩自縛、これや耐らぬと臍の下より息を固めフツと許り吹き放てば、こは抑如何に、今迄此處に華々しく戦ひたる敵も味方も影もなく、大江山の此方を指して駕籠も人数も何も彼も宙を驅けつて散つて行く、あゝ有難や有難や、バラモン教の神力は斯迄尊きものなるか、此勢をばいかして大江山の本城に立ち歸り、鬼雲彦の大將に尻を捲つて屁を放れば、館諸共中天に舞ひ上り眞逆様に和田の原、忽ち船と早變り、轉宅などの面倒は要らぬ、サアサア一つ捲つて見ようか、鬼雲彦の御大將□と肩を怒らし雄猛びをする。四天王の一人と聞えたる石熊は、又もや腕を振り胸をドンドンと打ちながら、

「某は當城より御大將の命令を受け、數多の木端武者を引き連れ、秋山彦の館に至つて見れば、今三人が申上げたる通りの亂癡氣騷ぎの眞最中、人の手柄の後追ふも面白くなしと股を擴げて朝鮮國へ一足飛に飛び行けば、神素盞鳴の大神の隠





鬼雲彦は得意満面に溢れ、網代駕籠の戸を荒々しく引き開け眺むれば、こは抑  
如何に、最愛の妻の鬼雲姫は五體ズタズタに斬り放たれ血に塗れ、眞裸の儘締ぎ  
れ居る。又もや四つの駕籠より現はれ出でたる血塗るの男女、見れば最愛の吾倅  
及び娘なり。息子娘は數十箇所の傷を身に負ひながら、蟲の泣くやうな聲を絞り、  
父上様残念で御座います」  
と一言残しその場にバタリと倒れ全身冷えわたり、氷の如くなりける。月は皎々  
と輝き初め四邊は晝の如くに明るく、寢惚け鳥は中天に飛び狂ひ阿呆々と鳴き  
立つる。ア、此結果は如何に。

(大正一一・四・一四 舊三・一八 加藤明子録)

## 第一〇章

### 白狐の出現〔六〇〇〕

八洲の國を驅け巡り　この世を曇らす自在天  
自由自在の活動を　續けて茲に婆羅門の  
大棟梁と仰がれし　鬼雲彦の猛將も、

最愛の妻の非業の最後に又もや續いて子女の淺ましき此姿を見て胸も張り裂く  
許り、魂消え、魄亡びる如き心地し乍らドツカと其場に打倒れ無念の涙にくれ居  
たり。鬼彦は肩を揺り乍ら大口開けて高笑ひ、

「アハ、々、々、吾こそは鬼彦とは詐り誠は大江山に現はれし白狐の鬼武彦、汝惡  
神の計略を根底より覆へさむと千變萬化の活動を續け、神素盞鳴の大神の大命を  
奉じ、汝が一類を征服に向うたり、汝が力と恃む鬼彦は魔窟ヶ原の岩窟に匿ひあ  
れば汝が神力を以て索め出せよ、さり乍ら彼は最早汝の意志に従ふ者に非ず、立  
派なる三五教の信者となりて居るぞ、汝が妻と見えしは汝が眼の誤り、吾眷族の  
名もなき白狐の變化」

と言葉終らずに鬼雲姫は忽ち巨大なる白狐となつてノソリノソリと這ひ始め、鬼

雲彦くもひこに向つて眼めを光ひからせ牙きばを剥むき飛とびかからむとする勢いきほひを示しめし居ゐる。鬼虎おにとらは又またもや威ゐ丈だけ高だかに胸むねを打うち乍ながら大口おほぐち開あけて高笑たかわらひ、

「アハ、ハ、ハ、吾われこそは大江山たいかうざんに現あらはれて四方よもの魔神まがみを征せい服ふくし言こと向むけ和やはす神かみの使つかひ、

旭あさひの白狐びやくこが化身けしんなるぞ、汝なんぢが力ちからと恃たのむ四天王してんわうの隨ずい一いつと聞きえたる鬼虎おにとらは前ぜん非びを悔くい

今は三五教あななひけうの信者しんじやとなれり、魔窟まくつヶ原がはらの岩窟がんくつに匿かくまれば未練みれんあらば汝なんぢ自由じゆうに岩いは

戸とを開ひらいて面會めんくわいせよ、汝なんぢが倅せがれと見みえたるは、之これも白狐びやくこの化身けしんなり、汝なんぢが妻さい子は手て

段てを以もつて、或處あるところに匿かくまひあれば改心かいしん次第しだいにて親おや子こ夫婦ふうふの對面たいめんを許ゆるし呉くれむ」

と言葉終ことばをはらぬに又またもや一ひとつの網代籠あじろかごよりソノソ這はひ出でた巨大きよだいの白狐びやくこ、以前いぜんの如ごと

く鬼雲彦おにくもひこが身邊しんべんに目めを睜いからし牙きばを剥むきつつ進すすみ寄よる。熊鷹くまたかは又またもや立たち上あり、

「吾われこそは神素かむす蓋さのを大神おほかみの立たてさせ給たまふ三五あななひの教をしへに仕つかふる白狐びやくこの高倉たかくら、熊鷹くまたかと

見みえしは此方このほうが化身けしん」

と言葉終ことばをはらぬに又またもや這はひ出でた巨大きよだいの白狐びやくこ、同おなじく鬼雲彦おにくもひこに向つて襲おそひ行ゆく。石いし

熊くまは又またもや立たち上あり、

「吾われこそは月日明神つきひみやうじんと名なを頂いたきし常夜とこよの國くにの大江山たいかうざんに現あらはれたる白狐びやくこなるぞ、汝なんぢ

は今より前非を悔い婆羅門教を振り棄てて三五の神の教に信従するか、違背に及ばば大江の山は木端微塵に踏み碎き、草の片葉に至る迄焼き亡ぼさむ、返答如何に

と詰めかける。又もや一つの駕籠よりは巨大の白狐現はれて鬼雲彦を前後左右より取り巻きコンコンと啼き立て乍ら改心を迫る。鬼雲彦は忽ち精神錯亂して大刀を引き抜き前後左右に荒れ狂ひ、館を後に木の茂みを指して姿を隠したり。數多の從卒共は鬼雲彦が後を追ひ、山を越え谷を涉り鬼ヶ城山の方面さして力限りに遁走したりける。

鬼ヶ城山の方面より龜彦を先登に英子姫、悦子姫は宣傳歌を謠ひ乍ら此方に向つて前進し來る。流石の鬼雲彦も前後に敵を受け死物狂の勇氣を現はし、長刀を引き抜いて龜彦目蒐けて斬つて掛るを、心得たりと龜彦は右に左に身を躲し飛鳥の如く挑み戦へば鬼雲彦は踵を返し、もと來し道を一目散に歸り行く。數多の從卒は吾後れじと三十六計の奥の手を出して散り散りバラバラ、足に任せて逃げて行く。何時の間にやら鬼雲彦は又もや本城の門前に歸り來たりぬ。門内には鬼雲

姫が叫び聲、

「鬼雲彦の夫はあらざるか、虎彦、龜彦、山姫、河姫は何所ぞ」

と身を藻掻き聲を限りに叫び居る。鬼雲彦は息も絶え絶え門戸を敲き、

「ヤアさう言ふ聲は女房なるか、俺は無事に此處まで歸つて來たぞよ。鬼武彦は

如何なつた、白狐の奴等は何處へ行つた、返答せよ」

と唝鳴り立てる。鬼雲姫は門内より、

「ア、戀しき吾夫、能くも無事に歸らせ給ひしぞ」

と中より門を颯と押し開き鬼雲彦が手を執つて奥へ奥へと進み行く。餘りの嬉し

さに足許見えず鬼雲姫は夫の手を携へたる儘、かねて穿ち置いたる城内の井戸に

夫婦共々にドスンと許り陥みぬ。大江山の本城は敵も味方も影を隠し幽かに鼠の

泣き聲のみ聞え居る。門前には大江山の山嵐、岩も飛べよと許り吹き荒みある。

月は早西に没し黒雲四邊を包み咫尺を辨ぜず、暗黒の帳は下されたり。鬼雲彦夫

婦は千仞の井戸の底に數多の蝮と諸共に世間知らずの樂隱居、否蝮地獄の苦き生

活哀れなりける次第なり。

かかる處へ後追ひ來たる龜彦はツカツカと門内に進み入り城内隈なく探せども  
人影さへも見えざれば如何せしやと三人は四邊に心を配りつつ窺ふ折しも井戸の  
底より怪しき叫び聲、はて訝かしやと手燭を點して覗へば紛ふ方なき鬼雲彦が夫  
婦の者、九死一生の此苦みを見るに見かね館の井桁に太繩を打ち掛けツルツルと  
井中に釣り下せば、鬼雲彦夫婦は無我夢中になつて手早く此綱に跳び付くや否や  
綱はツルツルと何物にか引き上げられて再び舊の處へ歸り行きぬ。暗を通して聞  
ゆる三五教の宣傳歌、鬼雲彦夫婦は叶はぬ時の神頼み、婆羅門教の神歌を唱へ聲  
を限りに哀願する。一方鬼武彦は先に据ゑ置きたる千引の岩を取り除き岩蓋をサ  
ツと開けば待ちかねたる如く現はれ來る鬼彦、鬼虎、熊鷹、石熊其他數多の歸順  
せし人々は、枯木に花の咲きしが如く喜び勇み、大江山の本城目蒐けて歸り來た  
りぬ。

東の空はホソノリと白み初め、明けの鵲がカアカアと啼き初めたり。漸く山上  
の鬼雲彦が門前に立ち歸れば龜彦、英子姫、悦子姫の三人に取り巻かれ、鬼雲彦  
夫婦は何事か説諭を受けつつありぬ。鬼彦初め一同は龜彦一行に一禮し天津祝詞

を奏上し三五教の宣傳歌を聲を揃へて宣りつれば、鬼雲彦夫婦は居たたまらず館を捨てて一目散に雲を霞と驅け出し伊吹山の方面を目蒐けて天の岩船に手早く打乗り夫婦諸共中空を翔り行く。

龜彦、英子姫、悦子姫は、鬼武彦の神を言靈を以てさし招けば忽ち晝の天を掠

め白煙となりて南方より現はれ來り忽ち三人の前に英姿を現はしたり。

龜彦「ヤア鬼武彦殿、貴下の活動天晴れ天晴れ、吾は之より聖地向つて再び進

まむ。貴下は此處に留まり給ひて、旭、高倉、月日の諸使と共に惡魔征服の守護

をなし給へ」

鬼武彦「委細承知仕る、當山は天下の邪神集まり來る靈界の四辻なれば國武彦の

大神、以前の如く國治立の大神と現はれ給ひ、神素盞鳴大神、瑞の御靈と現はれ

て、神政成就の曉まで代る代る當山を守護し奉らむ、吾々此處にあらむ限りは豊

葦原の中津國なる自轉倒島は先づ先づ安心なされ度し、貴下は素盞鳴の大神様の

御後に従ひ天下に蟠る八岐の大蛇を言向けて神政復古の神業に奉仕されよ、萬一

御身の上に危急の事あらば土地の遠近を問はず、鬼武彦、旭、高倉、月日の名を



呼ばせ給へば、時刻を移さず出張應援仕らむ  
龜彦、英子姫、悦子姫は一度に満足の意を表し鬼武彦の千變萬化の神業を激賞  
し此處に目出度く袂を分ち東を指して進み行く。  
(大正一一・四・一四 舊三・一八 北村隆光録)

## 第二篇 深遠微妙

### 第一章 寶庫の鍵〔六〇一〕

神素蓋鳴の瑞靈

國武彦の嚴靈

あななひけつ 三五教の宣傳使 名さへ目出度き龜彦が

やみ 闇を照して英子姫 悦子の姫と諸共に

おにたけひこ 鬼武彦の守護りにて さしもに猛き曲津神

おにくもひこ 鬼雲彦の一族を 言向け和し服従はぬ

あまた 數多の鬼は四方八方に 雲を霞と逃げ散りて

おにくもひこ 鬼雲彦は雲に乗り 伊吹の山の方面に

に 逃げ失せたりと取り取りの 高き噂を菊月の

そら 空を照して昇り来る 三五の月の夕間暮

あきやまひこ 秋山彦の門前に 現はれ出でたる二人の男女

ふくめんづきん 覆面頭巾の扮装に 四邊を憚り聲低に

そつと門戸を叩きつつ 頼も頼もと訪へば

ハツと答へて出で来る 加米公銀公の兩人は

と 戸の隙間より垣間見て 二人の姿を怪しみつ

なにびと 何人なるかと訊ぬれば 聲淑やかに答へらく

我われは日ひの出で大神おほかみぞ  
 行ゆき成なり彦ひこの神かみの宮みや  
 早はやく開あけさせ給たまへかし  
 秋あき山やま彦ひこの神かみ司つかさに  
 申まを上しあぐべき仔しさい細さいあり  
 早はやく早はやくと急せき立たてて  
 何なんとはなしに落おち付つかぬ  
 怪あやしき風ふ情ぜいに加か米め公こうは  
 口くちを尖とがらし呶ど鳴なり立たて  
 日ひの出で神かみとは心こころ得えぬ  
 三さん五ごの月つきの皎かう々かうと  
 上のほり初そめたる夕ゆふ閒ま暮くれ  
 門もん戸こを叩たたき訪おとふは  
 日ひ暮ぐれの神かみに非あらざるか  
 行ゆき成なり彦ひことは嘘うその皮かは  
 宿やどを失うしひ行ゆき詰つり彦ひこの  
 醜しこの命みことの曲まが神かみか  
 門もんは締しめても秋あき山やま彦ひこの  
 神かみの司つかさの御おん館やかた  
 汝なんぢ等ら二ふ人たりの胸むねの内うち  
 未いまだ開ひらかぬ曲まが津つ見みの  
 醜しこの容いれ「もん」碎くだけ門もん  
 摺すつた門もんだと申まをさず  
 早はやく歸かへるがよからうぞ  
 日ひ暮ぐれに門もんを叩たたく奴やつ  
 碌ろくな奴やつではあるまいぞ  
 用よう事じがあれば明あ日す来きたれ  
 此この大だい門もんは吾われ々われが

夜晝寝ずに守る門　　大門開きは日の出時  
其日暮しの門番も　　日暮の門は開かない  
歸れ歸れと急き立つる。

高姫　「十里四方は宮の内、大門開きの日の出神、一時も早く秋山彦の御大將に、  
日の出神行成彦の神の御入來と申し傳へよ、門番の分際として門の開閉を拒む事  
はなるまい、愚圖々々致して、後で後悔するな、今宵に迫る當家の大難、救ひの  
神と現はれた日の出神を何と心得る」  
と慄ひを帯びた癩聲を張上げ、形相凄じく突立ち居る。

加米公　「オイ銀公、一寸覗いて見よ、顔に白粉をべたりとつけて何だか嫌らしい  
女が一人、青瓢箪のやうな面をした男が一人だ。何でも大變な事がお館にあるの  
で知らしに來たとか、此門開けねば明日になつて後悔をするとか云つて居る、ど  
うしたら好からうかな」  
銀公　「何と云うても御主人様の云ひつけ、暮六つ過ぎたなら、何人が來ても開け

る事はならぬとの嚴命だ。ほつとけほつとけ」

加米公「それでも普通の人間ではない、神だとか云つて居るやうだ」

銀公「神にも種々ある、人を喰ふ狼もあれば曲津神もあり、鼻紙、塵紙、尻拭き

紙もあるワ、よう「かみ」分けて判断をせないと後になつて齒「がみ」をなして

悔しがらねばならぬ事が出来るぞ、どれどれ一つ俺が覗いて様子を調べてやら

う」

銀公は門の隙間より片目を塞ぎ、片目を當てて覗きながら、

銀公「ハ、ハ、ハ、ハ、彼奴ア神に間違ひないが、薑だ、咳嗽や痰の薬なら持つてこ

いだ。よう何だか耳に口を當てて密々話をやつて居よるワ、あの顔色の青い男は

あの女のハズバンドだな、氣樂な奴もあればあるものだ、人の門前に立つて意茶

ついて居やがる。お月さまに恥かしくは無いだらうかなア」

青彦「モシモシ、御館に對して今夜のうちに大事が突發致します、一寸先は闇の夜

だ、吾々は天下を助ける宣傳使だ、どうぞ開けて下さい」

銀公「ナ、何を吐すのだ、今夜のやうな明月に、一寸先は闇の夜だとはそれや

貴様の心の中の事だらう、用事があらば明日来い。假令此館に如何なる變事が突發せうとも、貴様の容喙する所ぢやない、トツトと歸れ。

高姫「左様では御座いませうが日の出神様より強つての御神勅、何は兔もあれ秋

山彦の御主人に此由お傳へ下さいませ。

銀公「ア、仕方がないな、兔も角御主人様に申し上げて来るから、それまで、貴

様は此處に待つてけつかりませ、オイオイ加米公、俺が出て来るまで邪が非でも

開けてはならぬぞ。

と言ひ捨て奥を目蒐けて驅け出したり。

青彦「もしもし門番さま、早く開けないか、愚圖々々して居るとお前の身の上が

危ないぞ。根の國底の國へ眞逆様に落されると可憐さうだから氣をつけてやり度

いと神様の御神勅で出て来たのだ。

加米公「神勅でも何でも主人の許しなきまでは開けられぬ、根の國底の國と云ふ

地獄に落ちるか知らぬが、地獄の沙汰も金次第だ、もし此門あけて地獄にでも落

ちては困るから、お前さまも何々を出しなさい、さうしたら開けて上げやう、金

さへあれば地獄の釜の蓋でも開くと云ふ事、鬼に酒代をやつて地獄を逃れる分別をさせなくてはならぬからサア出したり出したり、惚薬外にないかと蝶螭に問へば指を輪にして見せたげな、蝶螭でさへもそれだもの、同じ水に住む加米公に圓いものを出しなさい、そつと開けてやるから」

高姫「サアこれだから瑞の靈の教は惡のやり方だと云ふのだよ、門番までが金取主義ぢや。これこれ青彦さま、この一事を見ても如何に三五教が現金主義、利己主義、吾よしの遣方と云ふ事が分るぢやないか。お前さまもよい加減に目を醒ま

さぬと瑞の靈に尻の毛が一本も無いところ迄抜かれて仕舞ひますぞゑ」

青彦「さうですな、隅から隅まで抜け目のないお前さまと思つて居たのに、三五教はも一つ哥兄ですなア」

加米公「エ、愚圖々々と出し惜みをする奴だなア、何處の宣傳使か知らぬが、三五教が錢拂ひがよい、吾々のやうな門番のやくざものでも、此方から何も云はぬに小判の二枚や三枚はそつと懐中に入れて呉れる、此奴はウラナイ教と見えて此方から露骨に請求しても出しやがらぬ吝嗇坊だ、それだから三五教の信者を自

分が苦勞もせず、掻き落しに廻つてウライ教に入れる事許り考へて居やがるのだ。オイオイ二人の宣傳使、忘れ「もの」はないか、何かお前は忘れて居るだらう、渡し船に乗つても「はし」錢が要るぢやないか、門を潜るのに何々で潜ると云ふ法があるか、エ、氣の利かぬ宣傳使ぢやな、銀公の奴が居らぬ間に一つ權兵衛の積りで居たのに、先方が氣の利かぬ「ドン」ベイだから成功覺束なしと云ふものだ」

斯かる所へ銀公は走り來り、

「ヤア加米公、御主人の申つけど、直に門を開いてお通し申せ」

「ア、さうか」

と門を外し左右に開いて聲を變へ、

加米「ア、これはこれは立派な立派な御神徳のありさうな二人の宣傳使様、私は奥に急用あつて居りませなかつたものだから家來の奴、摺つた門だと理屈を申し、吝嗇な事を申してお金を強請つたさうで御座います、決して、當家は三五教の信者ですから、上から下まで清淨潔白お金などは手に觸れるのも汚がつて居るもの



ばかりです、此頃傭うた門番が一人御座いまして、其奴が今迄バラモン教の信者であつたものですから、二つ目にはお金の事を申しまして恥かしく御座います、決して私が申たのでは御座いませぬ、悪しからず、御主人にお會ひになつても加米公が云つたのではないと辨解して置いて下さい、兔角誤解の多い世の中、清淨潔白の加米公迄が、門番の傍杖を喰つて痛くない腹を探られるのも餘り心持の好い門ぢや御座いませぬ」

と初めの作り聲をいつしか忘れて元の地聲になつて仕舞ひける。

高姫「ホ、それでも貴方のお聲が好く似てますナア、初の方は違ふ方かと思ひましたが、矢張最前のお聲の持主、ようマアお化け遊ばすなア、大化物の瑞靈の乾兒だけあつて化ける事は奇妙なものだ。ホ、、、、、」

加米公は又もや作り聲になつて、

「イエイエ決して決して、初の内は私の地聲で御座いました、中途に新米門番の生靈が憑きやがつて云つたのです、夫れで新米門番其儘の聲が出ました。ア

ハ、、、、」

と笑ひに紛らさうとする。

銀公「アハ、ハ、ハ、地獄の沙汰も加米次第だな」

加米公「地獄の沙汰も加米と銀公とで埒が明く世の中だ。アハ、ハ、ハ、サアサア

お二人のお方、トツトとお入り遊ばせ」

二人は定つた事だと云はぬ許りに大手を振り大股に意氣揚々として、のそりの

そりとのさばり行く。二人は玄關に又ツと立つて家の様子を覗き込むやうな、覗

かぬやうな體に聞き耳立てて居る。玄關の障子をさつと開いて現はれ出でたる一

人の男、

「オー貴方は高姫さま、青彦さま、此間は豪いお氣の毒な御災難が御座いまして、

其後一度お見舞に參らうと思つては居ませぬが、随分お火傷なさいましたさうで、

水責、火責、煙責、眼から火の出の神様、青息吐息の顔眞青な青彦さま、ようマ

ア態々、お尋ね下さりやがった。ママア御遠慮がありますれば、御用事無く、

【とつと】と入りやがるな」

と云ふかと思ればプスリと姿は消えにける。二人は玄關に立ちながら、

高姫 「これだから化物教だと云ふのだよ、青彦さま、これだから私に随いて實地

教育を受けねば駄目だと云ふのだよ、日の出神の眼力は違やしよまいがな」

青彦 「本當にさうです、いやもう恐れ入谷の鬼子母神ですワ」

高姫 「ソナ剽輕な事を云うてはなりません。お前も何うやらすると瑞の靈の惡

靈に憑依されたと見える、些と確りなさらぬかい」

此時奥の方より紅葉姫は淑やかに此場に現はれ、

「これはこれはお二人のお方、夜中にお越し下さいましたのは何か變はつた事が

在すのでは御座いませぬか、兔も角お上り下さいまして御休息の上、御用の趣仰

せ聞け下さいませ」

高姫 「左様ならば遠慮なく御免蒙ります、サア青彦、貴方も随いて來なさい、隨

分氣をつけて油斷せぬやう眼を八方に配るのだよ」

紅葉姫 「私方は三五教の信者、善の道を遵奉するもの、御心配下さるな、滅多に

陥穽もありませぬ、又地の底に魔窟ヶ原のやうな隠れ場所も造つては御座いませ

ぬ、マア悠くりと、安心して胴を据ゑて下さいませ」

高姫「此間は御主人様はお氣の毒な事で御座いましたなア、何うぞ靈様なりと拜  
まして下さい、三五教を信仰なさつても矢張惡魔には叶はぬと見えます、大江山  
の鬼雲彦の部下に捕へられ鬪殺しにお遭ひなさつたさうだが、私が聞いても涙が  
零れる、況して女房の貴女、御愁傷の程お察し申します」  
と、そつと目に唾をつけ、オンオンと空泣きに泣き立てる。青彦はポカンとして  
紅葉姫の顔を見詰めて居る。高姫は青彦の裾をそつと引き、泣き眞似をせよと合  
圖をする、青彦は些しも合點行かず、  
「工何ですか、私の着物に何ぞ着いて居りますか、甚う引つ張りなさいますな」  
紅葉姫「オホ、それは御親切有難う御座います、私の主人は無事歸つて参  
りました、これも全く三五教の御神徳で御座います、餘り三五教の勢力が強い  
で嫉み猜みから、ウラナイ教とやらが出來て、其處ら中を掻き廻して歩くと云ふ  
事で御座います、よう人の眞似の流行る世の中、人が成功したからと云うて自  
が其眞似をして向ふを張らうと思つても、身魂の因縁性來で到底思惑は立つもの  
ぢやありません、貴女はウラナイ教の宣傳使とお見受致しますが、一體ウラナイ

教はドンナ教で御座いますか

高姫 「三五教はあれは元は好かつたが、今は薩張り駄目です、三五教の誠生粹の根本は、日の出神の生宮、この高姫が何も彼もこの世の開けた根本の初りから、萬劫末代の世の事、何一つ知らぬと云ふものはないウラナイ教です、それだから誰にも聞かずにお家の御主人秋山彦様の御遭難もチャンと分つて居るのです、ナ」とウラナイ教は立派なものでせうがナ

紅葉姫 「死んでも居ない吾夫秋山彦を死人扱ひなさるのは、如何にも好く分つた偉い神様ですなア、秋山彦はピンピンして居りますよ

高姫 「それは貴女身魂の因縁をご存じないからソナナ理屈を仰有るが、三五教で一旦大江山に囚はれ死んだ處を、此高姫が日の出神の水火を遠隔の地よりかけて、神靈の注射をやつたから生返つたのだよ、サアこれからは心を改めてウラナイ教に改宗なされ

紅葉姫 「朝日は照るとも曇るとも、月は盈つとも虧くるとも、假令大地は沈むとも、三五教は世を救ふ、誠の神の御教、ウラナイ教はどうしても蟲が好きませぬ、

合縁奇縁蓼喰ふ蟲も好き好き、えぐい煙草の葉にも蟲がつく、改宗するのは見合  
しませう、いや絶対に嫌ですワ、ホ、ホ、ホ、ホ、

奥の方より秋山彦の聲がして、

紅葉姫紅葉姫

と聞え來る。

「ハイ」と答へて紅葉姫は二人に軽く會釋して奥の間さして進み入る。

二人は紅葉姫の後姿を目送しながら眼を轉じて額を見れば、額の裏に鍵の端が

現はれて居る。高姫は立上り、手に取り見れば冠島沓島の寶庫の鍵と記されてあ

る。高姫はニヤリと笑ひ、これさへあれば大願成就と手早く懷中に捻込み素知ら

ぬ顔、青彦はがたがた慄ひ出し、

青彦「もしもし高姫さま、ソ、それは何と云ふ事をなされます、當家の什物を貴

女の懷中にお入れ遊ばすとは合點が参りませぬ」

高姫「シート、エ、融通の利かぬ男だな、日の出神の御命令だ、此家に冠島沓島

の鍵を持つて居る事は天眼通でチャンと睨みてある、之をかぎ出す爲にやつて來

たのだよ、サアサア今いまの中うちに夜よに紛まぎれて此處ここを立たち去さり船ふねを拵こしらへ冠島かむりじまに渡わたりませ  
うう

と先さきに立たつて行ゆかむとする。

青彦あをひこ「一應いちおう當家たうけの方かた々に御挨拶ごあいさつを申ま上げねばななりますまい、何なんだか心懸こころがりでなり

ませぬわいい

高姫たかひめ「エ、合點がてんの悪わるい、愚圖ぐづぐづ々々して居をる時ときぢやない、時期切迫じきせつぱく間髪かんぱつを容いれずと

云いふこの場合ばあひだ。大功たいこうは細瑾さいきんを顧かへりみず細君さいくんは夫をととを顧かへりみず、神國成就しんこくじやうじゆの爲ために沐雨櫛もくうしつぷ

風う、獅子奮迅ししふんじんの大活動だいくわつどう早く御座ござれい

と裏門うらもんよりそつと此家このやを逃にげしたり。秋山彦邸内あきやまひこていの者ものは一人ひとりとして二人ふたりの者ものの逃たう

走そつせし事ことに氣きが付つかざりける。二人ふたりは由良ゆらの港みなとに驅かけつけ一艘いっそうの小船こぶねをまるまるし、

青彦あをひこは艚ろを操あやつり、高姫たかひめは權かいを漕こぎ一生懸命いっしやうけんめい月照つきてる海原うなばらを漕こぎ出だしたりける。

(大正一一・四・一五 舊三・一九 加藤明子録)

第一二章 搜索隊「六〇二」

由良の港の人の司秋山彦は、見晴らしよき奥の一間に、數多の家子郎黨を集め、折柄昇る三五の月を眺めて、大江山の鬼雲彦退治の祝宴を擧げ居たり。紺碧の青空には一點の雲影も無く、星は疎に、月は清く涼しく、銀鏡を懸けたるが如し。

秋山彦「ア、佳い月だ、月々に月てふ月は多けれど、月見る月は今日の夜の月、といふ仲秋の月よりも、麗しい好い心持だ、惡魔退治の嬉しさに「みるく」様のお顔もにことにこととしてござる、かかる麗しき尊き月を眺めて、月見の宴を張るは實に勿體ないやうだ。然し乍らこれが「みるく」神の廣大無邊の御慈光といふものだ、貴賤老幼の區別なく、月を眺めて快感を覺えない者はない、何程日輪様が立派だと言つても、晝の最中に日輪様を見て酒を飲む者はない、また日輪見物をするといふ事は到底出来ない、中天の太陽を暫く見詰めて居れば忽ち目が眩みてしまふ、これを見ても月日の働きの區別は歴然たるものだ、素盞鳴大神様は月の



御魂と承はる、實に尊い麗しい仁慈に富めるお顔、紅葉姫は何處にゐるか、この立派なお姿を拜ましたいものだ」  
と自ら座を起ち、玄關の次の間より、

「紅葉姫々々々」

と呼ばはりける。紅葉姫は夫の聲に、二人の來客を待たせ置き、月見の席に現はれ、秋山彦に向ひ、ウラナイ教の宣傳使の來訪を告げたるに、秋山彦は顔色忽ち變り、

「ナニ、ウラナイ教の宣傳使の來訪とナ、夫こそ大變、體よく挨拶を致して無事に歸すがよからう。イヤ紅葉姫、汝は一刻も早く玄關の客に對しお斷りを申せ」  
紅葉姫は、二人の宣傳使と秋山彦の板挾となつた心地し、漸く玄關に立現はれ見れば、二人の影もなし。ハテ訝かすと四邊を見廻す途端に額の裏に匿しありし玉鍵の房の見えざるに氣がつき、驚き額裏を檢め見れば、這は如何に、最前までここに納ひ置きし冠島、沓島の寶庫の鍵は、何者かに盗まれてゐる。紅葉姫は驚き慌て、奥殿に入つて、夫秋山彦に、玉鍵の紛失せし事を怖る怖る告げたるに、

秋山彦は、

「すわこそ大變、二人の宣傳使の所爲にはあらざるか、ヤアヤア者共、酒宴どこ  
るではない、女共は境内隈なく搜索せよ、男共は門外に驅け出し、宣傳使の所在  
を詮ね鍵の有無を調べ來れ」

と下知すれば、數多の男女は門の内と外とに手配りしながら、鍵の行方を搜索す  
る事となりぬ。秋山彦は門番の銀公、加米公を傍近く招き、

「其方は表門を守る身であり乍ら、二人の男女の脱出するを氣づかざりしか、様  
子を聞かせよ」

銀公「吾々兩人はお役目大切と山門の仁王の如く、厳しく眼を見張り警護致して  
居れば、鼠の出入さへも委しく存じて居ります。然るに最前入り來りし男女の二  
人は、まだ表門をくぐりませぬ。大方邸内に潛伏致して居りませうから、篤と御

詮議下されませ」

秋山彦「裏門は如何致した」

加米公は頭を掻き乍ら、

「ハイ其裏門は根ツから葉ツから存じませぬ」

秋山彦「門番と申せば、表ばかりでない、裏門も矢張門のうちだ、それがために

二人の門番が置いてあるのではないか、大方裏門より抜け出たのであらう」

加米公「表門は何でも彼でも這入るのが商賣、裏門は何でも彼でも皆粕の出ると

ころ」

秋山彦「馬鹿、早く裏門の方面を搜索致せ」

と血相變へて呶鳴り入る。二人は裏門口に差しかかりけるに、何物か黒きものが

門の入口に落ちゐたり、手早く拾ひ上げ眺むれば、玉鍵の房なりき。

銀公「ヤア、これさへあれば、もう大丈夫だ、スンデのことで二人の賊を取り逃

がし、免職を喰うところだつた、これで漸く申し譯が立つ」

と裏門を固く閉め、意氣揚々として、秋山彦の居間に進み入りぬ。秋山彦は脇足

に凭れ眼を塞ぎ、深き思案に沈みゐる。銀公は懐に玉鍵の房を入れ、少しく其端

を見せ乍ら、

「旦那様、御心配なされますな、慥に賊は逃げ去りましたが、彼が奪ひ取つた品

物は裏門口に遺失して居りました。此銀公は月夜にも拘はらず目敏く悟つて拾ひ上げ、今ここに持参いたしてございます、サアお検め下されませ」  
と元氣さうに言ふ。秋山彦は顔を上げ眼を開き、満面に笑を湛へ乍ら、  
「ナニ、玉鍵が遺失してあつたか、それは重疊、出来た出来た、サア早く、吾前に出せよ」

銀公は指の先で懐の房を一寸指さし、

「へ、へ、へ、眞ツこの通り、立派な房でござります、總絹で、ぼとぼとするほど重たい麗しい光澤、これさへあれば、お騒ぎ召さるにも及びますまい」

秋山彦「それは有難い、吾前に持ち來れ」

銀公は肩を聳やかせ乍ら、

「サア、これでございます、よくよくお検め下さいませ」  
と勿體振つて、前に突き出したり。

秋山彦「ヤア、これは玉鍵の房だ、鍵は何處にあるか」

銀公「旦那様、彼のやうな錆た鍵はどうでも宜しい、ご心配なされますな、鐵の

ひとときれ  
一片もあれば、直に鍛ち直して上げませう。立派な此の房が手に入るからは、あのやうな汚いものにお構ひ遊ばすな」

秋山彦「ヤア失敗つた、これや斯うしては居られぬ哩、ヤア銀公、加米公、船の用意を致せ」

「委細承知仕りました」

と此場を立出でる。紅葉姫は室内隈なく搜索し、鍵の所在の知れざるに、當惑の息を吐き乍ら、此場に現れ來り、

「旦那様、如何致しませう、素盞鳴大神様、國武彦命様に、申譯がございませぬ」  
秋山彦「今となつて、繰言いつた所で追つ付かない、彼等は冠島沓島に船にて渡りしに相違ない、一時も早く船の用意をなし、後追かけて鍵を取返さねばなるまい」

斯る所へ表の方再もや俄に騒がしくなり來たりぬ。夫婦は互に顔を見合せ、何事ならむと耳を澄して表の様子を聴き入りにける。

(大正一一・四・一五 舊三・一九 河津雄録)

第一三章 神集の玉〔六〇三〕

秋山館の門番なる銀公、加米公兩人は由良の港に立出て船出の用意致さむと表門へ駆け出す。折から現はれし一男二女の宣傳使、宣傳歌を謳ひ乍ら悠々として門内に入らむとする。銀公、加米公は大手を擴げて、

「其方は龜彦の宣傳使、鍵盗人の同類であらう。もうもうもう宣傳使の〔せ〕の字を聞いても嫌になる哩、最前來やがった二人の宣傳使奴が、大切なる鍵を「ちよろ」まかして裏門より逃失せやがった。それが爲めに當館の中は上を下への大騒動だ、貴様ももう駄目だ、肝腎要の鍵は先の宣傳使が持つて歸つた、神祕の鍵を盗まれ當館は空前絶後の大混雑、之から澤山な番犬でもかり集めて「かぎ」探させる處だ、貴様も宜い加減に歸れ」

龜彦「之は心得ぬ其方の言葉、吾々に對し盗人扱ひをなさるのか」  
加米公「極つた事だよ、宣傳使と言へば鍵盗人の代名詞だ、通る事罷りならぬ、貴様の様な者を奥へふみ込まさうものなら、それこそ大變だ」

龜彦「一應合點の往かぬ汝が言葉、二人の宣傳使とはウラナイ教の宣傳使であらう、吾々は三五教の宣傳使だ、神祕の鍵を與へる者だ」

銀公「何、神祕の鍵を與へるとな、サア早く其鍵を見せて呉れ、鍵を渡せば通行を許して與らう、宣傳使と言へば何奴も此奴も皆鍵盗人の様な氣がする、貴様は何處で神祕の鍵とやらを盗みて來たのだ、サアサ早く手に渡せ」

龜彦「アハ、ハ、ハ、譯の分からぬ門番だな、サアサ英子姫さま悦子姫さま参りませう」

と行かむとする。銀公、加米公は大聲をあげて唝鳴り立てる。此聲を聞きつけたる秋山彦は何事ならむと表に飛び出し到り見れば龜彦の宣傳使一行なりけり。

秋山彦「ア、之は之は龜彦様、英子姫様、悦子姫様克く入らせられました。少し許り取込が出来ましたので大騒ぎを致して居ります、素盞鳴大神様よりお預り申した大切な玉鍵を何者かに盗まれ、唯今僕共を四方に遣はし探索の最中で御座います」

龜彦「ア、それで分りました、門番共が私に對し鍵盗人だとか何だとか大變な事

を言つて居ました、然しそれは大事ですな、何か心當りは御座いますまいか」

秋山彦「先程ウラナイ教の高姫、青彦と言ふ二人の宣傳使が玄關まで來訪致し、

其儘姿を隠しました。あとを見れば玄關の間の額の裏に匿ひ置きたる大切な玉鍵

が紛失致して居ります、人を疑ふは決して良い事ではありませぬが、よもやと思

ひ心の裡に罪を作つて居ります」

龜彦「ヤア、それは御心配、お察し申す、吾々も共々に力添を致しまして、鍵の

所在を搜索致しませう」

秋山彦「あの鍵は冠島、沓島の寶の鍵で御座いますれば、萬々一其鍵を以て兩島

に押し渡り、如意寶珠の玉を盗み取る様な事が御座いましては、折角の神政成就

の基礎も滅茶々々になつて仕舞ひまする、生命に代へても此鍵と玉とは守らねば

なりませぬ」

龜彦「ア、さうぢや、斯ういふ時こそ鬼武彦殿にお頼み申さねばなるまい」

と大江山の方に向つて天津祝詞を奏上し救援を求めたるに、言下に、

「オウ」



と答へて現はれ来る覆面の大男、能く能く見れば鬼武彦なりける。

龜彦「ヤア貴下は鬼武彦様、能うこそ御入來下さいました、お願いの筋は斯く斯

く

と鍵の紛失せし事を詳細に物語れば、鬼武彦は暫時頭を傾け目を閉ぢ居たりしが

忽ち顔色華に、

「アハ、ハ、ハ、此鍵の掠奪者はウラナイ教の宣傳使高姫、青彦と言ふ奴、只今由

良の港より船に乗り博奕ケ岬迄漕ぎ出して居りまする、サア吾々がお伴致しませ

う、船を出しなさいませ、秋山彦殿、御心配御無用だ」

秋山彦「有難う御座います、何卒何卒宜しく御願申します」

鬼武彦「某は之より龜彦と共に船を準備へ冠島、沓島に向ひませう、秋山彦を始

め英子姫、悦子姫は當館にあつて吾々が歸るを待ち受けられよ、龜彦來れ」

と言ふより早く、加米公その他秋山彦の家の子郎黨十數人を引率し三艘の小船を

艤装して由良の港の月照る海原を艤櫂の音勇ましく漕ぎ出したり。三五の月は海

底深く姿を浮かべ、船の動搖につれて忽ち上下左右に延長し海底に銀龍の姿を現

じつつ、うつ波の博奕ヶ岬を後に見て潮の飛沫をカブラ岩、經ヶ岬を左手に眺め  
高雲山を右手に望み矢を射る如く高姫の後を追ひしき行きぬ。  
高姫は二時ばかり以前に冠島に上陸し玉鍵を以て素盞鳴尊が秘め置かれたる如  
意寶珠を取り出し、山上の大桑樹の根元に密に埋め目標をなし、又もや青彦と共  
に船に乗り沓島に向ひける。  
巨大なる鰐は數限りなく沓島の周邊を取り圍み堅く守り居る、鰐の群に壓せら  
れて、船は最早や一尺も進む事能はず、高姫は船の綱を腰に結び付け鰐の背を渡  
つて青彦諸共漸く斷崖に登り着きぬ。此間殆ど二時許りを要したりける。鬼武彦、  
龜彦の一行は忽ち此場に追ひつきける。數多の鰐は左右に分れ船路を開く。一同  
は直に島に驅け上り頂上の岩窟に向つて登り行く。釣鐘岩の絶頂に直立一丈許り  
の岩窟あり。其處には黄、紅、青、赤、紫其他色々の光彩を放てる金剛不壞の寶  
玉が匿されあり。二人は餘念なく其岩窟に跳び込み玉を取らむとて汗み泥になつ  
て働き居る。鍵は穴の端に大切相に木葉を敷いて置きありぬ。龜彦は手早く其鍵  
をとり上げ懷中に捻ぢ込みける。金剛不壞の此玉は、地底の世界より突出せしも

のにして巖の尖端に密着しあれば容易に攝取する事能はず、鬼武彦は密に傍の大  
岩石を引き抜き来り岩穴の上にドスンと載せたり。二人は徳利口を塞がれて如何  
ともする事能はず悲鳴をあげて泣き叫ぶ。

鬼武彦始め一同は此處に悠然として天津祝詞を奏上し宣傳歌を唱へ且その周圍  
に蝟集して休息し雑談に耽りぬ。岩と岩との隙間より二人の藻掻く態は歴然と見  
え居たり。龜彦は隙間より又ツと中を覗けば、穴の中より高姫は龜彦の顔を見上  
げ、

高姫「ヤア汝は三五教の宣傳使、吾々は神勅を奉じて此玉をお迎へに參つたもの、  
神業の妨害すると地獄の釜に眞逆様に落されるぞ、早く悪戯をやめて誠の道に立  
ち復り、此岩を除けて日の出神にお詫を申さぬか、不届な奴めが」

龜彦「アハ、々、々、末代上れぬ岩穴に放り込まれて減らず口を叩くな、此岩は巨  
大なる千引岩、假令百人千人來るとも容易に動かぬ代物だ、マアマア悠りと此處  
に安居して沈思黙考なされませ、吾々は之より聖地を指してお先へ御免蒙る」

高姫「岩石を取らぬなら取らぬで宜い、其代りに冠島の玉の所在は分るまい、玉

の所在が知り度くば此岩を取り除けて吾々二人を救ひ上げ船に乗せ鄭重に田邊の  
港まで送り歸せ、如意寶珠の玉は欲しくは無いか」  
龜彦「エー、抜け目のない奴だ、鬼武彦さま、如何致しませうか、貴方の天眼力  
で、玉の所在をお探し下さらぬか」  
鬼武彦「一旦惡神の手に渡つた如意寶珠なれば外部は穢れ曇り一向靈氣を放射致  
さぬ、あの玉を再び用ひむとすれば七日七夜の間に和知の清泉に清めて磨かねば  
なりません、さりとて、所在が分らねばこれ亦素盞鳴の大神に對して申し譯が立  
たぬ、エー仕方がない、高姫、青彦兩人に白状させるより外に道はありますまい」  
龜彦「困つたな、萬劫末代此岩穴に封じ込めて與らうと思つたに惜しい事だ、才  
イ、高姫、青彦の兩人、貴様は餘つ程幸福者だ、玉の所在を逐一申せ、然らば此  
岩を取り除いて與らう」  
高姫「ドツコイ、さうは行きませぬぞ、岩石を除いて吾々を冠島迄送り届けなけ  
れば仲々白状致さぬ、萬一迂闊所在を知らすが最後此儘にして置かれては吾々の  
立つ瀬が無い、吾々を救ふ方法は玉の所在を知らさぬ一法あるのみだ、ホ、ホ、」

龜彦「エー、酢でも蒟蒻でも往かぬ奴だ、一步譲つて此岩を取り除けて助けて與るか、打たぬ博奕に負たと思つて辛抱するかなア」  
と呟き乍ら鬼武彦に目配せすれば鬼武彦はウンと一聲、力をこめて岩を蹴る、岩石はガラガラガラツ、ドドンツと音響を立て眼下の紫色の海中に向つて水柱をたてつつドボンと落ち込みぬ。高姫、青彦は漸く這ひ上り、  
「ヤア皆さま、御心配を掛けました。お蔭さまで助けて貰ひました。サアサ、歸りませう」

龜彦「コレヤコレヤさうは往かぬ、何處に隠した、白状致さぬか」

高姫「如意寶珠の玉は冠島に隠してある。此處では無い、早く船を出しなさい、愚圖々々して居ると荒風が吹いて歸る事が出来なくなる」

鬼武彦一行は釣鐘岩を辛うじて下り船に乗り込みぬ。高姫、青彦は鬼武彦、龜彦の船に分乗せしめ彼が乗り來りし船には秋山彦の僕を乗せ、艫櫂の音勇ましく冠島に向つて漕ぎ歸る。高姫は冠島へ着くや否や、猿の如く山上に駆け上り、手早く珠を掘り出し懷中に捻込み、

「サア如意寶珠は之で御座る、今お渡しすると貴方は都合が宜しからうが妾の都合が一寸悪い、萬一船中に於て海中に放り込まれでもしては大變だ、もし放り込まれたら懷中の玉と一緒に沈む覺悟だ、サアサ田邊の港でお渡し申す」

龜彦「何處迄も注意周到な奴だナア、吾々は決して汝等を苦しめる考へでは無い、今直に渡して呉れよ。屹度田邊に送り着けてやる」

高姫「滅相もない、其方の出様次第に依つて此玉を岩石に打付けて碎いて仕舞ふか、疵をつけるか、海中に投げ込むか、未だ見當が付いて居らぬ。渡す渡さぬは田邊へ着いた上の事だ、オホ、々、々」

龜彦「ソナラ貴様だけ船に乗せてやる、青彦は此島に暫時居つて修業をしたが宜しからう」

高姫「滅相な、車の兩輪、二本の脚、御神酒徳利、鑿と槌、二人居らねば何事も一人では物事成就致さぬ、一本では歩けない。青彦も一緒に連れて歸れ」

龜彦「何處迄も圖々しい奴だ、それ位でなくては三五教の切り崩しは到底出來よまい、アア感心感心、韓信の股潛りだ、アハ、々、々」

鬼武彦「サア龜彦さま、話は悠りと船中でなさいませ、東北の天に當つて怪雲が現はれました。暴風の襲來刻々に迫つて來ました。サア早く早く」  
と急き立てる。龜彦、高姫其他一同は四艘の船に分乘し艫の音勇ましく田邊を指して歸り來る。ア、此寶珠は如何なるであらうか。

因に言ふ、此如意寶珠の玉は一名言靈と稱し又神集の玉とも言ひ言語を發する不可思議の生玉である。丁度近代流行の蓄音器の玉の様な活動をする寶玉にして今はウラナイ教の末流たる惡神の手に保存せられ獨逸の或地點に深く祕藏されありと言ふ。

(大正一一・四・一五 舊三・一九 北村隆光録)

(昭和一〇・五・二六 天恩郷 王仁校正)

第一四章 鵜呑鷹〔六〇四〕

龜彦は艫を漕ぎ乍ら、海風に向つて、

龜彦「田邊見たさに松原越せば、田邊隠しの霧がこむ」

と船唄面白く、遂に竹島、博奕ヶ岬、目の白黒岩を越え、松原を右手に眺め、蛇

島、廣島左手に眺めて、やうやう十七夜の黄昏過ぐる頃、田邊の湊に安着したり。

咫尺を辨ぜぬ宵闇の空、高姫、青彦は、船の横着けになるを待ち兼ね、ヒラリと

飛上り、暗に紛れて姿を隠しける。

龜彦「ヤア高姫は居らぬか、青彦は何處ぞ……鬼武彦様どう致しませう」

暗がりの中より、青彦、高姫の聲、

「アハ、、、、オホ、、、、大きに憚りさま、此玉渡してなるものかい、……皆

さま、アバヨ、アリヨース」

と冷嘲的怪聲を漏らし、何處ともなく、闇に紛れて消え失せたり。鬼武彦、龜彦

は直ちに船を飛びあがり、

「アー失敗つた、由良の湊へ着けさへすれば、コンナ事も無かつたらうに、……

高姫の言に従ひ、田邊へ着けたのが此方の不覺……エー仕方がない、後を追つか



けようにも眞しんの暗やみ、一ひと先まづ秋山彦あきやまひこの館やかたに立たち歸かへり、御相談ごさうだんを致いたしませう』

と力ちから無なげに物語ものがたりつつ、由良ゆらの湊みなとを指さして、テクの繼けい續ぞくをなし、由良ゆらの湊みなとの少すこし手前てまへまで一行いっかう歸かへり來きたる折をりしも、東天とうてんを照てらして昇のぼり來くる十七夜じふしちやの、橢圓形だえんけいの月松つきまつの木この間に姿すがたを現あらはし、一同いちどうを冷笑れいせうし給たまふ如ごとく見みえける。冨こがらしまがひの寒風かんふうは容赦ようしやなく向むかう面づらに突つき當あたり、四邊あたりの木々きぎは時ときならぬ笛ふえを吹ふき立たて、一行いっかうの失しつぱい敗ばいを囃はやすが如ごとく聞きこえ來きたりぬ。

龜彦かめひこ『ア、怪體けつたいの惡わるい、丸まるで高姫たかひめのお伴ともをした様やうなものだ。假令たとへ高姫たかひめ天てんを翔かけり、

地ちを潛くぐるとも、彼女あれの所在ありかを探たづね、如意寶珠にょいほうしゆの玉たまを取返とりかへさで置おくべきか』

と大道だいだうの正中まんなかに地團駄踏ぢだんだふみ、遂つひには胡坐あぐらをかいて動うごかなくなりぬ。鬼武彦おにたけひこは、  
『ヤア龜彦かめひこ殿どの、斯かうなる上うへは、悔くやみても復かへらぬ事こと、草くさを分わけても彼等かれらが行衛ゆくへを探さがし、玉たまを取返とりかへすより外ほかに途みちは御座ござらぬ。併しかし乍ながら吾われは秋山彦あきやまひこに會あはす顔かほなし、是これより暇申いとまをす』

と云いふより早はやく、白煙しろけぶりとなつて姿すがたを隠かくしぬ。秋山彦あきやまひこが家いへの子こ十數人じふすうにんは當惑たうわくの態ていにて、如何いかがはせむと、各自めいめい雙手もろてを組くみ、歎息なげいきの聲暫こゑしばしはやまざりにけり。

甲「もしもし龜彦さま、あなたが左様氣投げして貰つては、吾々はどう致したら宜いのですか、館へ歸つて御主人に、何と言つてお詫を致しませうやら、報告の仕方がありませぬ」

龜彦「有態の通り報告すれば良いぢやないか。俺はモウ是れ限り、秋山彦の館へは歸らない。早く歸つて主人夫婦を始め、英子姫、悦子姫に此由傳へて呉れよ」  
甲「夫れは又あまり、……ご主人様や、二人の女宣傳使が首を長うして待つて居られます。後は兔も角も、一度御歸り下さいませ」

乙「夫れだから、三五教の宣傳使は腰抜だと、俺は何時も言ふのだよ。ウラナイ教の宣傳使の敏捷い事を見たか、岩の中で、閉ぢこめられて居ても、あれ位な談判をしよる。喉元に刃を突き付けられて居乍ら、逆様に其刀で、押へた奴の首を切る様な妙案奇策をやつたぢやないか。龜彦なぞと、コンナ我羅苦多宣傳使に従いて行くものだから、生れてから無い様な赤恥を天地に曝させられたのだ。アア、どうして是れが、主人に顔が會はされよう」

丙「ソナ事を言つたつて仕方がない。死んだ子の年を數へる様なものだ。何事も諦めが肝腎だ。悪人の榮え善人の衰へる世の中だもの、善人が瞞されるのは無理もない。俺達は益々三五教の正しい事に感心した。サア龜彦様、ソナ事を仰有らずに早く歸りませう」

龜彦「サア行かう、お前達が如何な意見を持つてるかと思つて、一寸探つて見ただよ。ナア二玉位奪られた所で、どつかに匿してある。滅多に地獄の底迄隠しても居るまい。ウラナイ教の本陣へ乗込みて、有無を言はせず、とつ返して呉れる。兔も角是れは時日の問題だ。皆の者、何事も龜彦に任せよ。心配致すな。サア行かう」

と先に立ちて勢よく、直日に見直し、聞直し、宣り直しつつ、由良の湊の秋山彦が館を指して、一行十五六人、スタスタと歸り着きける。龜彦は先に立ち、表門を力無げに潛り入らむとする時、門番の銀公は此場に現はれ、

「サア龜彦の宣傳使様、お手柄お手柄、あなたのお蔭で、一旦敵に奪られたる如意寶珠の珠も、鍵も、首尾能く手に入りました、さぞ御主人様も御喜びで御座い

ませう。主人も喜び、奥様もお喜び、第一あなたのお喜び、従いて往つた奴等の喜び、共に私もお喜びだ。流石は三五教の宣傳使、ヤアもう感じ入つて御座います。奥には貴方の成功を祝する爲、海山河野種々の馳走を拵へ、旦那様が御機嫌麗しく、お待兼で御座います。吾々も御同慶に堪へませぬ」

とイソイソと、肩をゆすぶり、はしやいで居る。龜彦は軽く目禮し、トボトボと奥を指して進み入る。

銀公「オイ岩公、市公、どうぢやつた。随分面白かつたらうな」

岩公肩を聳やかし、

「きまつた事だよ。天下無雙の剛力男の岩公のお出だもの、高姫の一疋や二疋は、屁のお茶だ。併し乍ら三五教の宣傳使も良い加減なものだよ。とうと玉を奪られ

やがつてなア……」

銀公「ナニ？ 玉を奪られたとは、それや本當か」

岩公「ウン、奪られた……でもない、マア……奪つたのだ」

銀公「どちらが奪つたのだい」

岩公「ママママ奪った奴が奪ったのだ。奪られた奴が、奪られた……と云ふ様なものかいナ」

銀公「高姫は、折角奪った玉を、フンだくられやがつて、妙な顔しただらうな」

岩公「ウンさうだ。……何分一の暗みの事で、鼻摘まれても分らぬ位だから、ド

ンナ顔したか知らぬが、一方は意氣揚々、一方は意氣消沈、屠所に曳かる羊の

如しだ。お氣の毒なりける次第なりけりだ」

銀公「ママママ結構だ。如意寶珠の玉及び鍵が戻った以上は、今晚はお祝酒でも

ドツサリ戴けるかなア」

市公「あまり大きな聲では言はれぬが、サツパリぢや」

銀公「何がサツパリぢや」

市公「兔も角サツパリコンと、蛸があげ壺喰った様なものだよ、アフンと致して、

梟鳥が夜食に外れた様なむつかしい顔を致すと云ふ……是れからが幕開きだよ」

一同は急いで、奥を指して進み入る。秋山彦夫婦を始め、英子姫、悦子姫は玄

關に、龜彦を出で迎へ、

秋山彦「是れは是れは多大い御心配をかけました。様子は如何で御座いまするか」

龜彦「ハイ、左様、然らば逐一報告致しませう」

英子姫「一時も早く嬉しき便りを聞かして下さいな。今か今かと時の経つのを、

一日千秋の思ひで待つて居ました。何事にも抜け目の無い龜彦さまの事、鬼武彦

の神様も伴いて居られる以上は、滅多な不調法はありません。……大勝利……

大萬歳……サア早く面白い顛末を仰有つて下さいませ」

龜彦「只今詳細に言上仕る」

と云ふより早く、兩肌を脱ぎ、兩刃の短刀抜く手も見せず、左の脇腹に、グサと

突立て抉り始めたり。英子姫は驚いて其手に取りすがり、

「ヤア龜彦殿、早まり給ふな」

龜彦、苦しき息の下より、

「早まるなとはお情無い、神素盞鳴大神様の唯一の御寶をば、オメオメとウラナ

イ教の高姫の爲に欺き奪られ、會はず顔が御座いませぬ。最早死を決した某、な

まじひに止め立てして苦めて下さるな。委細は岩公、市公、磯公にお聞き下され。

拙者は此失敗の申し譯に、腹搔き切つてお詫申す。何れもさらば」

と云ふより早く、力を籠めて一決り、忽ち息は絶えにけり。英子姫、悦子姫は

「ワアツ」と計り、龜彦が死骸に取つき、前後も知らず泣き伏しぬ。秋山彦夫婦

も目をしばたき、默然として、悲歎の涙に袖を絞る。此時表門より現はれ出でた

一人の男、此場を指して韋駄天走りに驅け来る。見れば鬼武彦は高姫、青彦の

二人を左右の手に、猫を提げた様な體裁にて出で來り、

「ヤア何れも様、高姫、青彦の兩人を引つ捉へ参りました。玉は確に高姫の懷中

に御座れば是れより拙者が詮議致して取返し呉れむ。何れも様、御安心有れ……」

秋山彦夫婦は二度ビツクリ、

「ヤア鬼武彦様か、能うマア來て下さいました。それは誠に有難い、さは然り乍

ら、今の今迄元氣能く居らせられた龜彦さまは、腹を切つてお果てなされました

と泣き伏せば、鬼武彦はカラカラと打笑ひ、

「ヤア皆様御心配なされますな、龜彦の宣傳使は頓て此場に現はれませう」

「エーッ」

と驚く一同。龜彦の死骸はムクムクと起上り、見る見る彦犬の如き毛を全身に生じ、灰色の虎とも見えず、熊とも見えず、怪獣となつてノソリノソリと這ひ出し、表門指して歸りゆく。一同は夢に夢見る心地して、一言も發せず、暫しは互に顔を見合せ居るのみなりき。斯かる所へ現はれ来る正眞の龜彦はニコニコし乍ら、龜彦「ヤア鬼武彦様、偉い御心配を掛けました。暗夜の事と言ひ、何れに潛み隠れしやと一時は周章狼狽致しましたが、お蔭様で十七日の月は東天に輝き給うた、彌勒様のお蔭で、ヤツとの事、目的物が手に入り、コンナ有難い事は御座いませぬ。……ア、秋山彦夫婦のお方、英子姫、悦子姫殿、御安心なさいませ」

秋山彦「ヤア何よりも結構な事で御座いました。誠に偉い骨折をさせました。サアサア奥に馳走の用意がして御座います。皆さまどうぞ奥へ入らつしやいませ」

鬼武彦は高姫、青彦を玄關にドサリと下したり。

高姫「ア、鬼武彦殿、御苦勞であつたのう、お蔭でお土も踏まず、宙を駆けつて樂に参りましたよ。ホ、ホ、ホ、玉は確に此處に一つ御座います。一つで足らねば、青彦が金色の玉を二つ持つて居ります。是れで三つ揃うた瑞の御靈……ホ、ホ、ホ、」



龜彦「コレコレ高姫さま、お前さまも随分意地の悪い人だネ」  
高姫「意地の悪いは、ソリヤお前の事だよ。折角二人が如意寶珠の玉を手に入れ、次に金剛不壞の玉を奪らうとする最中に、大きな岩で桶伏せに會はしたり……三  
五教の宣傳使として、人を助ける身であり乍ら、ソナ意地の悪い事をして宜い  
ものか。チツト反省みなされ。此高姫は決して鍵を盗みたのでも、玉を掠奪した  
のでもないワ、日の出神様の御命令に依つて、龍宮の乙姫さまから受取りに行つ  
たのだ。それをお前達が、アタ意地の悪い、邪魔に來よつたのだ。素盞鳴尊も偉  
いが、日の出神さまは、ドンナ方だと思つて居る。龍宮の乙姫さまも、永らく海  
の底のお住居であつたが、此の高姫の生宮に、今度は残らず綺麗薩張とお渡し遊  
ばす世が參つたのだ。變性女子の下らぬ教を聞きかぢつて、神界の御經綸の邪魔  
をすると、頭を下にし、足を上にして歩かねばならぬ事が出來て來るぞよ。アン  
ナ者がコンナ者になると云ふ神の教を、お前は一體、何と考へなさる……此高姫  
は詰らぬ女のように見えても、系統だぞへ、變性男子の……切つても切れぬ御系統  
だ。龜彦なぞと、何處から來たか知らぬが、元は……偉相に言つても……ウラル

教けうの宣せん傳でん使しぢやないか。龍宮洲りうぐうしまへ渡わたつて、飯依彦いひよりひこの樣やうな蛸爺たこおやぢに泡吹あわふかされて逃にげ歸かへり、途とちう中ちゆうで日ひの出別でわけの神かみに助たすけて貰もらうたのだらう。ソそンナ事ことは此腹このはらの中なかで日ひの出で神かみが、チヤンと仰おつしや有あつて御座ござる。醜しこの岩窟いはやの中なかで、井戸いどの中なかへ陥はまつたり、種々いろ々いろ出で神かみが、チヤンと仰おつしや有あつて御座ござる。醜しこの岩窟いはやの中なかで、井戸いどの中なかへ陥はまつたり、種々いろ々いろ慘々さんざんな目めに逢あうて、ヤツとの事ことで宣せん傳でん使しになり素盞すさのをのみこと鳴尊ののみことの阿婆あば摺ずれ娘むすめを女房にようぼうに持もつたと思おもつて、餘あまり威張あはばぬが宜よからう。何處どこの馬うまの骨ほねか牛うしの骨ほねか、素性すじやうも分わからぬ樣やうな代物しろものに、肝心かんじんの娘むすめを呉くれてやると云いふ樣やうな紊みだれた行方やりかたの素盞すさのをのみこと鳴尊ののみことが、何なにが、夫それ程ほど有ありがたいたいのだい。日ひの出神でのかみの側そばへ出だしたら、素盞すさのをのみこと鳴尊ののみことは、猫ねこの前まへの鼠ねずみの樣やうなものだ。さうぢやから昔むかしからの因縁いんねんを聞きいて置おかぬと、「まさか」の時ときにアフンとせねばならぬと、神樣かみさまが仰おつしや有あるのだよ」

龜彦かめひこ「エーソそンナ事ことは聞ききたく有ありませぬワイ。又また庚申かうしん待まちの晚ばんにでも、ゆつくり聽きかして貰もらひませうかい」

高姫たかひめ「それは不可いかんいかん、どうでも斯こうでも因縁いんねんを説といて聽きかして、根本こつぽんから改心かいしんさせねば承知しょうちをせぬのぢや。此月このつきは日ひの出神でのかみさまの教をしへを、耳みみを浚さらへて菊きくの月つきぢやぞへ。龍宮りうぐうの乙姫おとひめと日ひの出神でのかみとの尊たふとい御守護ごしゆごのある此肉體このにくたいだ。龜公位かめこうくらゐが百人千人ひやくにんせん

東になつてきた所で何の効が有るものか、効と言つたら、堅い堅い、邪魔になる  
龜の甲位なものだよ。ゲツへへへ、

秋山彦「お話は酒宴の席で承はりませう。サアサア奥へお越し下さいませ。玄關  
口でお話は見つとも良久御座いませぬから……」

高姫「お前が秋山彦ぢやな、道理で、一寸見ても飽きの來さうなお顔立だ。紅葉  
姫さまも、コンナ夫を持つてお仕合せだ、オツホへへ、」

秋山彦、稍機嫌の悪さうな顔付し乍ら、

「ハイハイ、どうで碌な者ぢや有りませぬワイ、三五教に現を抜かす代物ですか  
ら、善ばつかりに呆けまして、ウラナイ教の様な、他人の家の鍵を提出して、平  
氣で業託を竝べる様な、謙遜な善人は居りませぬ、アハへへ、サアサア奥へお  
出なさいませ」

高姫「三五教は、善に見せて悪、ウラナイ教は悪に見せても善、マアマア奥へ往  
つて、トツクリと妾の諭しをお聴きなさい」

と立ちあがる。秋山彦を先頭に、一同はドシドシと奥の間目がけて進み入る。鬼

武彦は最後の殿を勤め乍ら、高姫、青彦の身體に目を配り、奥へ従いて行く。

八尋殿には、山野河海の珍肴、所狭きまで竝べられありぬ。高姫は遠慮會釋もなく最上座に座を占め、紙雛の様に袖をキチンと前に疊み、手を臍の邊りにつくね、仔細らしく構へ込みたり。龜彦は高姫の傍に座を占めむとするや、高姫柳眉を逆立て、

「ヤア龜彦、お前は身魂が低い。三段下がつてお坐りなされ。抑も靈は上中下の三段の區別が有る。上の中にも上中下が有り、中の中にも上中下の三段があり、下の中にも、亦上中下の三段が有る。お前は、下の中位な靈魂ぢや。上の上の生粹の大和魂の日の出神の生宮の前に坐ると云ふのは、身魂の位地を紊すと云ふものだ。それだから、身魂の因縁が分らぬ宣傳使は困ると云ふのだよ。如意寶珠の玉は、上の上の身魂が持つべきものだ。下の中身魂位では到底手も觸れる事は出来ぬ……鬼武彦ナント、力は強いが、多寡が稻荷ぢやないか、四足の親玉ぢや、稻荷は下郎の役を勤めるものぢや、コンナ座席にすわると云ふ事が有るものか。天狗や、野狐や、野狐や、狸、豆狸の靈は、ズツトズツト下の下の座にお直りなされ」

龜彦かめひこ「神界しんかいには、正神界せいしんかいと邪神界じゃしんかいが有あつて、正神界せいしんかいにも上中下三段じやうちうげさんだんがあり、邪神界じゃしんかいにも亦上中下の三段またじやうちうげさんだんが有ある、さうして段毎だんごとに又三段またさんだんがある。吾々われわれは假令たとへ下の中ちうか知らぬが、正神界せいしんかいだ。お前は上の上まへじやうじやうでも、邪神界じゃしんかいの上の上じやうじやうだから、是れ位惡黨くらめあくたうはないのだよ、月つきと鼈すつぼん、雪ゆきと炭程すみほどちが違ちがう。邪神界じゃしんかいの身魂みたまは、正神界せいしんかいと席せきを同おなじうする事は出来できない。お下りさがなされ」

高姫たかひめ「假令たとへ正神界せいしんかいでも、邪神界じゃしんかいでも、上じやうは上じやうに違ちがひない。下げはヤツパリ下げぢや。上じやうといふ字じはカミと云いふ字じぢや。カミのカミが上じやうの上じやうぢや。カミに坐すわるのは高姫たかひめの身魂みたまの因縁性いんねんしやうせい來らい……オホン誠まことに濟すみませぬナ、龜彦かめひこチヤン……」

龜彦かめひこ「チヨツ、善惡ぜんあくの區別くべつを知らぬ奴やつに掛かつたら仕方しかたがないワ……アア折角せつかくの玉たまを邪神界じゃしんかいの身魂みたまに汚けがされて仕舞しまつて殘念ざんねんな事ことだワイ」

高姫たかひめ「妾わしが邪神界じゃしんかいなら、モウ此玉このたまは用ようが無ない筈はず……ソナラ高姫たかひめが更あらためて頂戴ちやうだいする」

と懷ふとこころより如意寶珠にょいぼつしゆを取とりだし、手ての掌ひらに乗のせて、手てに唾液つばきを附つけ、一生懸命いつしやうけんめいに兩りやうの手ての掌ひらで、揉もみて揉もみて揉もみさがし居をる。此玉このたまは擴大くわくだいする時ときは宇宙うちうに擴ひろがり、縮しゆく

小する時は鶏卵の如くなる特色のある神寶なり。堅くもなれば、軟らかくもなる、高姫は揉みて揉みて揉みさがし、鶏卵の如く縮小し、搗きたての餅の様に軟らげ、

高姫「かめひこ 龜彦さま、あきやまひこ 秋山彦さま、きつね お狐さま、あらた 改めて頂戴致します。オツ」

と云ふより早く大口を開けて、目を白黒し乍ら、蛇が蛙を呑む様に、グット一口に嚙み下したり。

龜彦「あ ア、たいへん 大變な事になった。……ヤイ高姫、たま 玉を返せ」

高姫「ほ ホ、、、分らぬ身魂ぢやナア、呑みて了うた物が、どうして手に渡せる

か、お前も、モチツと物の道理が分つた方ぢやと思つて居つたのに、子供よりも

劣つた人ぢやナア」

龜彦「はら 腹を裂いても、とりもと 取戻して遣らねば置かぬぞツ、ばか 馬鹿に致すな」

高姫「うちう 宇宙の縮圖たる如意寶珠の玉を、ふくちう わが腹中に納めた以上は、たかひめ 高姫の體は即

ち宇宙……宇宙には天神地祇、やほよろづ 八百萬の神が集まり給ふ。今までの肉體は、ひ 日の

出神と龍宮の乙姫の生宮であつたが、もはや 最早唯今より、てん 天の御三體の大神様を始め、

天地八百萬の神が高姫の身體に神詰り遊ばすのぢや、サア神に仕へる宣傳使の身を以て、此肉體に指一本觸へるなら、さへて見よツ

龜彦「どこまでも馬鹿にしやがる。モウ量見ならぬ、破れかぶれだ。……ヤイ高姫、貴様の生命は俺が貰つた、覺悟致せツ」

高姫「ホ、ホ、ホ、此方が馬鹿にしたのぢやない、生れ付の馬鹿が、馬鹿な事を仕たのぢや、誰に不足を言うて行く所もあるまい、自業自得だよ。覺悟致せとは……ソラ何の事、蟲一足殺す事のならぬ三五教の教ぢやないか。其教をする宣傳使

が、勿體なくも天の大神様の御靈の現に納まり給ふ肉體を惱めやうとは、盲蛇に怖ぢず、馬鹿に附ける藥は無し、ハ、ハ、ハ、困つたものぢや、イヤ氣の毒な者ぢ

や。親の在る間に直して置かぬと、不治難症ぢや。サア今から改心をして、龜彦は申すに及ばず、英子姫、悦子姫、秋山彦、紅葉姫、鬼武彦、其外の厄雜人足共、

ウラナイ教の御趣旨を遵奉するか、サアどうぞや、返答聞かう……」

龜彦「モシモシ秋山彦さま、此奴ア、居すわり強盗ですナア、一層の事、踏ん縛つて、海へでも放り込みてやりませうか」

秋山彦「あまりの事で、私も腹が立ちます。併し乍ら如意寶珠の玉が納まりある以上はどうする事も出来ませぬ。困った事になりました」

高姫「サアサア皆の神々共、只今より、天の御三體の大神の生宮の高姫へお給仕を致すが可からうぞ、又と再び、コンナ結構な生宮に、お目に掛る事も出来ねば、お給仕さして頂く事も出来ぬぞや。今日は特別を以て、祝意を表する爲にお給仕を差許す」

龜彦「エーツ、何を吐しよるのだ、モウスうなつては天則違反も何も有つたものじゃない、兩刃の劍の御馳走だ」

と一刀スラリと引き抜き、斬り掛らむとするを高姫は、  
「ギヤツハ、、、、ギヨツホ、、、、短氣は損氣、マアマア静まれ、急いては事を仕損ずる。後で後悔せぬがよいぞ」

と澄してゐる。

龜彦「後悔も糞もあつたものかい、……貴様も讎敵の端くれ……」  
と云ひ乍ら、青彦の頭を、足を上げてポンと蹴り倒し、又もや兩刃の劍を閃かし、



生命を的に突いて掛れば、流石の高姫も、

「如何に立派な神でも、無茶には叶はぬ。……サアサア青彦、一先づ此場を逃げたり逃げたり」

と促す。青彦は狼狽へ騒いで、逃路を失ひ、同じ所をクルクルと廻轉して居る。龜彦は益々激しく突つかかる。秋山彦は、

「エースうなれば、破れかぶれだ。……紅葉姫、薙刀を執れッ」

と下知すれば、鶴の一聲、紅葉姫は長押の薙刀執るより早く、

「悪逆無道の高姫、覺悟せよ」

と斬つてかかるを高姫は、右に左に身をかはし、暫くは扇を以てあしらひ居たるが、衆寡敵せず、忽ち白煙と化し、天井窓より一目散に、西北の天を目蒐けて、中空に雲の帯を曳き乍ら、逸早く姿を隠したりける。後に青彦は、青菜に鹽した如く、ビリビリと慄ひ居たり。

龜彦「エー、コンナ弱蟲を相手にしたつて仕方がない。助けてやらう。サアサア早くこの場を立去れッ」

折角の御馳走も、踏んで踏んで踏みにぢられ、臺なしになつて了ひける。鬼武彦は忽ち白煙と化し、又もや天井の窓より、帯を曳きつつ、西北の天を目蒐け、高姫の後を逐ひて中天に姿を隠しける。

秋山彦夫婦を始め、龜彦、英子姫、悦子姫は、神前に恭しく天津祝詞を奏上し、宣傳歌を謠ひ終り、茲に別れを告げて、三人の宣傳使は由良川を遡り、聖地に向ふ事となりけり。

(大正一一・四・一五 舊三・一九 松村眞澄録)

## 第一五章 谷間の祈〔六〇五〕

龜彦、英子姫、悦子姫の三人は、由良の流れを遡り河守驛に辿り着き、路傍の石に腰打掛け息を休めぬ。右も左も鬱蒼たる老樹繁茂し、晝尚ほ暗き谷の底、蟻の甘きにつくが如く絡繹として數多の老若男女は山奥目蒐けて進み往く。

龜彦はその中の一人を捉へ、

「斯う澤山に人が北へ北へと行列を組みて往くのは、何か變はつたことがあるのか。様子を聞き度いものだナア」

男「ハイハイ何だか知りませぬが、二三日以前から大江山の麓の劍尖山の谷間に結構な神様が現はれたと云ふことで、何れも病氣平癒や、商賣繁昌などの御願で參拜を致すものでございます。私も別に願としては無いけれども、餘り澤山の人が詣るなり、偉い評判だから、ドンナ者か一つ見がてらに參る所です」

龜彦「それは一體何と云ふ神様だ」

男「ナンデも裏とか、表とか云ふ名の附いた疊屋の様な神さまぢや相です。さうして青彦とか、青蛙とか、青疊とか、ナンデも青の附く名の御取次が居つて、樹の枝を以て參拜者を一々しばくと、それで病氣が立所に癒つたり、願望が成就したりするとか云つて、それはそれは偉い人氣でございます。流行神さまは、何でも早う參らねば御神徳が無いと、皆劍尖山の麓へ指して辨當持で參拜するのです。マアお前さまも妙な風をしてござるが、大方神さまの取次ではありますまいか」

龜彦「さうぢや、吾々も神の道の取次ぢや」

男「ヤア貴方は取次と云つても、生臭取次ぢやる。此の奥の谷川に現はれた青い名の附く御取次は、精進潔齋、女などは傍にも寄せつけぬと云ふ、それはそれは偉い行者ぢやさうな。それにお前は鶏か何ぞの様に三羽番で、誰がお前の言ふことを聞くものか、笑ふに定つとるワ。アハ、ハ、ハ、」

龜彦「決して決して女房でも何でもござらぬ。各自一個獨立の教の道の宣傳使だ。お前達は男と女と歩いて居れば、直にそれだから困る。凡夫と云ふ者は淺猿しいものだ」

男「へエ、うまいこと仰有いますワイ。凡夫の中にも聖人があり、聖人らしう見せても凡夫がある世の中ぢや。餘り【ボン】ボン言つて貰ふまいかい。【ボン】くら凡夫の【ボン】ボン宣傳使奴が。マア悠乎と路傍で三羽番、羽巻でもして狎戲いたがよからう。アア、コンナ偽宣傳使に掛り合つて、伴の奴はモ一何處か先へ往つて了ひやつた」

と一目散に驅け出し、奥へ奥へと進み行く。

龜彦「英子姫さま、今の男の話に依つて考へて見ると、何うやらウライナイ教の青彦のこもらしい様に思はれます。又もやウライナイ教を弘めて世人を迷はし、害毒を流す様なことがあつては神界へ對し、吾々宣傳使の役が濟みませぬから、是から一つ實場調査に参りませうか」

英子姫「さうですなア、別に急ぐ旅でも無し、調べて見ませうか。これも何かの神様の御仕組かも知れませぬ」

悦子姫「それは面白うございませう。先日より餘り沈黙を守つて居ましたので、口に蟲が湧く様で不快で堪りませぬ。何卒今度は一つ妾に交渉をさせて下さい。言靈の有らむ限り奮闘してお目にかけます」

英子姫「アーそれも面白からう」

龜彦「サアサア参りませう。悦子姫さまの雄辨振り、奮戦振りを拜見さして貰ひませう」

と三人は群集に紛れて晝尚ほ暗き山道を、北へ北へと進み行く。

一行は群集に紛れ漸く劍尖山の麓を流るる谷川の畔に着きぬ。此の谷川の岩壁

には産釜、産盥と云ふ美はしき水を湛へた天然の水壺あり。ウラナイ教の宣傳使  
青彦は厳き白装束の儘、此の瀧壺の側に立ち、谷川の水を杓で汲み上げ柴の枝に  
吹きかけ、數多の老若男女に向つて病を癒し、或はいろいろの神占を爲し、數多  
の男女を誑惑しつつありける。悦子姫は龜彦、英子姫に向ひ、

「サア御約束の通り、是から妾が一人舞臺、貴方等は日の暮れたを幸ひ、木蔭に  
潛み妾の活動振りを御覽下さい」

と云ひ棄て何處ともなく深林の中に姿を隠したり。青彦は儼然として水壺の側に  
立ち、數多の人々に對して教訓を施し居る。

甲は拍手し乍ら、恐る恐る青彦の前に蹲踞み、

「生神様に一つ御願ひがございます。私は疝の病に、年が年中苦しみてゐます。

ナントか御神徳を以て御助け下さいませ。薬で治ることなら何薬がよいか。これ  
も御指圖願ひ度うございます」

青彦「疝でも何でも治らぬことは無い。それはお前の改心次第ぢや。一時も早く  
此頃流行る三五教を放して、ウラナイ教の神様の信者になれ。其日から疝の病氣

は嘘を吐いた様に全快間違ひなしぢや」

甲「ハイハイ有り難うございます。疝の治ることなら、何時でもウライナイ教になります」

後の方より疝高き女の聲、

「ウライナイ教を見切つて三五教に誠に盡くせ、疝氣の蟲は三五教の神力に怖れて滅びて了ふぞ。此奴は金毛九尾の狐に使はれて居る曲津の容器だ。ホ、ホ、ホ、」

甲「モシモシ生神様、男の聲を出したり、女の聲を出したりなさいまして、先に仰有つた事と後から仰有つた事とは全然裏表ぢやありませんか」

青彦「此方は誠の道の宣傳使だ。決して決して二言は申さぬ」

甲「それでも今妙な聲を出してござつたぢやありませんか」

又もや暗黒より女の聲、

「妾こそは天上より降り來れる天照大神の御使、瑞の御魂の教へ給へる三五教の生神なるぞ。青彦の如き體主靈從の教を耳に入れるな」

青彦「ヤアこれは怪しからぬ。何者とも知れず空中に聲を出して、某が宣傳を妨

害致す魔神現はれたりと覺ゆ。コラコラ惡神の奴、この青彦が言靈の威力を以て、

汝が正體を現はし呉れむ」

と拍手し、言靈濁れる神言を奏上し始めたり。又もや暗黒の中より女の聲、

「ホ、ホ、面白、面白、彼の青彦の青い顔わいな」

青彦「エー又しても又しても曲津神が出て來よつて。コラコラ今に往生さしてや

るぞ」

と汗みどろになり、一生懸命に天津祝詞を何回となく奏上する。後方の山の小高

き暗中より、又もや女の聲、

「オホ、青彦、汝は秋山彦の館に於て三五教の宣傳使龜彦に惱まされ、生

命辛々此處まで遁げ延び、又もや惡逆無道の繼續事業を開始してゐるのか。好い

加減に改心致さぬと汝が靈魂を引抜き、根の國、底の國に落してやらうか」

青彦「ナンダ、誠の道の妨害致す惡魔ども、容赦は致さぬ。今青彦が神徳無限の

ウラナイ教の言靈を以て、汝が身魂を破滅せしめむ。速かに退散致さばよし、愚

圖々々致さば容赦はならぬぞ」



とぶるぶる慄ふるひ乍ながら空元氣からげんきを附つけて吠鳴どなりゐる。暗中あんちゆうより、又またもや女の聲をんなこゑ、

「オホ、、、可を笑かしい哩わい。汝なんぢが力ちからと思おもふ高姫たかひめは今いまフサの國くにに遁にげ歸かへり、黒姫くろひめは行方不明ゆくへふめいとなりし今日こんにち、何程なにほどなんぢ汝なんぢ、力味返りきみかへるとも斯かくの如ごとき誠まことの神かみの使現つかひあらはれし上うへは最早もはやなんぢ汝なんぢが運うんの盡つき、一刻いつこくも早はやく此この場ばを退却たいきやく致いたせよ」

青彦あをひこ「エーナント云いつても一旦いつたん思おもひ立たつた拙者それがしが宣傳せんでん、たとへ此この身みは八裂やつざきに遭あはうとも、いつかないつかない心こころを翻ひるすやうな腰拔こしぬけではないぞ。何いづれの魔神まがみか知らねども、人ひとを見損みそこなふにも程ほどがある。サア正體しやうたいを此處ここに現あらはせ。誠まことの道みちを説といて聞きかして改心かいしんさせてやらう程ほどに」

暗中あんちゆうより「オホ、、、」

乙おつは拍手かしはでを打うち、

「モシモシ生神様いきがみさま、ナンドか貴方あなたが仰有おつしやいますと、後うしろの中空ちゆうくうの方に妙めうな聲こゑが聞きえます、ナンデも貴方様あなたさまに反對はんたいの神様かみさまらしうございます。此この暗くらいのに神様かみさまが喧譁けんくわ遊あそばして吾々われわれなにも知らぬものが側杖そばづゑを喰くらひまして誠まことに迷惑めいわく。何卒どうぞ此この聲こゑを止とめて下くださいませぬか」

又もや女の聲、

「オホ、、、止めて止まらぬ聲の道、道は二筋善と悪、善に服らふか、悪に従

ふか、何れも今ここでハツキリと返答を致せよ」

青彦「何れの神かは知らねども、拙者が宣傳を妨害致す曲者、了見致さぬぞ」

暗中より、又もや、

「オホ、、、彼のマア青彦の空威張り」

青彦「ヤア何とはなしに聞き覚えのある聲だ。其方は三五教の女宣傳使であらう。

後の山に潛み、拙者が宣傳を妨害致すと覺えたり。今に正體現はし呉れむ」

と火打を取出し力チ力チと火を打ち四邊の枯柴を集めて盛んに火を焚きつけたり。

一同の顔は晝の如く照らされたれど、木の茂みに隠れたる悦子姫の姿は見えざ

りける。悦子姫は尚も屈せず、

「オホ、、、ウライナイ教の阿呆彦の宣傳使、畏れ多くも昔天照大御神様の御生

まれ遊ばした時に、産湯を取らせ給うた産釜、産盥の側に立ち宣傳を致すとは、

僭越至極の汝が振舞、今に數多の蜂現はれ來つて汝が眼を潰すであらう。オ

ホ、、、、

焚火の光に驚いて傍に巢を喰つてゐた雀蜂の群、火焰の舌に巢を嘗められ堪り兼ね、青彦の底光りのする目玉を目がけて、一生懸命幾百千ともなく襲撃し始めたるにぞ、青彦は、

『アイター』

と其の場に倒れける。蜂の群は青彦の身体一面に空地もなく噛み付きける。

數多の参詣人は蜂に光つた目を刺され、苦しむもの彼方此方に現はれ、泣くもの、喚くもの、忽ち阿鼻叫喚の巷となりぬ。又もや暗中より、

『ヤアヤア此處に集まる老若男女、穢らはしき肉體を持ち乍ら、此の聖場を汚すこと不届千萬な、一時も早く神界に謝罪をせよ。三五教の宣傳歌を唱へ奉り、蜂

の災禍を拂ひ與へむ。惟神靈幸倍坐世』

と唱ふる聲につれ、一同は一生懸命になりて、

『惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世』

と唱へ始めける。

此の聲は四邊の山嶽をも揺がす許りなり。暗中より、

「ヤアヤ、汝等蜂に刺された目は、これで全快したであらう。聖場を汚してはな

らないから、一刻も早く此の場を立去り、綾の高天へ御禮のために時を移さず參

詣致せよ。夢々疑ふな。惟神靈幸倍坐世」

一同は此の聲に驚き、且つ歡び、聲する方に向つて拍手し乍ら、長居は恐れと

一目散に河傳ひに歸り往く。ア、青彦の運命は如何。

(大正一一・四・一五 舊三・一九 外山豊二録)

## 第一六章 神定の地〔六〇六〕

青彦は身體一面に熊蜂に取つかれ痛みに堪えず、苦しみ悶えつつありき。此體

を見るより龜彦、英子姫は常磐木の松の小枝を手折り、青彦が前に進み出で天津

祝詞を奏上し、天の數歌を唱へながら左右左と打ち振れば、蜂は忽ち何處ともな

く姿を隠し、青彦が身體の苦痛も俄に静まりける。

青彦は漸く頭を上げ篝火に照し見れば、豈圖らむや龜彦、英子姫の二人、吾前に端坐し、一心不亂に吾がために祈願を凝らし居るにぞ、青彦は忽ち大地に兩手をつき、

「貴方は三五教の宣傳使、龜彦様、英子姫様で御座いましたか、危き所をお助け下さいまして、お禮の申しやうも御座いませぬ」

と嬉し泣に泣き入る。後の木の茂みより又もや女の聲、

「ヤア青彦、汝は金毛九尾の惡狐に魅せられたる高姫の妖言に迷ひ、三五の教を捨ててウラナイ教に陥没したる心弱きデモ宣傳使、汝が心を立直さむと誠の神は今此處に現はれ、汝に誠めの鞭を與へたるぞ、尚改めざるに於ては、今後如何なる災禍汝の身に降らむも計り難し、ヤア龜彦、英子姫大儀々々。汝が至誠至實の言靈に依つて、青彦が危難を救ひたるは天晴功名手柄、此由大神に奏上致さむ」

龜彦「ヤア何れの神様が存じませぬが足はぬ吾々に向つて過分の賞詞、身に餘る光榮と存じます、此上は益々粉骨碎身、神國成就の爲に努力致しますれば、何卒

厚き廣き御保護を垂れさせ給はむ事を偏に願ひ奉る」

英子姫「ア、有難き大神の神示、朝な夕なに慎みて、言心行一致を勵み神界のた

めに能ふ限りの活動を致しませう、何卒何卒仁慈の鞭を御加へ下さいまして、妾

が弱き信仰を益々強く宇宙大に發揮せしめたまへ」

と合掌する。青彦は涙にくれながら唯何事も得云はず、【あな】有難し忝なしと

又もや大地に平伏するのみ。暗中より又もや女の聲、

「汝青彦、心の底より悔い改めて三五教の教を遵奉するや、返答聞かむ」

と呼ばはる聲に青彦は起き直り、

「何れの神様が存じませぬが、もう斯うなる上は綺麗薩張とウライナイ教を諦めま

す。何卒元の如く三五の道にお使ひ下さいますやうに」

暗中より又もや女神の聲、

「吾は天照皇大神なるぞ、其昔此御山に現はれ、産釜、産盥と俗に稱する天の眞

名井に御禊して、神格を作り上げたる我舊蹟なり、汝等宜敷く此處に宮殿を造り、

我御靈を祀れ、悦子姫の肉體を借りて此由宣示し置く、夢々疑ふなかれ」

龜彦「委細承知仕りました。之より此谷川に身を清め、大神の美頭の御舎仕へ奉り、神靈を奉齋し、天下太平國土安穩の祈願所と定めまつらむ」

と答ふれば天照大御神嬉しげに打ち笑はせ給ひ、

「龜彦、英子姫、悦子姫三人の神柱に宮殿の造營を一任し置く、サラバ」

と云ふより早く元津御座に歸り給へば、悦子姫は元の肉體に復し三人が前に現は

れ、大神の神勅を畏み、改めて谷川に禊し天津祝詞を奏上し、忌鋤、忌斧を造り

て宮殿の造營に身心を傾注し、百日百夜を経て全く工を終へ、茲に天照大御神の

神靈を招ぎ奉り、鄭重に祭神の鎮座式を奉仕したりける。これ伊勢神宮宮殿造營

の嚆矢なり。今は丹後の元伊勢と云ふ、この谷川は是より宮川と稱へられたり。

此因縁により、大本開祖は明治三十四年舊三月の八日、數多の教子を引連れ、

龜彦の名に因みたる上杉の木下龜吉を率ゐ、禊の神業を仰せつけられたるは、最

も深き神界の御經綸の在します事と察せらるるなり。又此産盥、産釜の清水は龍

宮館の金明水に注ぎ込まれ、次で開祖は數多の教子を率ゐ、明治三十四年舊六月

八日、沓島の山上より大海原に向つて打注ぎ給ひたるも、天下修齋の大神業の一

端と察し奉るなり。穴賢、穴賢。

(大正一一・四・一五 舊三・一九 加藤明子録)

第一七章 谷の水〔六〇七〕

劍尖山の山麓に 現はれ出でたる青彦は

ウラナイ教を開かむと 麓を流るる谷川の

岸に穿てる産盤 片方に一つ産釜の

縁由も深き清泉に 楔し乍ら遠近の

老若男女を救ひつつ ウラナイ教を宣べ傳ふ

時しもあれや龜彦は 日も黄昏れし闇の空

人押し分けて入り來り 森の茂みに佇みて



様子如何にと聞き居れば 姿隠して悦子姫

暗の中より三五の 神の教を宣べ傳ふ

老若男女は青彦の 殊更濁れる言靈に

驚き呆れ怪しみつ 由來を聞かむと焦慮る折

皇大神の神懸り 清く涼しき言靈に

青彦までも驚きて 燧石取り出し力チ力チと

火を切り出だし手探りに 枯木枯葉を掻き集め

火を點ずれば忽ちに 四邊は眞晝の如くなり

火光を目蒐けて集まれる 數多の蜂に身を刺され

呻吟苦悶の最中に 現はれ出たる英子姫

龜彦諸共常磐木の 松の小枝を打折りて

俄作りの大麻と 代用しつつ村肝の

心を籠めて左右左に 打振り打振り許々多久の

勢猛き熊蜂を 闇の彼方に追ひのけて

あをいきといき  
あをひこ  
青息吐息の青彦が

きなん  
すく  
かみ  
わざ  
危難を救ふ神の業

あをひこやうや  
かほ  
青彦漸う顔をあげ

あたり  
あたり  
め  
た  
かめ  
ひこ  
みまは  
四邊キヨロキヨロ見廻して

あななひけつ  
せん  
でん  
し  
三五教の宣傳使

な  
め  
で  
た  
かめ  
ひこ  
名さへ目出度き龜彦や

ひでこ  
ひめ  
しゅつげん  
英子の姫の出現に

かん  
しや  
なみだぬぐ  
感謝の涙拭ひつつ

ぜん  
び  
く  
ひた  
すら  
前非を悔いて只管に

あや  
ま  
い  
け  
な  
げ  
謝り入るこそ健氣なれ

よしこ  
ひめ  
あら  
悦子の姫も現はれて

あ  
ま  
か  
ず  
う  
た  
う  
そ  
ろ  
天の數歌打ち揃ひ

ひとふた  
まい  
よ  
いつ  
む  
一二三四五つ六つ

な  
な  
や  
こ  
の  
た  
り  
も  
も  
ち  
七八九つ十百千

よろづ  
よ  
こ  
と  
ほ  
萬代祝ぐ龜彦が

ひと  
す  
く  
し  
ん  
げ  
ふ  
人に勝れし神業を

ほ  
た  
た  
す  
め  
か  
み  
褒め稱へつつ皇神の

み  
こ  
と  
か  
し  
こ  
い  
は  
へ  
御言畏み岩の上に

み  
あ  
ら  
か  
み  
美頭の御舎つかへむと

う  
は  
つ  
い  
は  
ね  
つ  
こ  
上津岩根に搗き凝らし

した  
つ  
い  
は  
ね  
下津岩根に搗き固め

い  
む  
す  
き  
い  
む  
を  
の  
と  
よ  
忌鋤忌斧取り寄せて

おほ  
が  
い  
を  
が  
い  
大峽小峽の樹を伐りつ

も  
も  
か  
も  
も  
よ  
そのあひだ  
百日百夜が其間

このたに  
が  
は  
み  
そ  
ぎ  
此谷川に禊齋して

この  
よ  
す  
く  
は  
し  
ら  
だ  
て  
此世を救ふ柱立

は  
つ  
れ  
つ  
れ  
晴れて嬉しき棟上や

ち  
ぐ  
さ  
も  
も  
ぐ  
さ  
な  
に  
千草百草何やかや

萱刈り集め屋根となし  
千木勝男木も勇ましく

仕へ奉るぞ目出度けれ  
魔窟ヶ原に現はれて

心の岩戸を押し開き  
誠一つの三五の

道に服ひまつりたる  
鬼雲彦が懐の

刀と聞えし鬼虎や  
鬼彦、石熊、熊鷹の

ヒーロー豪傑始めとし  
それに従ふ百人は

前非を悔いて勇ましく  
之の谷間に現はれて

歸順しきつたる青彦を  
匠の神と仰ぎつつ

夜と晝との際目なく  
いと健やかに働きて

千代の礎萬代の  
ミロクの基礎をつき固め

皇大神の神靈  
招き迎へて嚴かに

齋き奉るぞ尊けれ  
光り輝く元伊勢の

谷を流るる五十鈴川  
天の眞名井の水鏡

清き神姿を後の世に  
寫すも嬉し靈界の

尊たふとき神代かみよの物語ものがたり

四魂しこん揃そろうて十六じふろくの

巻物語まきものがたり瑞祥ずいしやうの

閣やかたに身みをば横よこたへて

直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

現げん、神しん、幽いうを一貫いつくわんし

過去くわこと未来みらいと現在げんざいを

超越てうえつしたる不可解ふかかいの

幽玄いうげん微妙びめうの言ことの葉はは

一度いちどに開ひらく白梅しらうめの

薰かをり床ゆかしく春風はるかぜに

散ちり行ゆく後あとに實みを結むすぶ

花はなも實みもある物語ものがたり

眞名まな井ゐヶ嶽がたけや曾我部郷そがべがう

登由とゆ氣けの神かみや素盞すさの鳴をの

遠とほき神代かみよの御經綸ごけいりん

大ひろき正ただしき十とをあまり

一ひとつの年としの彌生空やよひぞら

月つきの光ひかりも宵暗よひやみの

空そらを霽はらして昇のぼり來く

玉兔たまの光ひかりに照てらされて

腹はらより出いづる口車くちぐるま

筆ふでの舵かぢをば取とり乍ながら

あてども知しらずスクスクと

横よこに車くるまを推おして行ゆく

縦たてと横よことの十字街じふじがい

辻つじ褻つまあはぬと世よの人ひとの

百ももの誹そしりを顧かへりみず

やまたをろち  
 八岐大蛇の長々と  
 ながなが  
 みぎ  
 右や左へ蜿りつつ  
 ひだり  
 うね  
 あちらこちら  
 彼方此方と飛び飛びに  
 と  
 と  
 かはづ  
 蛙の行列向ふ見ず  
 ぎやつれつむか  
 み  
 みづ  
 みたま  
 瑞の靈の本性を  
 ほんしやう  
 ひとかはむ  
 一皮剥いて述べて置く  
 の  
 お  
 わか  
 ホンに分らぬ物語  
 ものがたり  
 ア、惟神々々  
 かむながらかむながら  
 みたまさちはへましませ  
 御靈幸倍坐世よ。

(大正一一・四・一六 舊三・二〇 北村隆光録)

第三篇 眞奈爲ヶ原

第一八章 遷宅婆〔六〇八〕

ひやくにちひやくや 一日百夜の一同が苦辛慘愴の結果、漸く建ち上りし白木の宮殿、鎮祭式も無事に濟み一同直會の宴にうつる。今日は正月十五日、雪は鵝毛と降りしきり、見渡す限り一面の銀世界、天津日の影は地上に光を投げ、玲瓏として乾坤一點の塵埃も留めず、實に美はしき天國の御園も斯くやと思はるる許りなり。

英子姫は神靈鎮祭の齋主を奉仕し悠々として階段を降り來るや、忽ち神靈に感じ神々しき姿は彌が上に威嚴備はり徐に口を開いて宣り給ふやう、

我は天照大神の和魂なり、抑も當所は綾の聖地に次げる神聖の靈場にして天神地祇の集まり給ふ神界火水の經綸場なり、神界に於ける天の靈の川の源泉にして宇宙の邪氣を洗ひ清め百の身魂を神國に救ふ至嚴至聖の神域なり。又この東北に當つて大江山あり、此處は神界の芥川と稱し邪靈の集合湧出する源泉なれば靈の川の靈泉を以て世界に汜濫せむとする濁惡汚穢の泥水を清むべき使命の地なり。

此濁流の彼方に天の眞名井ヶ嶽あり、此處は清濁併せ呑む天地の經綸を司る瑞の御靈の神々の集まる源泉なり。豊國姫の分靈、眞名井ヶ嶽に天降り三口ク神政の經綸に任じ給ひつつあり、されども曲神の勢力旺盛にして千變萬化の妖術を以て

豊國姫とよくにひめが經綸けいりんを妨碍ぼうがいせむとしつつあり。汝なんぢ悦子姫よしこひめ、之これより大江山おほえやまの濁流だくりうを渡り眞まな名み井がヶだ嶽けに打向うちむかひ百ももの曲靈まがひを言向ことむけ和やはし追おひ拂はらひ吹ふき清きよめよ。又また龜彦かめひこ、英子姫ひでこひめには神界しんがいに於おいて特別とくべつの使命しめいあれば之これより聖地せいちに向むかへ、其上そのうへ改あらためて汝なんぢに特別とくべつ使命しめいを與あたふべし。

と言葉ことば嚴おそかに言擧ことあげし給たまひ忽たちまち聞きゆる微妙びめうの音樂おんがくと共に引ひきとらせ給たまひぬ。ア、尊たふとき哉かな皇大神すめおほかみの御神勅ごしんちよくよ。

茲ここに龜彦かめひこ、英子姫ひでこひめは神勅しんちよくを奉ほうじ、熊鷹くまたか、石熊いしくまり兩人りやうにんを始はじめ數十人すうじふにんの供人ともびとと共に、聖地せいちに向むかふ事こととなりぬ。又また悦子姫よしこひめ、青彦あをひこは、鬼彦おにひこ、鬼虎おにとらの二人ふたりに、四五しごの從者じゆつしやを伴ともなひ谷川たにがはに楔みそぎを修しうし宣傳歌せんでんかを唱となへ乍ながら大江山おほえやまの魔窟まくつヶ原がはらを打越うちこえ眞名井まなゐがだヶ嶽けに向むかつて進すすむ事ことになりける。

悦子姫よしこひめは宮川みやかはの溪流けいりうを溯さかのぼり、險けはしき谷間たにまを右みぎに跳とび、左ひだりに涉わたり漸やっやくにして魔窟まくつヶ原がはらの中央ちうあうに進すすみ入り、衣懸松きぬかけまつの傍そばに立たち止とまり見みれば、百日ひやくにち前に燒やけ失うせたる高姫たかひめの隱家かくれがは又またもや蔦葛つたがづらを結むすび、新あたらしく同おなじ場所ばしよに假小屋かりこやが建たてられありたり。

悦子姫よしこひめ、此間このあひだ妾わたしが高姫たかひめに招まねかれて此松このまつの下したへ來くると、間まもなく火煙くわえん濛も々と立昇たちのはり、

小屋の四方八方より猛烈に紅蓮の舌を吐いて瞬く内に舐盡し、高姫さま始め此青彦さまも火鼠の様に、彼の丸木橋から青淵へ目蒐けて飛び込まれた時の光景は實にお氣の毒なりし。その時妾は高姫さまの水に溺れて苦しみ藻掻き居られるのを、眞裸になりて救ひ上げた時、高姫さまに非常に怒られた事あり、「妾が勝手に心地よく水泳をやつて居るのに、眞裸で飛んで来て妾の手を引握り、ひつ張り上げるとは怪しからぬ」と反對に生命を助けて怒られた事あり、あの一本橋を見ると其時の光景が今見る様な  
と述懐を漏したり。

青彦「さうでしたな、あの時に私も龜彦さまが居なかつたら土左衛門になる處でした。眞實に生命の親だと思つて心の底から感謝して居ました。それに高姫さまは私がお禮を申さうとすれば目を縦にして睨むものですから、つひお禮を申し上げず心の裡に濟まぬ事ぢやと思つて居ました、眞實に負惜みの強い方ですな」  
鬼彦「ウラナイ教の奴は皆アンナ者だよ、向ふ意氣の強い、負ず嫌ひばかりが寄つて居るから負た事や弱つた事は知らぬ奴だ、悪と云ふ事も知らず本當に片意地



な教だ、負た事を知らぬものに勝負も無ければ、恥を知らぬものに恥はない、人間もあなれば強いものだ、否氣樂なものだ、自分のする事は何事も皆善ときめてかかつて居るのだから身魂の立て直し様がありませぬ哩」

青彦「ヤア私も高姫の強情なには呆れて物が言はれませぬ、沓島で岩蓋をせられた時にも私は消え入る様な思ひがして、泣くにも泣かれず慄うて居ましたが、高姫は豪氣なものです、反對に窮鼠却て猫を咬む様な談判をやるのですから呆れざるを得ぬぢやありませんか、漸く田邊に着いたと思へば暗に紛れてドロンと消え失せ、間もなく月の光に発見されて鬼武彦に素首を掴まれ、提げられて長い道中を秋山彦の館まで連れ行かれ、苦しいの、苦しうないのつて、息が切れさうでしたよ、それでも減らず口を叩いて太平樂を竝べると云ふ意地の悪い女だから、何處迄押し尻が強いかわつたものぢやない。如意寶珠の玉を大勢の目の前で平氣の平左で自分の腹の中に呑み込みて仕舞ひ、終には煙の様に天井窓から逃出すと云ふ放れ業をやるのだから、化物だか、神様だか、魔だか、素性の知れぬ癡者だ、そして随分口先の達者な事と言つたら燕か雀の親方の様だ、人には交際つてみね

ば分らぬが、あの剛腹の態度と辨〔ちやら〕とに掛つたら、大抵の男女は十人が九人迄やられて仕舞ふ、本當に巧な者だ、其處へ又、も一つ辨舌の上手な黒姫と言ふのが始終後について居つて應援をするものだから、口八丁手八丁悪八丁と言ふ豪の者に作りあげて仕舞つたのだ。然しチャンと此焼け跡に又もや新しい小屋が建つて居る、大方黒姫の奴、後追つかけて來よつて焼け跡に小屋を建てて隠れて居るのではあるまいか、何處までも執念深いのはウラナイ教の宣傳使だからな

鬼虎 一つ調べてやりませうかい

鬼彦 若し黒姫が居つたら貴様何うする、又舌の先でチヨロチヨロと舐られてグ

ニヤグニヤとなりやせぬかな

鬼虎 何、大丈夫だよ、鬼虎には鬼虎の虎の巻がある、俺の十一七番を御目に懸けてやるから悠りと見物をせい

一同は路傍の恰好の石に腰掛けて休息し乍ら雑談に耽つて居る。鬼虎は七八間許り稍傾斜の道を下り衣懸の松の麓の藁小屋を外からソツと覗き、

鬼彦 ヤア、居るぞ居るぞ、婆が一匹、男が二匹だ、オイ婆ア、貴様は何だ、バ

ラモン教か、ウラナイ教か、ウラル教か、返答致せ

小屋の中より、

「エー、八釜しい哩、何處の穀潰しか知らぬが新宅の成功祝で、グツスリ酒を飲みて暖い夢を見て居た處だ、大きな聲で目を覺まさしよつてチツト人情を知らぬかい。安眠妨害で告發するぞ」

鬼虎「ヤア、一寸洒落て居やがる、よう牛の様にツベコベと寝乍ら【ねち】ねちと口を動かす奴だ、丸で高姫か黒姫みたいな餓鬼だ、改心せぬと又それ紅蓮の舌に舐められて、藁小屋は祝融子に見舞はれ全部烏有に歸し、頭の毛や着衣に火が延焼して一本橋から身を投げて寂滅爲樂、十萬億土の旅立をせにやならぬ様になるぞ」

小屋の中より、

「何處の奴か知らぬが俺は貴様の今言うた黒姫だよ、名は黒姫でも顔の色はそれ今其處らに降つてる雪の様に白い雪ン婆の様な心の綺麗なウラナイ教の宣傳使ぢや、此澤山な雫を掻き別けて寒い寒い山道を【うるつく】奴は餘程【ゆき】つま

つた「しろ」物と見える哩。今日らの日に彷徨ふ奴は家の無いものとする事ぢや、田螺でも蝸牛蟲でも一つは家を持つて居る、家無しのド乞食奴が、何とか、彼とか言ひよつて人の處の家へ泊めて貰はうと思つても……さうは往かぬぞ、然し魚心あれば水心ありぢや、俺の言ふ事を聞くのなら泊めてやらぬ事は無いわ、それ程寒相に齒の根も合はぬ程、カツカツ慄ふよりも如何ぢや、俺の結構な話を聞いて暖い火にあたつて、味の良い濁酒でも鱈腹飲みた方がましだらう、世の中は馬鹿者が多いので此雪の降つてピユウピユウと顔の皮が剥ける様な風が吹くの、下らぬ宣傳歌を涙交りに謠ひよつても誰が集まつて聞くものかい、後から後から此雪の様に冷かされる一方だ、一つ冷静に酒の爛ドツコイ考へて見たが宜からうぞ」

鬼彦「アハ、ハ、ハ、オイ鬼彦、一寸來い、大分に能うツベコベ吐す奴ぢや、高姫の二代目が居りよる哩。白姫とか赤姫とか吐す中年増の婆ぢや、一つ此奴を、眞名井ヶ嶽に行く途中の先登として言向け和したら面白からうぞ」

鬼彦「ヤ、さうか、何でも婆の潜みて居さうな藁小屋ぢやと思つた。ドレドレ之

から鬼彦が應援に出掛け様かい

雪の中をザクザクと音させ乍ら小屋の側に寄り添ひソツと中を覗き、

鬼彦「ヤア、居る居る、此奴は何時やら見た事のある奴ぢや。随分八釜しい婆ぢ

やぞ、鈴の化物見た様な奴ぢや

鬼虎「鈴か煤か知らぬが何でも黒い名のつくババイババイ婆宣傳使だ。オイ、婆

ア、一つ貴様の得意の雄辨を振つて天下分け目の舌鋒戦でも開始したら如何だ、

面白いぞ

婆「オイ、音、勘、酒に喰ひ酔うて何時迄寝て居るのだ、外には貴様に合うたり

叶うたりの荷擔うたら棒が折れる様なヒヨツトコ男が来よつて、百舌鳥の様に囀

つて居る、貴様一つ出て舌戦をやらぬかいナ

音、勘「ム、ム、ムニヤムニヤムニヤ、ア、ア、アー」（寝惚け聲で）

婆「エー、【じれつたい】、缺伸許りして夜中の夢でも見てるのかい、もう午時

ぢや、早く起きぬか

音公「午時か猫時か知らぬが二人がグツスリと猫を釣つて、甘い物をドツサリ喰

つた夢を見てる時に、ア、偉い損をした、十七八の頗るのナイスが現はれて、細い白い柔かい手で目を細うして「音さま、一杯」と杯をさして呉れた最中に起きて、エーエ怪つ體の悪い、一生取り返しのならぬ大損害だ、生れてから見た事もない様なナイスにお給仕をして貰ふ時の心持と言つたら天国浄土に行つても、夢でなくては有りさうもない、ア、ア、嬉しかった嬉しかった」

婆「オイ、音、何をお前は惚けて居るのだい、チツト確りしなさらぬか、戸を開けて外を見なさい、澤山の耄碌がやつて来て今此黒姫の舌鋒に刺されて、ウラナイ教に歸順せむとする準備の最中だ、サアサア勘公も起きたり起きたり」

婆はノソリノソリと小屋を立ち出で、

「ヤア誰かと思へば青彦も其處に居るのか、コレヤ、マア如何したのだ、何時の間にも三五教に這入りよつたのだ、宣傳使の服が變つて居るぢやないか、サア早く脱ぎ捨ててウラナイ教の教服と更へるのだよ」

青彦「これはこれは黒姫先生、憚り乍ら今日の青彦は最早百日前の青彦とは趣が違つて居ますから、その積りで物を言つて貰ひませぬと、某聊か迷惑の至りだよ」

婆「オホ、猫の眼の玉の様に、能う變る灰猫野郎だな、そこに居る女宣傳使は此間來た悦子姫と言ふ破れ宣傳使だらう、ソナ者に從いて歩いて何になるか、チツトお前も物の道理を考へて利害得失を辨へたが宜からうぞ、オホ、勘公「皆さま、ソナ處へ腰掛けて居らずに、トツトとお這入りなさいませ、内はホラホラ外はスウスウぢや、隨分廣い間がありますよ」

婆「コレヤ、勘公よ、能う勘考してもものを言はぬかい、主人の黒姫にも應へずに僕の分際として勝手にお這入り下さいとはソレヤ何を言ふのか、アンナ者を一緒に入れたら丸で爆彈を詰めた様なものぢや、何處から破裂致すやら分つたものぢやないぞ」

勘公「爆彈でも何でも宜いぢやありませんか、先方の爆彈をソツと此方へ占領して使ふのが妙案奇策、敵の糧を以て敵を制する六韜三略の兵法で御座る、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

婆「お前の兵法は矢張りへんげの様な物だ、匂ひも無ければ音もこたへず、音公と同じ様な掴まへ所の無い人三化七ぢや」

音公おとこう「これこれ、黒姫くろひめのチャアチャアさま、音公おとこうの様な者ものとは、ソレヤ何なにを證據しやうこに言いふのだ、チャアチャア吐ぬかすと量見りやうけんせぬぞ、世界せかい一目ひとめに見みえ透すく龍宮りうぐうの乙姫おとひめぢやぞと、明あけても暮くれても口癖くちくせの様に自慢じまんして居をるが、現在げんざい足許あしもとに居をる此音このおとさまを誰たれだと思おもつて居をるのか、明あき盲目めくらだな、三五教あななひけうの宣傳使せんでんし音彦おとひことは此方こなたの事ことだぞ」

婆ばば「音おとに名高なだかい音彦おとひこの宣傳使せんでんしと言いふのはお前まへの事ことか、オツト、ドツコイ、音おとに聞きいた程ほども無い見劣みおとこりした腰拔こしぬけ野郎やらうだ、水みづの中なかで「おと」した屁への様な男やうをとこ(音公おとこう)だな、斯こんなガラクタ男をとこが三五教あななひけうの宣傳使せんでんしだなぞと本當ほんたうに「おと」ましい哩わい、生うまる時ときに母親ははおやの腹はらの中なかで肝腎かんじんな、目めに見みえぬものを「おと」して來きた様な間拔まぬけた顔付かほつきをしよつて、宣傳使せんでんしの何なんのつて、雪隠蟲せんちんむしが聞きいて呆あきれますぞえ、宣傳使せんでんしぢや無のうて雪隠蟲せんちんむしぢやらう、オホ、、、」

音彦おとひこ「エー、仕方しかたのない剛情がうじやうな婆ばばばかりウラナイ教けうには寄よつて居ゐるな」  
婆ばば「きまつた事ことぢや、お前まへも餘よつ程ほどの馬鹿ばか人足にんそくだな、今頃いまごろに瘡あざが落おちた様な顔やうしよつて、「剛情がうじやうな奴やつばかりウラナイ教けうは寄よつて居ゐるな」なぞとソナナ迂うとい氣き



の利かぬ事でウラナイ教の閒者に這入つたつて何が成功するものか、此黒姫は此  
奴一癖ある閒抜けたと思つて、知らぬ顔で居れば良い氣になりよつて何を言ふの  
だ、貴様の面を見、世界一の大馬鹿者、三五教の腰抜け野郎と貴様の寝てる間  
に此黒姫司が墨黒々と書いて置いた、それも知らずに偉相に言ふな、鍋の尻の様  
な面になりよつて、お前も餘つ程「くろう」好きぢやと見える、「心からとて吾  
郷離れ、知らぬ他國で苦勞する」とはお前の様な馬鹿者の境遇を剔抉して餘蘊な  
しだ、ホ、ホ、ホ、それに付けても青彦の奴、何の態ぢや、日蔭に育つた瓢箪の様  
な面をして結構なウラナイ教の神様に屁をかがしたか、かかさぬか、………ド  
拍子の抜けたシャツ面を此寒空に曝し、瑞の靈と言ふ冷たい名の付いた奴の教を  
有難相に聞きよつて、蒟蒻の化物の様にビリビリ慄ひ歩く地震の化物奴、チツと  
胸に手を當てて自身の心を考へて見よ」  
青彦「大きに憚り様、何うせ青彦と黒姫は名からして色彩が違ふから反が合ませ  
ぬ哩。黒い黒い顔に石灰釜の黝見たように、ドツサリと白粉をコテコテ塗りたて、  
丸で此處にある焼杭木に雪が積つた様なものだ。五十の尻を作りよつて白髪を染

めたり、顔を塗つたりしたつて皺は隠れはせぬぞ、若い者の眞似をして若相に見せ様と思つても雪隠の洪水で糞浮きぢや、汚いばかりぢや、良い加減に改心せぬかい

婆「俺が顔に白粉をつけて居るのが何が可笑しい、何事も隅から隅まで前にも氣をつけ「おしろい」にも手を廻して抜目の無い教と言ふ印に白粉をつけて居るのだ、貴様は尾白い狐に魅まれよつてウロウロと「うる」ついてるのだな、娑婆幽靈の死損なひ奴が」

青彦「娑婆幽靈の死損なひとは貴様の事だよ、人生は僅か五十年、五十の坂を越えよつて白粉をつけて俏した處で地獄の鬼は惚れては呉れはせぬぞ、三途川の鬼婆の姉妹と取り違へられて、冥土に行つても又大々の排斥をせらるるのは判を捺した様なものだ、本當に困つた婆だな、執着心の強い粘着の深い、着いたら離れぬと言ふ牛蝨の様な代物だ、如何ぞして結構な三五教に救うてやり度いと思つて居るのだが、もう斯うなりては駄目かな、耳は蛸になり目は木の節穴の様に硬化して仕舞ひ、口ばつかり無病健全と言ふ代物だから、如何しても見込みがつかぬ

哩わい  
「

婆ばば「エー、ツベコベと世迷よまひ言ことを能よう嘖さへつる男をとこだ、初はじめには三五教あななひけうが結構けつこうだと言いつて涙なみだを零こぼし、洩はなまで垂たらして有難ありがたがり、次つぎには三五教あななひけうは薩張さつばり駄目だめだ、瑞みづの靈みたまの不可解ふかかいな行動かうどうが腑ふに落おちぬ、もうもう愛想あいさうがつかた、三五教あななひけうの「あ」の字じを聞きいても胸むねが悪わるいと言いひよつて、此この黒姫くろひめの紹介せうかいでウラナイ教けうにヤツと拾ひろひ上げ、もう何どうなり斯かうなり一人歩ひとりあるきが出来できる様やうになつたと思おもへば又またもや變心へんしん病びやうを出だしよつて、「矢張やつぱりウラナイ教けうは駄目だめだ、先せんの嬢かかあは嘘うそはつかぬ哩わい、三五教あななひけうの御神ごしん力が強つよい」と、萍うきぐさの様やうな心こころになつて、風かぜが東ひがしから吹ふけば西にしに漂ただよひ、西にしから吹ふけば東ひがしの岸きしに漂着へうちやくすると言いふ漂着者へうちやくもんだ、ソナ事ことで神様かみさまの御蔭おかげが貰もらへるか、終始しうし一貫いつくわん、不ふ變へん不動ふどう、岩いはをも射い抜ぬく梓弓あづさゆみ、行ゆきて歸かへらぬ強つよき信仰しんかうを以もつて神かみに仕つかふるのが萬物ばんぶつの靈れいち長やうたる人間にんげんの意氣いきだよ、能ようフラフラと變かはる瓢六玉へうろくだまだ、ア、可憐かはい相さうな者ものだ、ヤア哀あはれなものだなア、オホ、々、

青彦あをひこ「何を言いひよるのだ、コラ黒姫くろひめ、貴様きさまだつて三五教あななひけうは結構けつこうだ、廣ひろい世界せかいにコナ誠まことの教をがあらうかと言いひよつて、今迄いままで信しんじて居ゐたバラモン教けうを弊履へいりを捨すつる

が如く念頭より放棄し、今又ウライナイ教の高姫の参謀になりよつたと思つて、偉相な事を言ふない。お猿の尻笑ひと言ふのは貴様の事ぢや、才、それそれ猿で思ひ出した、猿と言ふ奴はかく事の上手な奴ぢや、貴様は高姫の筆先だとか、何とか折れ釘の行列の様な、柿の「へた」の様なものを毎日、日にち寫しよつて、それを唯一の武器と恃み、鬼の首を籠でかき切つた様な心持になつて、世界中の誠の信者の信仰をかき廻すと言ふ、「さる」とはさるとは困つた代物だよ、猿が餅搗くお龜がまぜると言ふ事がある、コラ猿婆貴様の舌端に火を吐いて言向け和した信者の持ち場を、青彦の宣傳使が之から「かき」廻すのだから、マアマア精出して活動するが良い哩、貴様は三五教の先走りだ、イヤ、もう御苦勞のお役だ、靈魂の因縁に依つて悪の御用に廻されたと思へば寧ろお氣の毒に堪へぬワイ、ア、惟神靈幸倍坐世、叶はぬから靈幸倍坐世、アハ、ハ、ハ、ハ、

(大正一一・四・一六 舊三・二〇 北村隆光録)

第一九章 文珠如來〔六〇九〕

ヤンチャ婆アの黒姫は、性來の聞かぬ氣を極度に發揮し、青彦、音彦其他に向つて舌端黒煙を吐き、一人も残さず紅蓮の焰に焼き盡さむと凄じき勢なり。

黒姫「コレコレ、最前から其處に、男とも、女とも、譯の分らぬ風をして居る三

五教の宣傳使、良い加減に此世に暇乞ひをしても悦子姫の阿婆擦れ女、澤山の荒

男を引きつれて、女王氣取りで、傲然と構へて御座るが、チト此婆アが天地の根

本の道理を噛みて啣める様に言ひ聞かしてやるから、ソナ蓑笠をスツパリと脱

いで、此處へ御座れ、滅多にウライ教の爲に悪い様な事は申さぬ。問ふは當座

の恥、知らぬは末代の恥だ、此山の中で結構な神徳を戴いて、又都會へ出たら、

自分が發明した様に、宣傳使面を提げて歩かうと儘ぢや。何でも聽いて置けば損

は往かぬ。サアサア婆アの澁茶でも呑みて、トツクリと身魂の洗濯をしなされ。

チツト此頃はお前も顔色が悪い。此黒姫が脈を執つて上げよう。……どうやら浮

中沈、七五三の脈膊が混亂して居る様ぢや、今の間に療養せぬと、丸氣違になつ

て了しまふぜ。今いまでさへも半氣違はんきちがひぢや。神靈注射しんれいちゅうしゃを行やつてあげようか。それが利きかなくば、モルヒネ注射ちゅうしゃでもしてやらうかい。サアサア トツトと前まへへ來きなさい〇悦子姫よしこひめ 『それはそれは、何なにから何なにまで御心おこころを附つけられまして、御親切ごしんせつ有難ありがたう御座ございます』

黒姫くろひめ 『有難ありがたいか、ウラナイ教けうは親切しんせつなものだらう。頭あたまの先さきから足あしの爪先つまさき、神しん經系けい統とうから運動機關うんどうきくわんは申まをすに及およばず、食道しょくどう、消化機關せうくわきくわんから生殖器せいしよくき、何なにから何なに迄まで、チャンと氣きをつけて、根本こつぽんから説とき明あかし、病やまひの根ねを斷きる重寶ちゆうほうな教をしへぢや。お前まへも神しん經けい中樞ちゅうすうに多少異状たせういじやうがあると見みえて、三五教あななひけうの木花姫このはなひめの生宮いきみやの樣やうに、女をんなだてら、男をとこの風采なりをして、男をとこを同伴どうはんつて、そこら中ちゆうを歩あるきまはすのは、普通ひつとほじではない。此儘放このままほつとくと、巢鴨行すがもゆきをせなければならぬかも知しれやしない。……サアサア此黒姫このくろひめは耆婆扁鵲きばへんじやくも跣足はだしで逃にげると云いふ義理堅ぎりがたい義婆ぎばぢや。世間せけんの奴やつは譯わけも知らずに、黒姫くろひめを何なんの彼かのと申まをすけれども、燕雀何えんじやくなぞ大鵬たいほうの志こころざしを知らむやだ。三千世界さんぜんせかいの立替立直たてかへたてなほしの根本こつぽんを探さくると云いふ、大望たいまうなウラナイ教けうを、三五教あななひけうの宣傳使位せんでんしくらゐに分わかて堪たまるものか。お前まへが此處ここへ來きたのも、みなウラナイ教けうを守護しゆごし給たまふ、尊たふとき大神おほかみ

様の御引合せぢや。躓く石も縁の端と言つて、世界には道を歩いて居ると、澤山な石が轉がつて居る。其幾十萬とも知れぬ石の中に、躓く石と云つたら、僅に一つか二つ位なものだよ。これも因縁が無ければ蹴躓く事も出来なければ、蹴躓か  
れる事も出来やしない。同じ時代に生れ、同じお土の上に住つても、コンナ結構なウラナイ教を知らずに、三五教にとぼけて一生を送る様な事は本當に詰らぬぢやないか。何事も神様のお引合せ、惟神の御攝理、縁あればこそ、斯うしてお前は此山の奥に踏み迷ひ……イヤイヤ神様に引つ張られて來たのだ。決して決して黒姫の我で云うと思つたら量見が違ひますデ、龍宮の乙姫さまが仰有るのだ。今迄永らく海の底のお住居で、澤山の寶を海の底に蓄へて居られたのぢやが、今度良の金神様が世にお上りなさるに就て、物質的の寶よりも、誠の寶が良いと云つて、五六七神政成就の爲に、惜しげも無く綺麗サツパリと、良の金神さまに御渡しなされると云ふ段取りぢや。併し人間は誠の寶も結構ぢやが、肉體の有る限り、家も建てねばならず、着物も着ねばならず、美味しいものも食はねばならず、あいさには酒もチヨツピリ飲みたいと云ふ代物だから、形のある寶も必要ぢや。三五

教の奴は「この世の寶は、錆び、腐り、焼け、溺れ、朽果つる寶だ、無形の寶を  
神の國に積み」なぞと、水の中で屁を放いた様な屁理屈を言つて、世界の奴を誤  
魔化して居るが、お前等も大方其部類だらう……イヤ其通り宣傳して歩くのだら  
う。……能う考へて見なされ。お前だつて食はず飲まずに、内的生活ばかり主張  
して居つて、堂して神の道の宣傳に歩けるか。これ程分り切つた現實の道理を  
無視すると云ふ教はヤツパリ邪教ぢや。瑞靈の吐す事は、概して皆コンナものだ。  
言ふ可くして行ふ可からざる教が何になるものか。體主靈従と靈主體従の正中を言  
ふのが當世ぢや。當世に合ぬ様な教をしたつて誰が聴くものか。神の清き御心に  
合むとすれば、暗黒なる世の人の心に合ず、俗惡世界の人の心に合むとすれば、  
神の心に叶はず……なぞと譯の分り切つた小理屈を、素盞鳴尊の馬鹿神が囀りよ  
つて、易きを棄て難きに就かむとする、迂遠極まる盲信教だから、根つから、葉  
つから、羽が生えぬのぢや。ウラナイ教は斯う見えても、今は雌伏時代ぢや。軍  
備を充實した上で、捲土重來、回天動地の大活動を演じ、それこそ開いた口が塞  
がらぬ、牛の糞が天下を取る、アンナ者がコンナ者になると云ふ仕組の奥の手を



現はして、天の御三體の大神様にお目にかける、良の金神の仕組ぢや。三五教は良の金神の教を樹てとる様な顔して居るが、本當は素盞鳴尊の教が九分九厘ぢや。黒姫はそれがズンとモウ氣に喰はぬので、變性男子の系統の肉體の、日の出神の生宮を力と頼み、龍宮の乙姫さまの生宮となつて、外國の行方を、隅から隅迄調べあげて、今度の天の岩戸開に、千騎一騎の大活動をするのぢや。お前も、三五教の宣傳使と云ふ事ぢやが、名はどうでもよい、お三體の大神様と良の金神様の御用を聞きさへすれば宜いのだらう。サアサア今日限り化物の様な奴の吐す事を、弊履の如く打棄てて、最勝最妙、至貴至尊、無限絶對、無始無終の神德輝く、ウライナイ教に兜を脱いで、迷夢を醒まし、綺麗サツパリと改心して、ウライナイ教を迷信なされ、悪い事は申しませぬ、ギヤツハ、、、」

悦子姫「ホ、、、アハ、、、あのマア黒姫さまの黒い口、……妾の様な口の端に乳の附いてる様な者では、到底あなたの舌鋒に向つて太刀打は出来ませぬ。あなたは何時宣傳使にお成りになりましたか、随分圓轉滑脱、自由自在に布留那の辨、懸河の論説滔々として瀑布の落ちるが如くですナ」

黒姫「定つた事だよ。入信してからまだ十年にはならぬ。夫れでも此通りの雄辨家だ、是れには素養がある。若い時から諸國を遍歴して、言靈を練習し、唄であらうが、淨瑠璃であらうが、浪花節であらうが、音曲と云ふ音曲は残らず上達して鍛へたのぢや。千變萬化、自由自在の口車、十萬馬力を掛けた輪轉機の様に、廻轉自由自在ぢや、オホ、々、々」

加米彦「モシモシ悦子姫さま、コンナ婆アに、何時までも相手になつとると、日が暮れますで、一時も早く眞名井ヶ原に向ひませうか」

悦子姫「ア、さうだ、折角の尊いお説教を聞かして貰うて、お名残惜しいが、先が急きますから此處らで御免蒙りませうか」

鬼虎「アア、最前から黙つて聽いて居れば、随分能く囀つたものだ。一寸謂はれを聞けば、根つから葉つから有難い様だが、執拗う聞けば、向つ腹が立つ……お婆アさま、ゆつくり、膝とも談合、膝坊主でも抱へて、自然に言靈の停電するまで、馬力をかけ、メートルを上げなさい。アリヨース」

黒姫「待つた待つた、大いにアリヨースだ、様子あつて此婆アは、此魔窟ヶ原に

假小屋を拵へ、お前達の来るのを待つて居たのだ。往くと云つたつて、一寸だつて、此婆が、是れと睨みたら動かすものか」

鬼虎「まるで蛇の様な奴ぢやナア。執念深い……何時の間にか、俺達に魅入れよつたのぢやナ」

黒姫「さうぢや、魅を入れたのぢや、お前もチツト身入れて聞いたが宜からう、蛇に狙はれた蛙の様なものぢや、此處を「かへる」と云つたつて、歸る事の出来ぬ様に、チャーンと靈縛が加へてある。悪靈注射も知らず識らずの間に、チャアーンと行つて了うた。サア動くなら動いて見よれ」

鬼虎「アハ、何を吐すのだ。動けぬと云つたつて、俺の體を動かすのは、俺の自由権利だ。……ソレ……どうだ。これでも動かぬのか」

黒姫「それでも動かぬぞ。お前が今晚眞名井ヶ原に着いて、草臥れて、前後も知らず、寝んだ時は、ビクとも體を動かぬ様にしてやるワイ」

鬼虎「アハ、大方ソナ事ぢやろと思うた。……ヤイヤイ黒姫、三五教は起きとる人間を、目の前で靈縛して動けぬ様にするのぢやぞ。一つやつてやらう

か、……一二三四五六七八九十百千萬……」  
黒姫「一二三四五六七八心地よろづウ……ソラ何を言ふのぢや、それぢやから三  
五教は體主靈従と云ふのぢや。朝から晩まで、算盤はぢく様に數を數へて、一か  
ら十まで千から萬まで……取り込む事につけては抜目のない教ぢや。神の道は無  
形に視、無算に數へ、無聲に聞くと云ふのぢやないか、……何ンぢや、小學校の生  
徒の様に、一つ二つ三つと勿體らしさうに、……ソナことは、三つ兒でも知つ  
てるワイ。……大きな聲を出しよつて、アオウエイぢやの、カコケキぢやのア  
タ阿呆らしい、何を吐すのぢやい……白髪を蓬々と生やしよつた大の男が見つと  
もない、桶伏山の上へあがつて、イロ八からの勉強ぢやと云ひよつてな、……小  
學校の生徒が笑うて居るのも知らぬのか、……良い腰拔だなア、それよりも天地根  
本の大先祖の因縁を知らずに神の教が樹つものか、三五教の様な阿呆ばかりな  
ら宜いが、世の中には三人や五人、目の開いた人間も無いとは謂はれぬ。其時に、  
昔の昔のサル昔からの因縁を知らずに、どうして教が出来るか、馬鹿も良い加減  
にしといたが宜からう。鎮魂ぢや、暗魂ぢやとか云ひよつて、糞詰りが雪隠へで

も行つた様に、ウンウンと汗をかきよつて、何のザマぢやい、尻の穴が詰つて穴  
無い教と云ふのか、阿呆らしい、進むばかりの行方で、尻の締りの出来ぬ素蓋  
鳴尊の紊れた教、何が夫程有難いのぢや、勿體ないのぢや、サア鎮魂とやらをか  
けるのなら、懸けて見い、……ソナ糞垂腰で鎮魂が掛つてたまるかい。グヅグ  
ヅすると、妾の方から、暗魂をかけてやらうか」

加米彦「ヤア時刻が移る、婆アさま、又ゆつくりと、後日お目にかかりませう」

黒姫「後日お目にかからうと云つたつて、一寸先は闇の夜ぢや。逢うた時に笠脱  
げと云ふぢやないか、此笠松の下でスツクリと改心して、宣傳使の笠を脱ぎ、蓑  
を除き、ウラナイ教に改悪しなさい。一時も早う慢心をせぬと、大峠が出て来た  
時に助けて貰へぬぞや」

加米彦「アハ、ハ、ハ、オイ婆アさま、お前さま本氣で言つてるのかい、お前の言  
ふ事は支離滅裂、雲煙模糊、捕捉す可らずだがナア」

黒姫「定つた事だい、廣大無邊の大神の生宮、龍宮の乙姫さまのお宿ぢや、捕捉  
す可らざるは龍神の本體ぢや、お前達の様な凡夫が、龍宮の乙姫の尻尾でも捉へ

ようと思ふのが誤りぢや、ギヤツハ、ゝゝ」

音彦「ア、是れは是れは、加米彦さま、久し振ぢやつたナア」

加米彦「ヤア聞覚えのある聲だが、……その顔はナンダ、眞黒けぢやないか、炭

焼の爺かと思つて居た、……一體お前は誰だ」

音彦「音彦だよ、北山村より此婆アの後に従いて、ドンナ事をしよるかと思つて、

ウラナイ教に化け込み伴いて來たのだ。イヤモウ言語道斷、表は立派で、中へ這

入ると、シャツチもないものだ、伏見人形の様に、表ばかり飾り立てよつて、

裏へ這入れればサツパリぢや。腹の中はガラガラぢや。ウラナイ教は侮る可らざる

強敵と思つて今日迄細心の注意を怠らなかつたが、噂の様にない微弱なものぢや、

何程高姫や、黒姫が車輪になつても、最早前途は見えて居る。吾々もモウ安心だ。

到底齒牙に掛くるに足らない教理だから、わしもお前の後に伴いて、今より三五

教の宣傳使と公然名乗つて行く事にしよう。此婆アさまは、如何しても駄目だ。

改心の望みが付かぬ、縁なき衆生は濟度し難し、……エー可憐相乍ら、見殺しか

いなア」

黒姫「アア音彦も可憐なものだナア。如何ぞして誠の事を聞かしてやらうと思ふのに、魂が痺れ切つて居るから、食鹽注射位では效驗がない哩、アア氣の毒ぢや、いぢらしい者ぢや……それに付けても青彦の奴、可憐相で堪らぬ。……コラコラ青彦モ一遍、直日に見直し聞直し、胸に手を當てて能う省みて、ウラナイ教に救はれると云ふ氣はないか。此婆はお前の行先が案じられてならぬワイ」  
青彦「アア、黒姫婆アさま、お前の御親切は有難い、併し乍ら、個人としては其親切を力一杯感謝する、が、主義主張に於ては、全然反對ぢや、人情を以て眞理を曲げる事は出来ぬ、眞理は鐵の棒の如きもの、曲げたり、ゆがめたり、折つたりは出来ない、公私の區別は明かにせなくては、信仰の眞諦を誤るからナア、……左様なら……御ゆるりと御休みなされませ、私は是れから、悦子姫様のお後を慕ひ、一行花々しく、惡魔の征討に向ひます。ウラナイ教が何程、シヤチになつても、釣鐘に蚊が襲撃する様なものだ。三五教は穴が無いから大丈夫だ。水も洩らさぬ神の教、御縁が有つたら又お目に掛りませう」  
黒姫「アア、縁なき衆生は度し難しか、……エー仕方がないワイ……ウラナ

イ教大明神、叶はぬから靈幸倍坐世、叶はぬから靈幸倍坐世、  
……ポンポン』

魔窟ヶ原の黒姫が  
伏屋の軒に暇乞ひ

日は西山に傾いて  
附近を陰に包めども

四方の景色は悦子姫  
松吹く風の音彦や

秋山彦の門番と  
身をやつしたる加米彦が

顔の色さへ青彦を  
伴なひ進む九十九折

鬼の棲處と聞えたる  
大江の本城左手に眺め

鬼彦、鬼虎、岩、市、  
勘公引連れて さしも嶮しき坂路を

喘ぎ喘ぎ登り行く  
地は一面の銀世界

脛を没する雪路を  
轉けつ轉びつ汗水を

垂らして進む岩戸口  
折柄吹き來る雪しばき

面を向くべき由もなく  
笠を翳して下り行く

夜の帳はおろされて  
遠音に響く波の音



松の響も成相の空吹き渡る天の原  
天の橋立下に見て雪路渉る一行は  
勇氣日頃ひじろに百倍ひゃくばいし 氣焰萬丈きえんばんぢやう止め度なく  
文珠もんじゆの切戸きりどに着つきにけり。

青彦あをひこ「ア、ア、日も暮くれたし、前途ぜんと遼遠れうゑん、足あしも良い程ほど疲勞たひれました。ア、文珠堂もんじゆだうの中なかへ這入はいつて一夜いちやを凌しのぎ、團子だんごでも嚙かぢつて休息きうそく致いたませうか」

悦子よしこ姫ひめ「何いづれもさま方がた、随分ずぶん御疲勞おつかれでせう。青彦あをひこさまの仰おつしや有とほる通り、あのお堂だうの中なかで、免とも角かく休息きうそく致いたませうか」

一同いちどう此言このことば葉はに「オウ」と答こたへて、急いそぎ文珠堂もんじゆだうに向むかつて驅かけり行く。

鬼虎おにとら「ヤア此處ここへ來くると、何時いつやらの事ことを連想れんさうするワイ、恰度ちやうど今夜こんやの樣やうな晩ばんぢやつた。此樣このやうに雪ゆきは積つもつて居をらぬので、あたりは眞暗まつくらがり、鬼雲彦おにくもひこの大將たいしやうの命令めいれいに依よつて、あの龍燈松りうたうまつの麓ふもとへ、悦子よしこ姫ひめさま達たちを召捕めしとりに行いつた時ときの事ことを思おもへば、全然まるで夢ゆめのやうだ。昨日きのふの敵てきは今日けふの味方みかた、天あめが下したに敵てきと云いふ者ものは無なきものぞと、三五あななひ

教けうの御教おんをしへ、つくづくと思しばれます。其時そのときに悦子姫よしこひめさまに靈縛れいばくをかけられた時は、  
どうせうかと思おもつた。本當ほんたうに貴女あなたも隨分ずぶん惡戲好いたづら好きの方かたでしたなア  
悦子姫よしこひめ「ホ、ホ、ホ、ホ、」  
鬼彦おにひこ「オイオイ鬼虎おにとら、貴様きさまはお二人ふたりの中央まんなかにドツカリ坐すわりよつて、良い氣きになつ  
て居ゐたのだらう」  
鬼虎おにとら「馬鹿言ばかへ、何が何なんだか、柔やはらかいものの上うへに、ぶつ倒たふれて、氣分きぶんが惡わるいの、  
惡わるくないのつて、何分なにぶん正體しやうたいが分わからぬものだから、ホーズの化物ばけものが出でたかと思おもつて  
氣きが氣きぢやなかつたよ、それに就つけても、生者しやうじやひつめつ必滅會者定離めしやぢやうり、榮枯盛衰ゑいこせいすゐ、有爲轉うゐてんべ  
變んの世よの中なか無常迅速むじやうじんそくの感愈深かひよいぶかしだ。飛ぶ鳥とも落おとす勢いきほひの鬼雲彦おにくもひこの御大將おんたいしやうは、鬼武彦おにたけひこ  
の爲ために伊吹山いぶきやまに遁走とんそうし、吾々われわれは四天王してんわうと呼ばよばれ、隨分ずぶん羽振はぶりを利きかした者ものだが、變かは  
れば替かはる世よの中なかだ。あの時ときの事ことを思おもへば、長者ちやうじやと乞食程こじきほどの懸隔けんかくがある。三五教あななひけう  
の宣傳使せんでんしの卵たまごになつて悦子姫よしこひめさまのお供ともと迄まで、成なり下さがつたのか、成上なりあがつたのか  
知らぬが、モ一度いちど、あの時ときの四天王振してんわうぶりが發揮はつきしたい様な氣きもせぬ事ことはない。ア  
ア誠まことの道みちは結構けつこうなもの、辛つらいものだ。

あひ見ての後の心に比ぶれば 昔は物を思はざりけり

だ。善悪正邪の區別も知らず、天下を吾物顔に、利己主義の自由行動を採つた時の方が、何程愉快だったか知れやしない、吁、併し乍ら人間は天地の神を畏れねばならぬ、今の苦勞は末の爲だ。アア コンナ世迷言はヨウマイ ヨウマイ。神直日大直日に……神様、見直し聞直して下さい。私は今日限り、今迄の繰言を宣り直します。ア、唯神靈幸倍坐世

青彦 因縁と云ふものは妙なものですな、同じ此龍燈の松の下蔭に於て、捉へようとした宣傳使を師匠と仰いで、お伴をなさるのは、反對に悦子姫様の擒となつた様なものだ。アハ、ハ、ハ、吾々も全く三五教の捕虜になつて了つた。それに就けても、執拗なのは黒姫ぢや、何故あれ程頑固な知らぬ、どうしても彼奴ア改心が出来ぬと見えますなア

音彦 到底駄目でせう。私もフサの國の北山のウライナイ教の本山へ、信者となり化け込みて、内の様子を探つて見れば、何れも此れも盲と聾ばつかり、桶屋さま

ぢやないが、【輪變】吾善と思つてる奴ばかり、中にも蠟蜋別だの、魔我彦だのと云ふ奴は、素的に頑固な分らぬ屋だ。高姫黒姫と來たら、酢でも蒟蒻でもいく奴ぢやない。どうかして歸順さしたいと思ひ、千辛萬苦の結果、黒姫の荷持役とまで漕ぎつけ、遙々と自轉倒島まで従いて來て、折に觸れ物に接し、チヨイチヨイと注意を與へたが、元來が精神上の盲聾だから、如何ともする事が出來ない。私も加米彦さまに會うたのを限として、此處迄來たのだが、隨分ウライ教は頑固者の寄合ですよ」

加米彦「フサの國で、あなたが宣傳をして居られた時、酒を飲む酒を飲むなど、厳しい御説教、私はムカついて、お前さんの横面を、七つ八つ擲つた。其時にお前さんは、痛さを堪へて、ニコニコと笑ひ、禁酒の宣傳歌を謠うて御座つた、その熱心に感じ、三五教を信じて、村中に弘めて居つた處、バラモン教の捕手の奴等に嗅付けられ、可愛い妻子を捨てて、夜晝なしに、トントントンと東を指して驅出し、月の國まで來て見れば、此處にもバラモン教の勢力盛んにして、居る事が出來ず、西藏を越え、蒙古に渡り、天の眞名井を横斷つて暴風に遭ひ、船は沈

み、底の藻屑となつたと思ひきや、氣が附けば由良の湊に眞裸の儘横たはり、火を焚いて焙られて居た。「アア世界に鬼は無、何處の何方か知りませぬが、生命を御助け下さいまして有難う」と御禮を申し見れば秋山彦の御大將、生命を拾つて貰うた恩返しに、門番となり、馬鹿に成りすまし勤めて来たが、人間の身は變れば替はるものぢや、世界は廣い様なものの狭いものぢや。フサの國で、あなたを虐待した私が、又あの様な破れ小屋でお目にかからうとは神ならぬ身の計り知られぬ人の運命だ……ア、惟神靈幸倍坐世、三五教の大神様有難う御座います、川の流れと人の行末、何事も皆貴神の御自由で御座います。どうぞ前途幸福に、無事神業に参加出來ます様、特別の御恩寵を垂れさせ給はむ事を偏に希ひ上げ奉ります」

悦子姫「サアサア皆さま、天津祝詞を奏上致しませう」

一同は「オウ」と答へ、聲も涼しく奏上し終る。

悦子姫「サア皆さま、坊主は經が大事、吾々は又明日が大切だ。ゆつくりとお休みなされませ。妾は皆さまの安眠を守る爲、今晚は不寝番を勤めませう」

鬼虎「ヤア滅相な、あなたは吾々一同の爲には御大將だ。不寢番は此鬼虎が仕り

ませう。どうぞお休み下さいませ」

悦子姫「さうかな、鬼虎さまに今晚は御苦勞にならうか」

と蓑を纏うた儘、靜かに横たはる。一同は思ひ思ひに横になり、忽ち鼾聲雷の如

く四邊の空氣を動搖させつつ、華胥の國に入る。鬼虎は不寢番の退屈紛れに雪路

をノソノソと歩き出し、何時の間にもやら、龍燈の松の根元に着き、ふつと氣が付

き、

「あゝ此處だ此處だ、悦子姫に靈縛をかけられた古戦場だ。折から火光天を焦し

て龍燈の松を目蒐けて、ブーンブーンと唸りを立てて遣つて來た時の凄じさ、今

思つても竦然とするワイ。あれは一體何の火だらう。人の能く言ふ鬼火では有る

まいか。鬼虎が居ると思つて、鬼火の奴、握手でもせうと思ひよつたのかなア。

靈魂もお肉體もあの時はビリビリのブルブルぢやつた。どうやら空の様子が可笑

しいぞ、眞黒けの鬼が東北の天に渦巻き始めた。今度こそ遣つて來よつた位なら、

一つ奮戦激闘、正體を見届けてやらねばなるまい。是れが宣傳使の肝試しだ。オー

イ、オイ、鬼火の奴、鬼虎さまの御出張だ、三五教の俄宣傳使鬼虎の命此處に在り、得體の知れぬ火玉となつて現はれ来る鬼火の命に對面せむ〇とお山の大将俺一人氣取になつて、雪の中に嘯鳴つて居る。忽ち一道の火光、天の一方に閃き始めた。

「ヤア天晴々々、噂をすれば影とやら、呼ぶより譏れとは此事だ。鬼虎の言靈は、マアざつと斯くの通りぢや。一聲風雲を捲き起し、一音天火を喚起す。斯うなつては天晴れ一人前のネットプライス、チヤキチヤキの宣傳使ぢや、イザ來い來れ、天火命、此鬼虎が獅子奮迅の活動振り……イヤサ嚴の雄猛び踏み健び御覽に入れむ〇」

言下に東北の天に現はれたる火光は、巨大なる火團となりて、中空を掠め、四邊を照し、龍燈の松目蒐けて下り來る。

鬼虎「ヨウ大分に張込みよつたな、此間の奴の事思へば、餘程ネオ的だとみえる。容積に於て、光澤に於て天下第一品だ……否天上一品だ。サア是れから腹帯でもシツカリ締めて、捻鉢巻でも致さうかい、腹の帯が緩むとまさかの時に忍耐れぬぞよ

と、三五教の神様が仰有った。サアサア鬼虎さまの肝玉が大きいか、天火の命の火の玉が大きいか、大きさは比べちゃ

火團は龍燈の松を中心に、圓を描き、地上五六尺の所まで下り来り、ブーンブーンと唸りを立て、ジヤイロコンパスの様に、急速度を以てクルクルと回轉し居たり。

鬼虎「ヤイヤイ火の玉、何時までも宙にぶら下がって居るのは、チツト、ノンセンスだないか、良い加減に正體を現はし、此方さまと握手をしたらどうだい。お前は天の鬼火命、俺は地の鬼虎命だ、天地合體和合一致して、神業に参加せうではないか。是れからは火の出の守護になるのだから、貴様のやうな奴は時代に匹敵した代物だ……イヤ無くて叶はぬ人物だ。サアサア早く、天と地との障壁を打破して、開放的にならぬかい。お前と俺と互にハーモニーすれば、ドンナ事でも天下に成らざるなしだ」

火團は忽ち掻き消す如く、姿を隠しけるが、鬼虎の前に忽然として現はれた面白衣のうら若き美女、紅の唇を開き、



「ホ、ホ、ホ、お前は鬼虎さまか、ようマア無事で居て下さったナア」  
鬼虎「何ぢやア、見た事も無い、雪ン婆アの様な眞白けの美人に化けよつて、雪に白鷺が下りた様に、白い處へ白い者、一寸見當の取れぬ代物だナア。俺を知つて居るとは一體どうした譯だ、俺は生れてから、お前の様な美人に會つた事は一度も無い、何時見て居つたのだ」

「ホ、ホ、ホ、モウ忘れなさつたのかいなア、覚えの悪い此方の人、お前は今から五十六億七千萬年のツイ昔、妾が文珠菩薩と現はれて、此切戸に些やかな家を作り、一人住居をして居つた所へ、年も二八の優姿、在原の業平朝臣の様な、綺麗な顔をして烏帽子直垂で、此處を御通り遊ばしただらう。其時に妾は物書きをして居つたが、何だか香ばしき匂ひがすると思つて、窓から覗けば、繪にある様な殿御のお姿、ホ、ホ、ホ、おお恥し……其一刹那に互に見合す顔と顔、お前の涼しい……彼の時の眼、何百年経つても忘れようか、妾が目の電波は直射的にお前の目に送られた。お前も亦「オウ」とも何とも言はずに、電波を返した……。あの時のローマンスをモウお前は忘れたのかいなア。エーエ變はり易きは殿御の

心、櫻の花ぢやないが、最早お前の心の枝から、花は嵐に打たれて散つたのかい  
……、アア残念や、口惜しや、男心と秋の空、妾は神や佛に心願掛けて、やつ  
と思ひの叶うた時は、時ならぬ顔に紅葉を散らした哩なア、才ホ、、、、恥しや  
なア」

鬼虎「さう言へば、ソナ氣もせぬでも無いやうだ。何分色男に生れたものだから、お門が廣いので、スツカリ心の中からお前の記憶を磨滅して居たのだ。必ず氣強い男と恨めて呉れな。是れでも血も有り、涙も有る。物の哀れは百も承知、千も合點だ。サア是れから互に手に手を取かはし、死なば諸共、三途の川や死出の山、蓮の臺に一蓮托生、彌勒の代までも樂みませう」

女「ホ、、、、好かぬたらしいお方、誰が才前の様な山葵卸の様な剽男野郎に心中立するものかいナ。妾は今其處に、天から下りて御座つた日の出神様にお話をしとるのだよ。良い氣になつて、お前が話の横取りをして、色男氣取りになつて……可笑しいワ、ホ、、、」

鬼虎「エーッ何の事だ。人を馬鹿にしよるな、まるで夢のやうな話だワイ」

女をんな「ホ、、、、夢ゆめになりとも會あひたいと云いふぢやないか。妾わしの様なやうな女神めがみを掴つかまへて、スートハートせうとは、身分みぶん不相應ふさうおうですよ。馬うまは馬連うまづれ、牛うしは牛連うしづれ、烏からすの女房にようぼうはヤツパリ烏からすぢや。此雪このゆきの降ふつた白しろい世界せかいに烏からすの下おりたよな黒くろい男をとこを、誰たれがラブする物好ものずきがあるものか。自惚うぬぼれも程々ほどほどになさいませ。オツホ、、、、おかし  
いワ……」

鬼虎おにとら「エー馬鹿ばかにするな、俺おれを何なんと思おもつて居ゐる。大江山おほえやまの鬼雲彦おにくもひこが四天王してんわうと呼ばれたる、剛力無雙がうりきむさうのジャンチヤチツクのジャンジヤ馬うま、鬼虎おにとらさまとは俺おれの事ことだよ。纖弱かよわき女の分際ぶんざいとして、暴言ばうげんを吐はくにも程ほどが有ある。サアもう量見りやうけんならぬ。この蝶さざ螺えの壺焼つぼやきを喰くつて斃くたばれ」  
と力限ちからかきりに、ウンと斗ばかり擲なり付つけたり。

悦子姫よしこひめ「アイタタタ…誰たれだい、人ひとが休眠やすみみてるのに、……力一杯頭ちからいつぱいあたまを擲なぐるとはあまりぢやありませんか」

鬼虎おにとら「ヤア、濟すみませぬ。悦子姫よしこひめさままで御座ございましたか。ツイ別嬪べつびんに翫弄おもちゃにしたられた夢ゆめを見みまして、力一杯ちからいつぱい擲なつたと思おもへば、貴女あなたで御座ございましたか。ヤア誠まことに濟す

まぬ事を致しました。眞平御免下さいませ。決して決して、悪氣でやつたのぢや御座いませぬ」

悦子姫「ホ、ホ、ホ、三五教に這入つても、ヤツパリ美人の事は忘れられませぬなア」

鬼虎「ヤアもう申譯も御座いませぬ。世の中に女がなくては、人間の種が絶えまする。日の出神も素盞鳴尊も、世界の英雄豪傑は、みな女から生れたのです。」

故郷の穴太の少し上小口 ただぼうぼうと生えし叢

とか申しまして、女位、夢に見ても氣分の良い者は有りませぬワ、アハ、ハ、ハ、鬼彦「ナ、何ンぢや、夜の夜中に大きな聲で笑ひよつて、良い加減に寝ぬかい。明日が大事ぢやぞ。貴様は、……今晚私が不寝番を致します……なぞと、怪體な事をぬかすと思つて居たが、悦子姫さまの綺麗な顔を、穴の開く程覗いて居よつただだらう。デレ助だなア」

鬼虎「馬鹿を言ふない。俺は職務忠實に勤める積りで居つたのに、何時の間にか、ウトウト睡魔に襲はれ、龍燈松の下へ行つて別嬪に逢うた夢を見て居つたのぢや。聖人君子でなくてはアンナ愉快な夢は見られないぞ。貴様のやうな身魂の曇つた人間は、到底アンナ夢は末代に一度だつて見られるものかい」  
鬼彦「アツハ、ハ、ハ、その後を聞かして貰はうかい。他人の戀女に岡惚しよつて、色男氣取りになつて、肱鐵を喰つた夢を見よつたのだらう。大抵ソナものだよ、アハ、ハ、ハ。早く寝ぬかい、夜が明けたら又、テクつかねばならぬぞ」  
此の時天の一方より、今度は眞正の火團閃くよと見る間に、龍燈松を目蒐けて、唸りを立て矢を射る如く降り來り、一同の前にズドンと大音響を發し、爆發したり。火光はたちまち、火花の如く四方に散亂し、數百千の小さき火球となつて、地上二三丈許りの所を、青、赤、白、紫、各種の色に變じ、蚋の餅搗する如くに浮動飛散し始めた。其壯觀に一同魂を抜かして見惚れ居る。吁、此火光は何神の變化なりしか。

(大正一一・四・一六 舊三・二〇 松村眞澄録)

第二〇章 思はぬ歡〔六一〇〕

龍燈松の麓に落下し爆發したる大火光團は大小無數の玉となり、見る見る容積を減じ遂には小さき、金、銀、水晶、瑠璃、瑪瑙、碑磔、翡翠の如き光玉となり、珠數繋ぎとなつて悦子姫の全身を圍繞し忽ち體內に吸収されし如く残らず浸潤し了りける。其刹那悦子姫は得も云はれぬ神格加はり優しき中に冒すべからざる威嚴を備へ、言葉さへ頓に莊重の度を加へて、一見別人の如く思はれ、無限の靈光を全身より發射するに至りぬ。一同は驚異の眼を見張り頭を傾け口を極めて讚嘆する。悦子姫は儼然として立上り、

「ハア一同の方々、妾は日の出神の神靈を身に浴びました。之より眞名井ヶ獄に向つて進みませう。前途には大江山の魔神の殘黨、處々に散在し居れば、何れも十二分の御注意あれ、妾は之より一足先に参ります、左様なら」と云ふより早く、矢を射る如く見る見る姿を隠したりける。

後見送つて一同は、アーアーと歎息の息を漏すのみなりき。

音彦「折角此處迄同道申して来たのに、悦子姫さまは無限の神徳を身に浴び、吾々を後に残して御出發になつた。随分拍子抜けのしたものだ。萬緑叢中紅一點のナイス、花を欺く悦子姫さまに放つとけぼりを喰はされて好い面の皮だ、七尺の男子殆ど顔色なしで御座る哩」

岩公「本當にさうだなア、せめて岩公だけなりともお伴につれて行つて下さりさうなものだのに、餘り水臭いなア」

音彦「お前のやうな純朴な人間は間に合はないから、連れて行つて下さらないワ、音彦でさへも、置去りに遇うたのだもの」

岩公「生れ赤子のやうな、貴方の仰の通り純朴な吾々を何故連れて行つて下さらないのだらうなア」

鬼虎「岩公、貴様は餘程お目出度い奴だ、音彦さまが純朴と仰有つたのは、間の抜けた人と云ふ事を婉曲に善言美詞に宣り直されたのだよ。約り純朴と云ふのは社會の訓練を経ない、元始的の犬猫同様の人間と云ふ事だよ」

岩公「馬鹿云ふな、音彦さまは蹴爪の生えた宣傳使だ、三五教の骨董品的苔の生

えた、洗鍊せんれんに洗鍊せんれんを加くはえた、押おしも押おされもせぬ宣傳使様せんてんしさまぢや。滅多めつたの事ことを仰おつしや有あるも  
のか、オイ鬼虎おにとら、それはお前まへの僻ひがみ根性こんじやうと云いふものだよ。この岩公いはこうは斯かう見みえて  
も、何事なにごとも善意ぜんいに解釋かいしやくするのだ、物事ものごとを惡意あくいに取とれば何なにも皆みな惡あくになつて仕舞しまふワ、  
貴様きさまは改心かいしんの坂さかが越こえられぬと見みえるワイ」  
鬼虎おにとら「それでも岩公いはこう、よく考かんがへてみよ、不思議ふしぎ千萬せんばんの事こと許ばかりぢやないか、火ひの玉たま  
が幾いくつとも數限かずかぎりなく分離ぶんりして、終しまひの果はてには容貌みめかたちの麗うるはしき悦よしこひ子ひめ姫めさまに、皆みな染着せんちやく  
して仕舞しまつたぢやないか、神様かみさまの御靈みたまでも矢張やはり吾々われわれのやうな形かたちの汚きたない、魂たまの美うつくし  
い奴やつよりも、姿すがたの綺麗きれいなナイスがお好すきだと見みえる、あゝコンナ事ことならなぜ女をんなに生うま  
れて來こなかつたらう、エ、天地てんちの神様かみさまも聞きこえませぬ哩わい、父ととさま、母かかさま、何故私なぜわたくし  
を絶世ぜつせいのナイスに生うみて下くださらなかつたのです、お恨うらめしう御座ございます、オンオ  
ンオン」  
鬼彦おにひこ「アハ、何なにを吐ぬかすのだい鬼虎おにとらの奴やつ、お岩いはの幽靈いうれいの樣やうな面つらをして、神様かみさま  
は申まをすに及およばず、大江山おほえやまのお化ばけだつて貴様きさまの御面相ごめんさうを見みたら、二にの足あしも三さんの足あしも  
ふむに極きまつて居ゐるワイ、ソナ謀反氣むほんぎを出ださずに、神妙しんめうに、醜面兒ひよつとこは醜面兒ひよつとこらし



くして居るのだよ」

鬼虎「エ、一つ云うては一つ【かち】込まれ、俺の身になつて見て呉れてもよいぢやないか。隣のお多福には肱鐵砲を喰ひ、お八には尻をふられ、嬢にや逃げられ、何とした因果な生れ付だらう、俺が三五教の信者になつたのもどうぞして美しい男になり、天下のナイスをして、此鬼虎に視線を集注させようと思ふばかりに入信したのだ。アーアー、神さまも顔や姿ばかりは何うする事も出来ぬのかなア、情ない、コンナ事なら死んだが増だワイ」

一同「アハ、ハ、ハ、」

鬼虎「ヤイヤイ、お前達は何を笑ふのだ、俺はこれでも眞剣だぞ、一生懸命になつてるのだ、餘り馬鹿にして貰ふまいかい」

鬼彦「憂愁煩悶の権利は貴様の自由だ、俺達は別に壓迫もせなければ干渉もせないよ、力一ぱい愁歎場の幕を開いて吾々一同に、永當々々御觀覽に供するのがよからうよ、觀覽するのせめぬのも吾々の、これ又自由權利だ、アハ、ハ、ハ、」

音彦「ヤア、からりと夜が明けた、サア日輪様を背に負うて、又【テク】の繼續

事業をやらうかなア」

加米彦「サア、龍燈松を基點として岩瀧迄、マラソン競争だ。腹帶を確り締めて、

草鞋を確り結び、中途に落伍しないやうに、驅歩だ。オイチ二三」

一同は岩瀧目蒐けて膝栗毛に鞭打ち、一目散に走り行く。岩公、後方より、

「オイオイ待つて呉れ、俺一人遣して行くのか、折角神様がお造り遊ばした大切

な人間様を、粗末にして道の端に零して置くと云ふ事があるものかい、オイオイ

人間一匹袂にでも入れて一緒に走つて呉れい、俺は何うしたものか交通機關の何

處かに損傷を來したと見えて、テクれない哩」

「エイ喧しい云ふな、愚圖々々して居ると決勝點を人に【して】やられる哩」

と一生懸命に後をも見ず雲を霞と驅け出したり。

岩公「ア、馬鹿ぢやなア、爲いでも好い辛勞をしよつて、此處から船に乗つて

天の橋立を越え岩瀧へお先にご安着だ。一つ皆の奴を威嚇して度肝を抜いてやら

うかな」

と云ひつつ岩公は松の下に繋ぎある船の綱を解き、鱸を操りながら岩瀧指して悠々

と迂り行く。船は漸く岩瀧に着きぬ。

岩公「ア、智慧の足らぬ奴は可憐さうなものだワイ、この岩公は昔船頭をして居つたお蔭で地理に精しい。弓と弦程違ふ道程、何程走つたつて追ひ着きつこがあるものか、マア悠くりと成相山にでも登つて股覗きでもしてやらうかい」

斯かる所へ音彦一行は息せき切つて走り來り、

音彦「サアサア皆さま、一寸一服致しませう、随分走りましたなア」

鬼彦「随分汗が出ましたよ、それにつけても岩公の奴、今頃は途中で屁古垂れて

オイオイ俺を零して行くのかなぞと怨言を竝べて居るぢやらう。足弱を連れて居

ると却つて迷惑だ、彼奴は性來跛者だから、マラソン競争は不適任だ」

鬼彦「岩公の奴、片方の足が短いものだから、彼奴を走らすと恰で蛸が芋畑から

逃げ出すやうなスタイルだ、随分奇妙奇天烈なものだナア、アハ、ハ、ハ、」

岩公「木の茂みの中より頭ばかり突き出して、

岩公「岩公の足は片方が短いのではない、片方が長いのではないぞ」

鬼彦「ヤ、怪體な、岩公の聲じやないか、何時の間に來よつたのだ、化物見たや

うな奴じやなア」

岩公「ヘン、馬鹿にするない、片方の足が長いだけ、それだけ貴様等とは行進が早いのだ。おまけに悦子姫さまがソツと俺の懐中へ玉を入れて下さつたものだから、宙をたつやうに此處迄無事御安着だよ。アハ、ハ、ハ、」

鬼彦「ヤア岩公、嘘を云ふな、貴様はマラソン競争の規則を破つて竊と船に乗つて來よつたのだらう、龍燈松の下に繋いであつた船が此處に着いて居るぢやないか、條約違反だ、貴様はこれから三五教を除名するからさう心得る、ナアもし音彦さま、加米彦の宣傳使さま、吾々の提案は條理整然たるものでせう」

「アハ、ハ、ハ、オイ岩公司、ア、結構々々、吾々は智慧の文珠堂に休みながら、其智慧を使ひ忘れた、お前は偉いものだ、ア、これから、文珠の岩公司与名を呼ぶ事にして遣らう」

岩公肩を聳やかしながら、

「ハイハイ有難う御座います、オイ鬼彦、鬼虎其他の端武者共、あの言葉を聞いたか、文珠の智慧の文珠の岩公司だ、之から何でも岩公司に智慧を借るのだぞ、

オホン

鬼彦 「これだから馬鹿者には困ると云ふのだ、一寸褒めて貰へば直に興奮して、華氏の百二十度以上に逆上よる、一つ逆上の下るやうに海水でも吞ましてやらうか、ア、ドンブリコとやつて遣らうか」

岩公 「大きに憚りさま、又今度お世話に預ります、サアサア音彦の宣傳使様、之から先は勝手知つたる道程だ、私が猿田彦の御用を勤めませう」

音彦 「ヤアそれは調法だ。先頭は岩公にお願ひ致さう」

岩公 「これはこれは不束な岩公に對し格外の拔擢をして下さいました。此上は恩命に報ゆるため粉骨碎身と迄は行きますまいが、可成道案内に對して可及的のベストを盡します。何うぞ御安心下さいませ」

鬼虎 「岩公の御先頭か、ねつから葉から安心なものだ。アハ、ハ、ハ、」

岩公の案内につれ音彦一行は黄昏前、比治山の手前に辿り着きける。

音彦 「何うやら今日も之でお終ひらしい、何處かの家へ入つて一夜の宿を願ひ、

明日早朝眞名井ヶ原の豊國姫様の御降臨地を探しませう、悦子姫さまも定めしお

待ちかねでせうからねえ」

岩公「少し手前に幽かな火が見えませう、彼處に行けば大きな藁葺きの家が御座います。戸を叩いて一夜の宿を貸して貰ふ事にしませう、サアもう一息です」  
と先に立ち潔く駆け出し、一同漸くとある一つ家の前に着きたり。岩公は門口に立ち、

「もしもしお爺さま、お婆アさま、私は比沼の眞名井や比治山の神様に参詣する者で御座います、龍燈松から此處迄テクつて來ましたが、日はすつぽりと暮れ、膝坊主は吾々の命令を肯ぜなくなりました。何うぞ庭の隅でも宜敷いから一夜の雨露を凌がせて下さいませ」

爺「これお榎、何だか門口に人聲がするやうだ、門を開けて調べてお出で」

お榎「平サン、お前あれだけ酒を呑みてもまだ買うて來いと云ふのかい、かう闇くなつてから私だつて堪らないぢやないか、去年のやうに大江山の鬼雲彦の家來の鬼虎にでも出遇つたら、ドンナ目に遇ふか分つたものぢやない、家の娘もとうとう鬼虎に攫はれて仕舞つたぢやないか、オンオンオン」

平助「ア、年が寄つて耳の聞えぬ奴も困つたものだ。ア、仕方がない、私が行つて開けてやらうかな、ドッコイシヨ、アイタ、腰の骨が強ばつていやもう庭を歩くのも大抵の事ぢやないワイ」

と傍の杖を取りエチエチと表に出て戸をガラリと開け、

「この闇いにお前さま達は何用あつて御座つた」

音彦「ハイ、吾々は比治山の神様に参詣を致すもので御座います、御覽の通り日も暮れました、何うぞ庭の隅つこでも宜敷いから一夜だけおとめ下さい、お辨當

も持参致して居ります、唯とめてさへ貰へばそれで宜敷い」

平助「見れば随分澤山の同勢だが野中の一つ家だと思つて當て込みて來たのだな、とめる事は金輪際出来ませぬ哩、サアサア【とつと】と歸つて下さい、爺と婆と

二人暮しの家ぢや、不都合だらけ平にお断り申ます」

音彦「左様で御座いませうが、折入つてお頼み申す、吾々は決して怪しいものでは御座いませぬ」

平助「去年の此頃だつた、お前のやうな日が暮れてから家の門口に立ち、庭の隅

でもよいからとめてくれと云うて二人の旅人が出てきよつた、其奴が又どえらい悪魔で大江山の鬼雲彦の家來とやらで何でも鬼彦、鬼虎と云ふそれはそれは悪い奴ぢや、其奴めが爺と婆とが爪に火を點して蓄めた澤山のお金を掠奪り、天にも地にも掛け替へのない一人の娘を搔攫うて、今に行方が分らぬのだ、お前さまも大方ソナ連中だらう、皺の寄つた爺と婆とが細い煙を立て暮して居るのだが、婆は爺が頼り爺は婆が頼りだ、婆とは云ひながら矢張女だ、昔の別嬪だ。もし婆でも夜の間に搔攫へられて仕舞ふものなら、この爺は蟹の手足を「もが」れたやうなものだ、エ、氣分の悪い、歸りて下され」

とピシヤツと戸を締める。

音彦「ア、困つたなア、何うしたら宜からうか、今晚は野宿でもして一夜を明かさねば仕方があるまい」

岩公「もしもし音彦さま、千本櫻の鮓屋の段ぢやないが、愛想のないが愛想となると云ふ事があります、此處の爺さまは一旦此鬼彦、鬼虎に偉い目に遇つたものだから、人さへ見れば怖い怖いと思つて居るのですよ、日の暮に宿を頼む奴は



人奪りだと言ふ先入思想に左右されて居るものぢやから、アンナ事を云ふのでせう、誠の力は世を救ふと云ふから、も一つ頼みて見ませう」

と又もや戸を叩き、

岩公「もしもし、お爺さま、吾々は三五教の宣傳使のお伴して来た誠一つの人間で御座います。何卒一晩だけとめて下さいな」

平助「ナニツ、三五教だと、ソナ教は未だ聞いた事もないワ、穴が無うて彼岸過の蛇のやうに探して歩いてるのか、ソナ人には尚更宿つて貰ふ事はお断りぢや、一人よりないお櫓を搔攪つて去なれては耐らぬからなア、ゴテゴテ云はずにお歸りなさい」

岩公「ア、仕方がない、これ程事をわけてお頼みするのに聞いて下さらぬ、世界に鬼はある。鬼と悪魔の世の中だ、慈悲も情も知らぬ奴許りだ。オイ鬼彦、鬼虎の兩人、偉う沈黙して居よるな、貴様の古疵が物を云うて今晚の難儀だ、貴様一つ謝罪らぬかい」

鬼彦「もしもし音彦様、一晩位寝なかつたつて好いぢやありませんか、これも修

業げふだと思おもつて野宿のじゆくを致いたしませうかい」

鬼虎おにとら「ア、さうだ、一晚ひとばんや二晩ふたばん野宿のじゆくして斃くたばるやうな事ことでは三五教あななひけうの信仰しんかうは出来でき

ない、ねえ宣傳使様せんでんしさま、如何どうで御座ございますせう」

音彦おとひこ「ソナナラマアさうするかなア」

岩公いはこう「ヘン旨うまい事ことを云いつて居ゐやがらア、爺婆ぢいばばに會あはず顔かほがあるまい、舊惡露見きうあくろけんの

恐れおそがあるから、貴様きさまとしては無理むりもないが、綺麗薩張きれいさつばりと爺様婆様ぢいさんばさんにお斷ことわりを申まをし

たら何どうだ、何時いつまで迄あくも惡あくを包つつみて居ゐると罪つみは取とれぬぞ、罪つみと云いふ事ことは包つつみと云いふ

事ことだ、何卒改心どうぞかいしんの證據しょうこに爺ぢいさまに一ひとつお詫わびをして思おもふざま十能じふのうで頭あたまを打たたいて貰もらつ

たら、ちつとは罪つみが亡ほろびるだらうよ」

鬼彦おにひこ、鬼虎おにとら、兩手りやうてを組くみ首くびを傾かたむけ、大おほきな息いきを漏もらし居ゐる。此時このとき前方ぜんぱうより二人ふたり

の女をんな走り來くるあり。一同いちどうは目めを圓まるくし、よくよく見みれば、悦よし子こ姫ひめと一人ひとりの娘むすめなり

けり。

娘むすめ「これはこれはお姫様ひめさま、いかいお世話せわになりました、これが妾わたしのお祖父ぢいさま、

お祖母ばあさまの家うちで御座ございます、サア何卒どうぞお入はいり下くださいませ、嗚さぞや祖父そふや祖母そぼが喜よろこ

ぶ事ことで御座ございませう」

悦子よしこ姫ひめ「ヤア妾わたしは此處ここ迄まで送り届とどけたならばこれで安心あんしんしてお暇いとま致いたませう」

娘むすめ「何卒どうぞさう仰おつしや有あらぬと見み苦くるしい破家あばらやなれど、澁茶しぶちやなりと上あげたう御座ございます、一寸ちよつとでも宜敷よろしいからお入はいり下くださいませいな」

闇やみの中なかより、

「ヤア貴女あなたは悦子よしこ姫ひめ様さまでは御座ございませぬか」

悦子よしこ姫ひめ「さう云いふお聲こゑは音彦おとひこさま。この闇くらがりなに何なにをして居ゐらつしやるの」

音彦おとひこ「餘あまり暗くらくなりましたので一夜いちやの宿やどをお強請ねだりして居をるのですが、お爺ぢいさま仲々なかなか許ゆるして呉くれないのですよ」

悦子よしこ姫ひめ「ヤア、委細あさいの様子やうすは此娘このむすめさまから聞ききました、濟すみた事ことを云いふぢやないが、随分ずぶん鬼彦おにひこさまも鬼虎おにとらさまも罪つみな事ことをなさつたものぢやナア、お爺ぢいさまが泊とめて呉くれないのも無理むりはありませぬ、妾わたしがこれからお爺ぢいさまに此娘このむすめを渡わたし、願ねがつて

見みませう」

娘むすめ「お祖父ぢいさま、お祖母ばあさま、節せつで御座ございます、神様かみさまに助たすけられ無事ぶじに歸かへつて來き

ました。何卒開けて下さいませ」

平助此聲に驚き、

「ヤア何、節が歸つた。オイオイお櫓、節が歸つたといなア」

お櫓「爺さま耳が確り聞えぬが、節が歸つたと云うたのか、八テ合點の行かぬ事だ、大方大江山の悪神の眷族奴が節の作り聲をして此家に入り込み、一つ家を幸ひに吾等夫婦の者を引つ張つて去ぬ計略かも知れぬ、迂闊り開けなさるなや」

門口より、お節は優さしひ聲で、

「お祖父さま、お祖母さま、何卒開けて下さい、節で御座います」

平助「何吐しよるのだ、其手は食はぬぞ、作り聲をしようつて、お祖父さま、お祖母さま、節で御座います……ナアーンテ大江山に捕へられて鬼の餌食になつた娘が戻つて来て耐るか、これやこれや門口の奴共、ソナ計略に乗る平助ぢやないぞ、入れるなら入つて見よ、陥穽が拵へて釘が一面に植ゑてあるから、命が惜く無ければ無理に入つて来い」

娘は無理に戸を押し破り飛び込みたるを、爺は、これを見て、

「ヤア紛まがふ方かたなき娘むすめのお節せつ、好ようまア歸かへつて呉くれた。オイ、ぢつとしてぢつとして、動うごくと危あぶないぞ、一ひとつ踏ふみ外はづせば陷おとしあな穽はまに陷はまる、大江山おほえやまの鬼おにの來きた時ときの用よう意いに陷おとしあな穽はまが拵こしらへてあるのぢや、今いまお祖父ぢいが指さし揮づをしてやるから、其その外ほかは歩あるく事ことはならぬぞや」

と云いひながら杖つゑをもつて庭にはに線すぢを引ひ張つば。お節せつは線すぢの上うへを歩あるいて、爺ぢいの居ゐ間に進すすみ入いる。

お榎なら「ヤア、お前まへはお節せつ、好よう歸かへつて下くださつたナア」

と嬉うれし泣なきに泣なき伏ふしぬ。平助へいすけもお節せつの體からだに獅し噛がみつき、

「ヤア戻もどつたか、どうして居をつた」

お節せつ「お祖父ぢいさま、お祖母ばあさま、會あひたかつた哩わいな」

と三人さんにん一度いちどに聲こゑを放はなつて泣なき崩くづれける。

(大正一一・四・一六 舊三・二〇 加藤明子録)

第二章 御禮參詣（六一一）

天にも地にもかけ替なき一人の娘を拐され、爺と婆との二人暮し此世を果敢なみ詛ひつつ、不平たらだら世を送る澁面造りの平助は、思いもよらぬ孫娘のお節がゆくりなく歸り來りしに歡び驚き、手の舞ひ足の踏む處を知らず、音沙汰無かりし娘の便り、姿は見せぬ臭い婆アさまのお櫓と共に屈める腰をへこへこと揺りて飛立つ可笑しさよ。

平助「これこれ、お節、お前は今まで何處に如何して居つたのだ、明けても暮れても婆と二人、お前の事ばかり、噂をして泣いて居りました。能う、まア戻つて下さつた、もう之で此平助も、何時國替しても心の残る事はない、さアさ、一寸様子を聞かして呉れ」

お節「ハイハイ」

と嬉し涙に聲も得立てず、僅に、

「妾は比治山の奥の岩窟に押し込められて居りました。其處へ神さまの様なお方

が現はれて妾を救つて下さいました、今門口まで親切に送り届けて下さりました。  
何卒、お爺さま、お婆アさま宜しう御禮を申して下さい」

平助「ナ、何と言ふ、お前を助けたお方が門に御座るのか、これや斯うしては  
居られぬ、一言お禮を申さねば濟むまい、これこれ婆、お前もお禮を申さぬか」

婆アは莞爾々々し乍ら耳が聞えぬので、

お楢「爺さま、結構ぢやな、早う神さまに御禮を申しませう」

平助「神さまも神さまだが愚圖々々して居ると、助けて下さったお方が歸られる  
かも知れぬ」

とカンテラを點け門口に立出で、

「誰方が知りませぬが、娘を助けて下さつて有難う御座います、御覽の通り矮き  
荒屋で御座いますがお這入り下さいませ、外は此通り雪が溜つて居ます、嘸お寒  
い事でせう、庭で火でも焚きますから」

悦子姫「ア、貴方がお節殿のお爺さままでござりまするか」

平助「へいへい、平助と言ふ爺で御座います、若夫婦には先立たれ、たつた一人

の孫を娘として育て上げ、引き伸ばす様に思うて居りましたのに去年の冬、大江山の鬼雲彦の手下の悪者、鬼彦、鬼虎と言ふそれはそれは意地癖の悪い悪人に大切を攫はれ、寝ても起きてもそればかりを苦しみに病みて泣いて暮して居りました。婆も私もそれが爲めに二十年程も生命が縮みました、お蔭さまでその孫娘に會はれまするのも全く貴方様のお蔭、何卒這入つて悠りとお休み下さいませ、婆も御禮を申し上げ度いと申して居ますから」

悦子姫「ア、御親切は有難う御座いまするが、妾は少しく神界の御用が差し迫つて居りますれば之にて御免を蒙ります、就ては妾より貴方に強つての御願ひが御座います。聞いて下さいませ、御座いますまいか」

平助「生命の親の貴方様、何なつと仰有つて下さいませ、爺の身に叶ふ事なら生命でも差し上げます」

悦子姫「早速の御承知、有難う御座います、此處に居ります者は妾の道連れ、五人の者を何卒今晚丈け庭の隅でも宜いから泊めてやつて下さいませぬか」  
平助「へいへい承知致しました、百人でも千人でも泊つて下さい」



悦子姫「百人も泊る處はありますまい、只五六人泊めて貰へば宜しいのです」  
平助「之は失禮致しまして、あまり嬉しうて爺も脱線を致しました、サアサ皆さま御遠慮なくお這入り下さい、然し乍ら無茶苦茶に這入つて貰うと、大江山の鬼除けの陥穽が御座いますから私の後に跟いてお通り下さい」  
と先に立つ。

悦子姫「左様なら、お節殿に宜しく言つて下さい、御縁があれば又お目にかかります。音彦さま、加米公さま、貴方は今晚お疲勞で御座いませうが妾に跟いて來て下さい。少しく御相談し度い事が御座いますから」

「委細承知仕りました、仰せに従ひお伴致します」

悦子姫は二人を伴ひ急いで此場を立ち去りぬ。岩公、鬼彦、鬼虎、勘、櫟の五人は這入りも得せず門口に立つて「うろろう」して居る。

平助「サアサ皆さま、此處を通つてズツとお這入下さい」

岩公、勘、櫟の三人は平助に跟いて奥に入る。

お櫛「これはこれは皆さま、寒いのに能うまア娘を送つて來て下さつた、何卒今

晩ばんは悠ゆつくり泊とまつて下ください」

岩公いはこう「へい、如何どう致いたしまして、お節せつさまの御存ごぞんじの通とほり私わたくしは悦子よしこ姫ひめ様の家來けらいで御座ございます、お禮れいを言いつて貰もらうと却かへつて困こまります、何卒どうぞ今晚こんばん丈だけ泊とめて下くださらば有難ありがたう御座ございます。ヤア鬼彦おにひこ、鬼虎おにとらの奴やつ、這入はいつて來こぬかい、何愚圖なにぐづぐづ々々して居ゐるのだ」

平助へいすけ「ヤアお前まへは大江山おほえやまの鬼雲彦おにくもひこの同類どうるゐぢやな、鬼彦おにひこや鬼虎おにとらが這入はいつて來きて堪たまるものかい、折角せつかくだが歸かへりて呉くれ歸かへりて呉くれ」

岩公いはこう「モシモシお爺ぢいさま、其鬼彦そのおにひこと鬼虎おにとらと云いふ奴やつは、お節せつさまを助たすけた悦子よしこ姫ひめさまの家來けらいだよ、二人ふたりの奴やつ、到頭たうとう惡あくを後悔ごうくわいしよつて悦子よしこ姫ひめさまの家來けらいとなり、お節せつさまの所在ありかを知らしせたものだから娘むすめが助たすかつたのだよ。今迄いままでの怨恨うらみは水みづに流ながし悦子よしこ姫ひめさまに免めんじて泊とめてやつて下くださいナ」

平助へいすけ「何なんと言いつてもお前まへさま達たち三人さんにんは泊とめるが二人ふたりの餓鬼がきは泊とめられませぬ、這入はいり度たければ勝手かってに這入はいつて來きたが宜よい、勝手かってを知らしずに陷おとし穿あなにはまるだらう」

岩公いはこう「これはしたり、お爺ぢいさま、年としが老よつても敵愾てきが心の強つよい人ひとだな、今迄いままでの事ことは

水に流すのだよ」

平助「水に流せと言つたつて、此怨恨が流されやうか、俺の身にも、チツトは成つて呉れたが宜い哩」

勘公「それやさうぢや、尤もぢや。お爺さまの仰有る通り、拙者の聞く通りぢや、ナア 櫟公」

櫟公「オ、さうともさうとも、誰だつて可愛い娘を假令一年でも苦しめられた親の身として誰だつて黙つて居れようかい、爺さまの仰有るのは至極尤もだ。鬼彦、鬼虎の奴、因縁が報うて來たのだから仕方が無い、今晚は外で立番でもするのが却て今迄の罪亡ぼしになつて良いかも知れぬ」

平助「ア、お前さま等三人のお方、能う言つて下さつた、此爺も大變氣に入つた、サアサ泊つて下さい、誰が何と言つても二人の餓鬼は泊める事は出来ませぬ哩」

家の外にて、

鬼彦「おい兄弟何程泊めてやると言つても、如何も【てれ】臭くて這入れぬぢやないか」

鬼虎「さうだ、昔の因果が廻つて来て心の鬼に身を責められ、暢氣に泊めて貰ふ譯にも往かず、大きな顔をして爺さまや婆アさまに會ふ譯にも往かず、エー仕方がない、音彦さま加米公さままでさへも此雪道を歩いて行かれた位だもの、無理に行つたら行けぬ事はない、此處ばかりが家ぢやない哩、三人の奴は此處で悠り泊めて貰ふ事にし、俺達二人はもう少し「てく」る事に仕様かい」

鬼彦「ア、それが上分別だ、オイ岩公、勘公、櫟公、俺は一足先へ行つて比治山の麓で待つて居るから、夜が明けたら貴様等三人は出て来い、左様なら、お先へ御免だ、貴様等はお節さまの顔でも見て涎でもくるが宜い哩」

と捨臺詞を残し、すたすたと此場を後に比治山の方面指して走り行く。

平助「サア三人さま、奥に炬燵がしてある、寒からうからお這入なさい、俺は今晩はあまり嬉しうて寝られぬから、娘と久し振りに三人が話をするから、茶漬なつと食つて早くお寝み下さい、又明日は祝ひに御馳走をして上げます」

岩公「これはこれはお爺さま、お婆アさま、綺麗な娘さま有難う御座います、ソナラお先へ御免を蒙ります、お辨當は澤山持つて居ますから御心配下さいます

な、今道々握り飯を頬張つて來ましたので餘り腹は減つて居りませぬ、寢まして貰へば結構です」

お節「サアサ皆さま、お寢み下さいませ、妾が御案内致しませう」  
と次の室へ案内する。

岩公「ア、有難い、勘公、櫟公、世界に鬼は無いなア、マヤ悠り寢まして貰はう

かい」

勘公「何だか目がパチパチして寢られないワ」

岩公「寢られなくても、此暖かい炬燵へ這入つて、明日の朝迄ゆつくり休息すれば

宜いのだ」

次の室には三人の家内ひそびそと何か話して居る。

平助「マア何とした嬉しい事だらう、ナアお櫛、之でもう俺は死んでも得心だよ」

お櫛「親爺どの、それや何を言はつしやるのだい、二つ目には死ぬ死ぬつて、ソ

ナ縁起の悪い事を言ふものぢやない、娘が戻つた嬉しさに元氣を出して、之か

ら氣を若う持ち千年も萬年も生延びると言ふ氣になりなさらぬかいな」

平助「オーお櫛、お前は耳がよう聞える様になつたぢやないか、此奴は不思議だ、如何したものだ、殺されたと思ふ娘は歸るし、一生聾耳ぢやと諦めて居た婆の耳は聞え出す、ア、コンナ有難い事があらうか、之と言ふも全く眞名井ヶ原に今度は聞え給うた豊國姫の神様の御利益だ、ちつと雪が溶けたら親子三人お禮詣りに行かうかい」

お櫛「行かうとも行かうとも、道が【あか】いでも今晚でも直に行きたいのだが、三人のお客さまが居らつしやるのだから、今晚夜が明けたら三人のお客さまと一緒に非が邪でも詣りませう、ナアお節、さう仕様ぢやないか」

お節「はいはい妾が案内致しますから御禮參詣をして下さい、然し明日のお客さまの御馳走を考へて置かねばなりません、ナアお爺さま」

平助「オ、さうだつたな、何の御馳走をして上げようか、砂混ぜの御飯をして上げようか、栗石の混ぜ御飯にして上げようか、どちらが宜からうか、ナアお櫛」

お櫛「娘が無事に歸つて呉れたのだから祝ひがてら御馳走を半殺しにしませうか、一層の事皆殺しにして上げようかナア」

お節「皆殺しにするのは大層だから一層の事お爺さま、半殺しが宜しからうぜ」

平助「ア、さうじゃ、半殺しが手間が要らぬで宜いわ、それでは半殺しに定め

ようか、サア之からそろそろ婆アさま、用意に掛らうかな」

隣の室に寝て居る岩公は眞青の顔をして小聲になり、

「オイ、勘公、櫟公、あれ聞いたか」

「オ、聞いた、何と恐ろしい家ぢやないか、砂を混ぜて御飯に食はさうとか、栗

石を入れて御馳走にしようとか、偉い事を言ひよつたぢやないか、一體如何なる

のだらう」

岩公「ソナへどろい」事かい、今三人がひそびそ話をしてるのを聞いて見れ

ば半殺しにしようか、皆殺しにしようかと言うて居つたぢやないか、コンナ處に

愚圖々々して居ると生命がないぞ、何とかして逃げ出す工夫はあるまいか、門口

には陥穽を掘つて居よるし裏は絶壁だし進退維谷るとは此處の事だ、エ、仕方が

無い、逃出そかい、爺の歩きよつた處を覚えて居るから其處へ添つて通れば宜い、

皆の奴、用意をせい、勘、櫟、皆來た、三十六計の奥の手だ」

と起き上りそろりそろりとカンテラの火影を忍びて庭の面を這ひ出したり。平助はフツと庭を見る途端に黒い者が「のさ」のさ這うて居る。

平助「ヤイ、何者ぢや、盗人か」

岩公「ハイ、盗人でも何でも御座いませぬ、夜前の三人の客で御座います」

平助「お前さまは寝惚けたのかい、そこは庭ぢやぜ、さあさ早くお炬燵へ這入つて寝みなさい」

岩公「こら、やいやい、鬼爺、鬼婆、鬼娘、貴様の計略はチヤンと知つて居るの

だ、貴様の様な鬼は飯に砂を入れたり、栗石を入れて喰ふか知らぬが、人間様は

砂や栗石は食らないぞ、お前、半殺しにしようとか、皆殺しにしようとか、それ

や何事だ、老耄爺奴が」

平助「ハ、ハ、ア、お前さまは聞き違ひしたのか、砂混ぜの御飯と言ふのはお

米と栗との御飯ぢや、栗石を混ぜると言ふのはお米と麥との混ぜ御飯ぢやわいな」

岩公「それでも貴様、半殺しにするの、皆殺しにするのと言つたぢやないか」

平助「ハ、ハ、ハ、半殺しと言つたら牡丹餅の事ぢや、皆殺しと言つたら搗いて搗



いて搗ききつた餅の事だ、心配しなさるな」

岩公「何だ、ソナ事だったかい、いや、これやお爺さまの折角の思召、半殺しでも皆殺しでも結構です、どしどし拵へて下さい。おい、櫟、勘、心配するな、

牡丹餅に餡轉餅の御馳走の事だったよ、アハ、ハ、ハ、ハ、」

櫟、勘「ア、それで安心した、何れ丈け膽を潰したか知れたものぢやない、團子

も餅も食れぬ先に胸元に三つ四つ餡轉餅の固まりが出来よつたワ、アハ、ハ、ハ、」

お櫛「サアサ皆様、御心配なしに御寝み下さい、妾は之から皆殺しを拵へます」

岩彦「何分宜しう御頼み申します、同じ事なら半殺しと、皆殺しと兩方頂き度い

ものですな」

お節「ホ、ハ、ハ、」

三人はやつと安心の上、他愛もなく寝に就きける。ふと目を覺せば小鶏の聲。

岩公「ヤア、グツと寝た間にもう夜明けだ。おい皆の奴、早う起きて御馳走を頂

戴しようかい」

お節此場に現はれ、

お節せつ「サアサ皆みなさま、御手洗おてうずをお使つかひ遊あそばせ、半殺はんごろしと皆殺みなごろしとが出来できましたから、どつさりお食あり下くださいませ。今日けふは眞名井まなゐヶ原がはらの豊國とよくにひめ姫かみの神かみさまの出現しゆつげん場ばにお禮れいに詣まゐりますから何卒どうぞ一緒いっしょにお願ねがひ申まします」

岩彦いはひこ外ほか二人ふたりは「ハイ」と答こたへて跳はねおね起おき、手洗ちようづをつかひ牡丹餅ぼたもちと餡轉餅あんころもちを「ウン」と胃いの腑ふに格納かくなし、六人ろくにん打連うちつれ立たつて眞名井まなゐヶ原がはらに宣傳歌せんでんかを謠うたひ乍ながら進すすみ行ゆく。

(大正一一・四・一六 舊三・二〇 北村隆光録)

跋ばつ

小幡神社をばたじんしゃの産うぶの兒こと

生うまれ出いでたる瑞月ずゐげつが

二十五年にじふごねんの時津風ときつかぜ  
産聲揚うぶこゑあげし宮垣内みやがうち

いよいよ吹ふいて北條きたでうの  
清きよく湧わき出づる玉たまの井ゐの

瑞の御魂のコンコンと 果てしも知らぬ神の恩

萬が一にも報いむと 龍宮館を立出でて

恵の雨のふる里に 教の御子を伴ひつ

壬戌の彌生空 月照り渡る川流れ

心を清め身をすすぎ 一行三百五十人

祝詞の聲も高熊の 岩窟さして進み行く

折から降り来る法の雨 西國二十一番の

観音霊場と聞えたる 名さへ床しき穴太寺

三十三相に身を變じ 衆生濟度を誓ひたる

尊き最勝妙如來 佛の御堂の修繕も

全く終へて御開帳 春の日永のぶらぶらと

遠き近きの信徒等が 種々の餘興や舞踊り

旗に幟に吹き散らし 景氣を添ふる揚花火

三十三所の圓頭 練込むほほづき數珠つなぎ

稚兒ちごの行列ぎやうれつ愛あいらしく  
見みとれていつしか知らぬ間に

天臺てんだい宗派しうはの菩提ぼだい山さん  
奥おくの一ひと間まに進すすみ入いり

辨當べんたう茶菓さくわのもてなしに  
院主いんじゆや執事しつじの親切しんせつを

感謝かんしゃに感謝かんしゃ重かさねつつ  
本堂ほんだう庫裏くりに誘いざなはれ

みづの聖像せいざう伏拜ふしをがみ  
雨あめを待まつ間まの酒さけの席せき

抹茶まつちや煎茶せんちやに浮うかされて  
ぶらりぶらりと生うまれ家がの

いぶせき小屋こやに立歸たちかへり  
三みつ日かみ三みよ夜さを棒ぼうにふり

誠まことの杖つゑを突つきながら  
瑞祥閣ずいしやうかくの人ひととなり

又またもや寢言ねごとを福ふくの神かみ  
倒こけ徳利どくくりの一ひとつ口ぐち

身みを横よこたへて惟神かむながら  
出いづるがままに述のべて行ゆく。

大正十一年彌生月

於瑞祥閣 王仁

靈たまの礎いしずゑ（一）

靈界れいかいには神界しんかい、中界ちうかい、幽界いうかいの三大境界さんだいきやうみきがある。

神界しんかいは神道家しんだうかの唱となふる高天原たかあまはらであり、佛者ぶつしやの謂いふ極樂淨土ごくらくじやうどであり、又また耶蘇やそのいふ天國てんこくである。

中界ちうかいは神道家しんだうかの唱となふる天あめの八衢やちまたであり、佛者ぶつしやの謂いふ六道ろくだうの辻つじであり、キリストのいふ精靈界せいれいかいである。

幽界いうかいは神道家しんだうかの唱となふる根ねの國底くにそこの國くにであり、佛者ぶつしやの謂いふ八萬地獄はちまんぢごくであり、又またキリストのいふ地獄ぢごくである。

故ゆゑに天あめの八衢やちまたは高天原たかあまはらにもあらず、また根底ねそこの國くににもあらず、兩界りやうかいの中間ちうかんに介かい在ざいする中程なかほどの位地ゐちにして即すなはち情態じやうたいである。人ひとの死し後ご直ただちに到いたるべき境界きやうみきにして所謂いはゆる

中有である。中有に在ること稍久しき後現界にありし時の行爲の正邪により或は高天原に昇り、或は根底の國へ落ち行くものである。

人靈中有の情態（天の八衢）に居る時は天界にもあらず又地獄にもあらず。佛者の所謂六道の辻または三途の川邊に立ちて居るものである。

人間に於ける高天原の情態とは眞と善と美の相和合せし時であり、根底の國の情態とは邪惡と虚偽とが人間にありて合致せる時を云ふのである。

人の靈魂中に在る所の眞と善と美と和合する時はその人は直に天國に昇り、人の靈魂中に在る邪惡と虚偽と合致したる時は、その人は忽ち地獄に墜つるものである。此の如きは天の八衢に在る時に於て行はるるものである。

天の八衢（中有界）に在る人靈は頗る多數である。八衢は一切のものの初めて

の會合所であつて、此處にて先づ靈魂を試験され準備さるるのである。人靈の八衢に彷徨し居住する期間は必ずしも一定しない、直に高天原へ上るのもあり、直に地獄に落ちるのもある。極善極眞は直に高天原に上り、極邪極惡は直に根底の國へ墜落して了ふのである。或は八衢に數日又は數週日數年間居るものである。されど此處に三十年以上居るものは無い。此の如く時限に於て相違があるのは、人間の内外分の間に相應あると、あらざるとに由るからである。

人間の死するや、神は直にその靈魂の正邪を審判し給ふ、故に惡きものの地獄界に於ける醜團體に赴くはその人間の世にある時その主とする所の愛なるものが地獄界に所屬して居たからである。又善き人の高天原に於ける善美の團體に赴くのもその人の世に在りし時の其愛、其善、其眞は正に天國の團體に既に加入して居たからである。

天界地獄の區劃は此の如く判然たりと雖も、肉體の生涯に在りし時に於て朋友

となり知己となりしものや、特に夫婦、兄弟、姉妹となりしものは、神の許可を得て天の八衢に於て會談することが出来るものである。

生前の朋友、知己、夫婦、兄弟、姉妹と雖も、一旦この八衢に於て別れたる時は、高天原に於ても根底の國に於ても再び相見の事は出来ない。又相識る事も無い。但同一の信仰、同一の愛、同一の性情に居つたものは天國に於て再び相見、相識ることが出来るのである。

人間の死後、高天原や根底の國へ行くに先だつて何人も經過すべき状態が三途ある。そして第一は外分の状態、第二は内分の状態、第三は準備の状態である。この状態を經過する境界は天の八衢（中有界）である。然るに此の順序を待たず直に高天原に上り、根底の國へ落つるものもあるのは前に述べた通りである。直に高天原に上り又は導かるるものは、その人間が現界に在る時神を知り、神を信じ善道を履み行ひ、その靈魂は神に復活して高天原へ上る準備が早くも出来て居



たからである。

また善を表に標榜して内心悪を包藏するもの即ち、自己の凶悪を装ひ人を欺くために善を利用した偽善者や、不信仰にして神の存在を認めなかつたものは、直に地獄に墜落し無限の永苦を受くる事になるのである。

死後高天原に安住せむとして靈的生涯を送ると云ふことは、非常に難事と信ずるものがある。世を捨てその身肉に屬せる所謂情欲なるものを一切脱離せなくては成らないからだと言ふ人がある。此の如き考への人は主として富貴より成れる世間的物を斥け、神、佛、救ひ、永遠の生命と云ふことに關して、絶えず敬虔な想念を凝らし祈願を勵み教典を讀誦して功德を積み世を捨て肉を離れて靈に住めるものと思つて居るのである。然るに天國は此の如くにして上り得るものではない。世を捨て靈に住み肉を離れようと努むるものは却て一種悲哀の生涯を修得し高天原の歡樂を攝受する事は到底出来るものではない。何となれば人は各自の生涯が死後にも猶留存するものなるが故である。高天原に上りて歡樂の生涯を

永遠えいゑんに受うむと思おもはば現世げんせに於おいて世間的せけんてきの業務げふむを採とりその職掌しよくしやうを盡つくし道德的だうとくてき民文的みんぶんてき生涯しやうがいを送おくり、かくして後のち始めて靈的れいてき生涯しやうがいを受うけねばならぬのである。これを外ほかにしては靈的れいてき生涯しやうがいを爲なし、その心靈しんれいをして高天原たかあまはらに上のぼるの準備じゆんびを完まつたし得うべき途みちは無ないのである。内ない的生涯てきしやうがいを清きよく送おくると同時どうじに外ぐわい的生涯てきしやうがいを營いまないものは砂上さじやうの樓閣ろうかくの如ごときものである。或あるは次第しだいに陷没かんぼつし或あるは壁落かべおち床破ゆかやぶれ崩壞ほうくわいし顛覆てんぷくする如ごときものである。ア、惟かむ神靈しんれい幸倍ちへ坐世ませ。

## 靈たまの礎いしず（二）

### 幼兒えうじ嬰兒えいじの死後しご

嬰兒えいじや幼兒えうじの不幸ふかうにして  
狀況じやうきやう具ぐさに演のべておく。

現世界こを去さりしその後あとの

人と現はれ出し身は

必ず復活するものぞ

そは神言と言靈の

力に頼り得ればなり

言靈神語に神眞あり

神眞に由りて復活し

神をば覺り得るものぞ。

嬰兒はその父また母の

善惡正邪に拘はらず

信と不信の區別無く

その死に當りて救世神の

攝受し給ふものなれば

神界にても慇懃に

一大薰陶を受くるなり。

嬰兒は順序に従ひて

教育せられ善と美に

對する情動に浸染し

眞智を培ひ識を得つ

その後知識と證覺と

相伴ひて圓滿の

域に進むに従ひて 遂に天界へ導かれ  
天人神子となるものぞ。

事物の道理に通曉せる 世人は決して一人でも

地獄根底へ行く爲に 生れ出たる者は無し

只神靈界の經綸に 仕ふるために生れし者ぞ

根底の國や地獄へと 落ち行くものは自らの

現世に犯せし罪過にて 身を苦しむる者ぞかし

嬰兒幼兒は世の中に 罪過を犯せし事もなく

清淨の身魂の故ぞかし。

嬰兒幼兒の現界を 去りて他界に到る時は

依然と元の嬰兒なり 無識と無智の其うちに

清淨無垢の所あり 萬事に對して可愛こと

その生前せいぜんと異ことならず  
なるべき資格しかく能力のうりよくの  
ア、惟かむながらかむながら神々々々  
神かみの仁慈じんじの尊たふとさよ。  
彼は神界しんかいの天人てんにんと  
萌芽ほうがを自然しぜんに保有ほいうせり

凡すべての人の現うつし世よを  
また生前せいぜんと同一どういつの  
捨すてて他界たかいに入る時ときも  
状態じやうたいなるぞ不思議ふしぎなれ。

嬰兒えいじは嬰兒えいじの状態じやうたいに  
青年せいねん成人せいじん老人らうじんも  
中ちゆう有う世界せかいに逍遙せうえうす  
轉變てんべんするは其後そのちぞ。  
現界げんかい同どう様やうの状態じやうたいで  
各かく自じの人の状態じやうたいが  
幼えう兒じは幼えう兒じの状態じやうたいに

嬰兒えいじ幼えう兒じの状態じやうたいの  
清淨せいじやう無む垢くにて惡念あくねんの  
他たよりも優まさりしものあるは  
起おこりしこと無なく實際じっさいの

その生涯しやうがいに悪業あくごふの

根底ねそこを下おろさぬ爲ためぞかし

清明せいめい無垢むくの嬰幼兒えいえうじは

神靈しんれい世界せかい一切いっさいの

事物じぶつは心こころに植込うゑこまれ

信まことの眞しんと愛あいの善ぜん

受うくべき器うつはなればなり。

他界たかいに於おける嬰兒みどりこの

その状態じやうたいは現界げんかいの

小兒せうにに凡すべて超越てうゑつす

物質ぶつ的しつてきの形態けいたいを

有いうするものは自身じしんにて

頑鈍くわんどんなればその始はじめ

受うくる所ところの感覺かんかくと

情緒じやうちよは靈界れいかいよりで無なく

外界ぐわいかい起元きげんを辿たどり行ゆく。

故ゆゑに世上せじやうの嬰兒えいじら等は

如何いかに地上ちじやうを歩あゆまむか

如何いかに動作どうさを統制とうせいし

言語げんごを發はつする事ことまでも

學まなばにやならぬ不便ふべんあり

其その感覺かんかくに至いたりても

眼まなこや耳みみや口くちの如ごとき  
それを開ひらかむと焦せうりよ慮りよして  
漸やうやく目的もくてき達成たつせいす。

されど他た界かいの小せう兒にら等は  
これと全まく相あ反はんし  
精せい靈れい界かいに在ある故ゆゑに  
動作どうさ悉こと内ない分ぶんより  
來くれば實じつ習しふを待またずして  
或あるは歩あゆみ且かつ語かたる  
神しん靈れい界かいの天てん人にんの  
言語げんごは概がいして想そう中ちゆうの  
諸しよ概がい念ねんにて調てう停ていされ  
その情じやう動だうより流ながれ出いづ  
これ現げん界かいと靈れい界かいの  
人ひとの相さう違あの有ある點てんぞ。

大正十一年十二月

小こ雨さめふる透とう明めい殿でんの洋やう室しつに

初しよ夏かを籠こもらひ校かう正せいペン採とる

（昭和一〇・五・二八 於透明殿 王仁校正）

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語 第一六卷 如意寶珠 卯の巻

終り